第三章　禮式

第十三條　小林區署職員服制ヲ著用シタルトキハ本章ノ規定ニ從ヒ禮式ヲ行フヘシ

第十四條　敬禮ヲ分チテ室內ノ最敬禮、敬禮及室外ノ最敬禮、敬禮トス室內トハ居室、事務室、應接室、會議室、食堂等ヲ謂ヒ廊下、階段、製材工場等ハ室外トス

第十五條　皇族以上ニ對シテハ最敬禮ヲ行フヘシ

外國ノ君主、皇族、大統領ニ於ケルモ亦前項ニ同シ

第十九條　室內ノ最敬禮ハ正面ノ方向ヲ取リ直立シテ兩足ヲ整ヘ右手ニテ帽ノ前庇ヲ摘ミ之ヲ垂直ニ提ケ其ノ內部ヲ袴ノ縫目ニ著ケ劍ヲ鉤ヨリ外シ左手ヲ以テ其ノ柄ノ上部ヲ握リ體ノ上部ヲ少シク前ニ傾クヘシ

第二十條　兩陛下ニ拜謁スルトキハ御室ニ入リ一タヒ最敬禮ヲ行ヒ更ニ玉座ヲ距ルコト五六歩ノ處ニ進ミ再タヒ最敬禮ヲ行ヒ其ノ儘二三歩退歩シ右回轉ヲナシ御室ノ出口ニ於テ三タヒ最敬禮シ然ル後退出スヘシ但シ特ニ式アルトキハ此ノ限リニ在ラス

皇族及外國ノ君主、皇族、大統領ニ於ケルモ亦前項ニ同シ

第二十一條　室外ノ最敬禮ハ正面ノ方向ヲ取リ直立シテ兩足ヲ整ヘ劍ヲ鉤ヨリ外シ左手ヲ以テ其ノ柄ノ上部ヲ握リ右手ヲ擧ケ五指ヲ整接シテ食指ト中指ヲ帽ノ前庇ノ右側ニ當テ掌ヲ稍ヤ外面ニ向ケ肘ヲ肩ニ齊シクシ敬スヘキ人ニ注目スヘシ

第二十二條　行幸行啓ニ遇フトキハ前驅ノ稍ヤ前ヨリ道路ノ一側ニ停止正面（乘車スル者ハ下車）車駕五六歩前ニ近ツクトキ最敬禮ヲ爲シ五六歩過キ去ル迄其ノ姿勢ヲ保ツヘシ

皇族及外國ノ君主、皇族、大統領ニ於ケルモ亦前項ニ同シ

○北海道廳森林監守服裝帶劍並禮式規定

明治三十二年六月二十二日　內務省訓令第二十一號

北海道廳森林監守服裝帶劍並禮式ニ關スル規定ハ（明治二十四年七月農商務省訓令第三十號）ヲ準用スヘシ

○陸軍禮式（摘錄）

明治三十四年五月四日　陸軍省陸達第三十二號

陸軍禮式別冊ノ通改正セラル

（別冊）

陸軍禮式

第一編　總則

第一條　本禮式中將官或ハ將校ト稱スルハ明文アルモノノ外同相當官ヲ含ム又上官ト稱スハ階級ノ上ナル者ヲ謂フ

軍人ト稱スルハ將校並相當官、准士官、下士、兵卒及雜卒、諸職工ヲ謂フ

部隊ト稱スルハ武裝セルト否トニ關セス又人員ノ多寡ニ拘ラス隊伍ヲ組ミタルモノヲ謂ヒ隊長ト稱スルハ其部隊ノ大小ヲ問ハス之ヲ引率スル者ヲ謂フ

衛兵ト稱スルハ明文アルモノノ外衛戍諸衛兵竝風紀衛兵ヲ謂フ

歩哨ト稱スルハ野外ニ於ケル歩哨ノ外徒歩ニ在ル他ノ諸歩哨ヲ謂フ

第七條　部隊、衛兵ノ敬禮ハ晝間ニアラサレハ行フコトナシ

第九條　皇太子、皇太子妃、皇太孫、皇太孫妃、親王、親王妃、內親王、王、王妃、女王ニ對シテハ特ニ規定アルカ又ハ明文アルモノノ外公式ノ場合ニ限リ天皇ニ準スル敬禮ヲ行フ

外國ノ君主、皇族ニ對シテハ特ニ規定アルモノノ外天皇若ハ皇族ニ準スル敬禮ヲ行フ但シ公式ノ場合ニ限ル

第十條　皇族、武官ノ職ヲ奉シ其ノ職務執行中ハ其ノ武官相當ノ禮式ニ從フ

第二編　敬禮

第一章　軍人ノ敬禮

第一節　室內ノ敬禮

其一　通則

第十六條　室內トハ居室、事務室、應接所等ヲ謂ヒ廊下及庖厨等ノ如キハ室外ニ屬ス但シ宮中ニ在リテハ特ニ其ノ規定ニ從フ

賓所參拜其ノ他軍人拜神ノ禮ハ室內ノ敬禮トス

第十七條　軍人室內ニ入ルトキハ戶外ニ於テ帽ヲ脫スヘシ但シ下士兵卒武器ヲ手ニ持ツトキハ此ノ限ニ在ラス

第十八條　軍人室內ノ敬禮ハ敬スヘキ人ニ面シテ姿勢ヲ正シ其ノ眼ニ注目シテ體ノ上部ヲ少シク前ニ傾クルモノトス若シ帽ヲ手ニ持ツトキハ右手ニテ其ノ前庇ヲ摘ミ之ヲ垂直ニ提ケ帽ノ內部ヲ右股ニ對セシム刀ヲ佩ルトキハ柄ヲ後ニシ兩鐶ノ間ヲ握ル

其二　將校ノ敬禮

第二十六條　天皇（太皇太后、皇太后モ之ニ準ス以下同シ）ニ拜謁スルトキハ御室ニ入リ一タヒ敬禮シ更ニ玉座ヲ距ルコト約六歩ノ所ニ進ミ二タヒ敬禮ヲ行ヒ其ノ儘二三歩退歩シ右轉回ヲ爲シ御室ノ出口ニ於テ三タヒ敬禮シ然ル後退去スヘシ但シ特ニ式アルトキハ此ノ限ニ在ラス

第二節　室外ノ敬禮

其一　通則

第三十一條　軍人室外ノ敬禮ハ擧手注目トス其ノ法姿勢ヲ正シ右手ヲ擧ケ諸指ヲ接シテ伸シ食指ト伸指ヲ帽ノ前庇ノ右側ニ當テ掌ヲ稍外面ニ向ケ肘ヲ肩ニ齊クシ受禮者ノ眼又ハ敬スヘキモノニ注目ス

第三十五條　軍人、途上ニ於テ行幸ニ遇フトキハ前驅ノ稍前ヨリ道路ノ一側ニ停止正面（乘馬ハ其ノ儘乘車ハ下車）シ車駕六歩前ニ近ツクトキ敬禮ヲ行ヒ六歩過キ去ル迄此ノ姿勢ヲ保ツヘシ但シ公式ノ行裝ニアラサルトキハ場合ニ依リ乘車ノ軍人ハ道路ノ一側ニ停止シ

其ノ儘敬禮ヲ行フモ妨ケナシ

其二　將校ノ敬禮

第四十七條　將校、扳刀シアルトキハ天皇及軍旗ニ對シ又ハ隊伍ニ在ルトキニ限リ左ノ方法ヲ以テ之ヲ行ヒ其ノ他ノ場合ニ在リテハ肩刀ニテ姿勢ヲ正シ受禮者ニ注目スヘシ

第一節　刀ヲ垂直ニ上ケ其ノ刃面ヲ顔ノ中央ニ對セシメ鍔ヲ肩ノ高サニ齊クシ肘ハ自然ニ體ニ近接ス

第二節　右臂ヲ全ク伸シテ刀ヲ斜ニ下ケ爪ヲ上ニシテ拳ヲ右股ヨリ少シク離シ受禮者又ハ敬スヘキモノニ注目ス

第三節　再ヒ刀ヲ擧ケテ之ヲ肩ニス其ノ法刀ノ柄ヲ右手ノ拇指ト食指、中指トノ間ニ保持シ他ノ二指ヲ柄ノ外ニ附シ其ノ手ヲ右臆骨ノ稍下方ニ接着シ刀身ヲ垂直ニ立テ刀背ヲ肩ノ凹部ニ托シ微シク臂ヲ屈シ肘ヲ後方ニ出ス

其三　下士兵卒ノ敬禮

第四十九條　下士兵卒、執銃、執刀又ハ執槍シアルトキノ敬禮ハ天皇ニハ捧銃、捧刀又ハ捧槍シ第三十五條ニ據リ之ヲ行ヒ(以下略ス)

第五十條　下士兵卒、喇叭ヲ携フルトキノ敬禮ハ前條ニ同シ但シ其ノ携持法ハ紐ヲ頸ニ掛ケ右手ノ四指ヲ接シ拇指ヲ上ニシ喇叭ノ後身ト前身トヲ握リ接着管ヲ右手ノ脈部ニ接シ漏斗狀ノ邊端ヲ右臆骨下部ニ當テ口管ヲ右足尖ノ方向ニ一致セシメ之ヲ水

平ニ保持シ臂ハ自然ニ體ニ接着スルモノトス乘馬ノ時ニ在リテモ亦之ニ同シ只漏斗狀ノ邊端ヲ右股ニ當テ口管ヲ上ニシ之ヲ保持スルヲ異ナリトス

第五十一條　下士兵卒、物件ヲ提携シ右手ヲ擧クルコト能ハサルトキ若ハ之ヲ擔荷シアルトキハ第四十八條ニ準シ其ノ儘停止シ若ハ停止スルコトナク軍旗又ハ受禮者ニ注目シテ禮意ヲ表スヘシ

第五十二條　憲兵下士上等兵ハ職務執行ノ爲止ムヲ得サル場合ニ在リテハ敬禮ヲ行ハサルモ妨ナシ

第二章　部隊ノ敬禮

第二節　停止間ノ敬禮

第六十三條　天皇ニ對シテハ隊列ヲ正シ步兵、要塞砲兵、工兵ニ在リテハ銃ニ劍ヲ裝シ捧銃ヲ行ヒ騎兵ニ在リテハ捧刀若ハ立槍シ野戰砲兵ニ在リテハ砲手ハ其ノ定位ニ立チテ不動ノ姿勢ヲ執リ輜重兵ニ在リテハ乘馬シアルトキハ捧刀シ馱馬又ハ車輛ヲ輓クトキハ其ノ傍定位ニ立チ不動ノ姿勢ヲ執リ輜重兵ニ在リテハ將校ハ皆刀ヲ以テ敬禮シ軍旗又敬禮ヲ行ヒ喇叭「君カ代」ヲ吹奏ス(車駕隊列ヨリ約三十步ノ所ニ來ルトキ吹奏ヲ始メ約十五步過去ルニ至リテ止ム)但シ公式ノ行裝ニアラサルトキハ場合ニ依リ步兵、要塞砲兵、工兵ハ銃ニ劍ヲ裝セス下馬ノ騎兵及輜重兵ハ其ノ儘定位ニ立チ不動ノ姿勢ヲ執リ敬禮スルモ妨ナシ

第六十八條　第六十三條ノ場合ニ於テハ車駕隊列ヨリ約三十步ノ所ニ來ルトキ敬禮ノ

姿勢ヲ執リ約十五歩過去ル迄其ノ姿勢ヲ保チ(以下略ス)

第六十九條　第六十三條乃至第六十七條ノ敬禮ハ受禮者ノ通過スル方ニ面シテ整列シ之ヲ行フモノトス但シ騎兵、野戰砲兵、輜重兵途上縱隊ニ在ルトキハ場合ニ依リ其ノ儘敬禮ヲ行フモ妨ナシ

第七十條　儀式、祭典等ノ爲其ノ場所ニ整列シアル部隊ハ天皇ニ對スルノ外敬禮ヲ行フコトナシ

第三節　行進間ノ敬禮

第七十一條　天皇ニ對シテハ直ニ停止シ道路ノ一側ニ整列シ第六十三條第六十八條ニ據リ敬禮ヲ行ヒ鹵簿隊列ヲ過去ル後再ヒ行進ヲ始ム但シ公式ノ行裝ニアラサルトキハ場合ニ依リ道路ノ一側ニ停止シ其ノ隊形ノ儘(歩兵、要塞砲兵、工兵ニアリテハ銃ニ劍ヲ裝セズ)敬禮ヲ行フモ妨ケナシ

第四節　途歩行進間ノ敬禮

第七十九條　天皇ニ對シテハ第七十一條ニ據リ敬禮ヲ行フ其ノ休憩セルトキ亦同シ

第五節　演習間ノ敬禮

第八十三條　天皇、練兵場ニ親臨アルトキハ最初ニ之ヲ認知シタル隊長先ツ喇叭手ヲシテ「氣ヲ付ケ」ヲ吹奏セシメ各隊皆演習ヲ止メ其ノ位置ニ於テ第六十三條ニ準シ敬禮ヲ行ヒ各隊長ハ駈歩ニテ車駕ノ許ニ至リ演習ノ次第ヲ奏上ス而シテ勅命アルカ又ハ車駕其ノ場ヲ去ルニアラサレハ演習ヲ始ムヘカラス

車駕其ノ場ヲ去ルニ方リテハ再ヒ前項ニ準シ敬禮ヲ行フヘシ

第八十六條　第八十三條及第八十四條ノ場合ニ在リテハ銃ヲ交叉シ或ハ下馬シテ休憩セルトキト雖「氣ヲ付ケ」ノ號音ニテ皆銃ヲ取リ或ハ乘馬シ整列シテ敬禮ヲ行ヒ第八十五條ノ場合ニ在リテハ其ノ儘各自ニ姿勢ヲ正シ其ノ隊長ノミ敬禮ヲ行フヘシ

第八十七條　射擊場及作業場等ニ於テモ亦演習上妨ナキトキニ在リテハ練兵場ニ準スルモノトス

第八十八條　野外演習若ハ之ニ準スル特別ノ演習實施中ハ部隊ノ敬禮ヲ行ハス

第六章　端船ノ敬禮

第八十九條　天皇ニ對シテハ直ニ航進ヲ停メ端船長起立シテ敬禮ヲ行ヒ御船過去ル後再ヒ航進ヲ始ム但シ櫓手ハ櫓ヲ收ムルコトナシ

第九十二條　帆走ノ端船ニ在リテハ帆ヲ下シタル後第八十九條乃至第九十一條ノ敬禮ヲ行フヘシ

第九十五條　端船附屬員外ノ乘員ハ第八十九條ノ場合ニ在リテハ起立シテ單獨ノ敬禮ヲ行ヒ其ノ他ノ場合ニ在リテハ端船ノ禮式ニ關セス居坐ノ儘姿勢ヲ正スモノトス

第三章　衛兵ノ敬禮

第九十九條　衛戍ノ諸衛兵ハ左ニ列記スルモノニ對シテハ門外又ハ衛舍前ニ横隊ニ整

列シ銃或ハ槍ヲ執リ（野戰砲兵ハ不動ノ姿勢ヲ執リ）敬禮ヲ行フヘシ其ノ敬禮ヲ行フヘキ距離及隊列ノ正面ハ場所ノ模樣ニ依リ適宜ニ之ヲ定ムルモノトス但シ第三、第四ニ掲クルモノニ對シテハ其ノ門ヲ出入スルトキニ限ル

一　天皇、皇族

（二號乃至四號略ス）

第百條　風紀衛兵ハ天皇ニ對シテハ門外又ハ衛舍前ニ整列シ左ニ列記スルモノニ對シテハ其ノ屯營門ヲ出入スルトキ衛舍前ニ整列シ銃或ハ槍ヲ執リ（野戰砲兵ハ不動ノ姿勢ヲ執リ）敬禮ヲ行フヘシ

一　皇族（太皇太后、皇太后、皇后ヲ除ク以下同シ）

（二號乃至四號略ス）

第百二條　衛兵、天皇ニ對シテハ第六十三條ニ準シ敬禮ヲ行フヘシ

第百七條　屯營以外ニ宿營セル軍隊ノ風紀衛兵ハ本章ノ規定ヲ準用ス但シ別ニ規定アルモノハ此ノ限ニ在ラス

第四章　步哨ノ敬禮

第百八條　步哨ハ左ニ列記スルモノニ對シ敬禮ヲ行フヘシ

一　天皇、皇族

（二號乃至六號略ス）

第百九條　步哨、敬禮ヲ行フニハ其ノ定位地ニ立チ（若シ哨舍內ニ在ルトキハ必ス之ヲ出ルモノトス）受禮者約六步前ニ來ルトキ敬禮ノ姿勢ヲ執リ頭ヲ其ノ方ニ向ケ之ニ注目シツツ六步過去ル迄其ノ姿勢ヲ保ツヘシ

第百十一條　步哨ハ夜間ニ在リテモ受禮者タルヲ識別スレハ敬禮ヲ行フヘシ

第百十二條　步哨ノ敬禮ハ第百八條ノ第一乃至第四ニ掲クルモノニ對シテハ捧銃又ハ捧槍シ第五、第六ニ掲クルモノニ對シテハ執銃又ハ執槍ノ儘姿勢ヲ正スモノトス

第百十八條　步哨、野戰砲兵ナルトキハ何レノ場合ニ在リテモ擧手注目ノ敬禮ヲ行フヘシ

第三編　儀式

第一章　儀仗

第一節　通則

第百十九條　儀仗ノ爲天皇及高貴ノ人ニ供スル部隊ヲ儀仗兵ト稱ス

第百二十條　儀仗兵ヲ分テ二トス卽チ左ノ如シ

一　儀仗隊

二　儀仗衛兵

第百二十一條　儀仗隊トハ天皇及其ノ儀仗ヲ受クル人軍隊屯在地着發ノ時ニ方リ行在所又ハ旅館ト波止場、停車場等ノ間途上ノ警衛ニ任スルモノヲ謂ヒ儀仗衛兵トハ行

在所又ハ旅館ノ守衛ニ任スルモノヲ謂フ

第百二十二條　儀仗隊ヲ出ス場所ハ儀仗ヲ受クル人海路鐵道ヲ採ルトキハ波止場又ハ停車場トシ其ノ他ノ道路ヲ採ルトキハ市外約十丁ノ所トス但シ市外ニ至ルノ距離甚タ遠クシテ儀仗隊歩兵ナルトキハ市内適所ニ出スヲ要ス此ノ場所ハ要スレハ衛戍司令官之ヲ定ム

第百二十三條　儀仗兵ハ首トシテ騎兵若ハ歩兵ヲ用ウ故ニ他ノ兵種ヲ用ウルトキハ其ノ編成ハ此ノ二兵種ニ準シテ衛戍司令官適宜之ヲ定ム

第百二十四條　儀仗兵ハ左ニ列記スルモノニ對シ之ヲ供スルモノトス

一　天皇、皇族

（二號略ス）

第百二十五條　儀仗兵ヲ供スルハ左ニ列記スル場合ノ外特ニ規定アルカ又ハ特ニ命令アルトキニ限ル

一　天皇皇族、軍隊屯在地ニ行幸、行啓若ハ通御アリテ其ノ地着御及發御ノ時

（二、三號略ス）

第百二十七條　儀仗兵ハ晝夜ノ別ナク何レノ時ト雖之ヲ供スルモノトス

第百二十八條　儀仗兵ハ正裝ヲ爲スヘシ

第百二十九條　儀仗兵ノ敬禮ハ其ノ儀仗隊ニ在リテハ部隊ノ禮式ニ據リ儀仗衛兵及歩哨ニ在リテハ衛兵及歩哨ノ禮式ニ據ルヘシ

第百三十一條　儀仗兵ノ編成ハ第百三十二條及第百三十三條ニ掲クル如シト雖場合ニ依リ其ノ人員此ノ編成ニ充タサル時ハ衛戍司令官適宜ニ之ヲ定ムヘシ

第二節　儀仗隊

第百三十二條　儀仗隊ノ編成ハ受禮者ニ依リ區別アルコト左ノ如シ

一　天皇ニハ騎兵一中隊若ハ歩兵一大隊ニシテ軍旗ヲ植テ聯隊長之ヲ指揮ス

二　皇族ニハ騎兵二小隊若ハ歩兵二中隊ニシテ軍旗ヲ植テ歩兵ハ大隊長騎兵ハ中隊長之ヲ指揮ス

（二號乃至五號略ス）

第三節　儀仗衛兵

第百三十三條　儀仗衛兵ノ編成及歩哨ノ種類ハ受禮者ニ依リ區別アルコト左ノ如シ

一　天皇ニハ歩兵一中隊ヲ軍旗ト共ニ出シ大隊長之ヲ指揮シ正門ノ歩哨ハ複哨トス

二　皇族ニハ歩兵二小隊ヲ軍旗ト共ニ出シ中隊長之ヲ指揮シ正門ノ歩哨ハ複哨トス

（三號乃至五號略ス）

第百三十四條　儀仗衛兵ハ天皇及其ノ儀仗ヲ受クル人ニ對シテハ夜間ト雖敬禮ヲ行フヘシ

第百三十五條　天皇及高貴ノ人軍隊屯在地着發ノ時迎送ノ爲軍隊整列スル之ヲ迎送式ト稱ス

第百三十六條　迎送式ハ左ニ列記スルモノニ對シテ行フモノトス

一　天皇、皇族

（二號略ス）

第百三十七條　迎送式ヲ行フハ第百二十五條ニ揭クル場合ノ外特ニ規定アルカ又ハ特ニ命令アルトキニ限ル

第百三十八條　迎送式ハ晝間ニアラサレハ行フコトナシ

第百三十九條　迎送式ニハ將校ハ通常禮裝下士以下ハ略裝ヲ爲スヘシ

第百四十條　迎送式ノ爲整列スヘキ部隊ノ兵數ハ受禮者ニ依リ區別アルコト左ノ如シ

一　天皇ニハ該地衛戍兵悉皆

二　皇族ニハ該地衛戍兵約二分ノ一

（三、四號略ス）

第百四十一條　迎送式ノ爲部隊ノ整列スル場所ハ波止場、停車場又ハ市ノ入口ト行在所又ハ旅館トノ間ニシテ道路ノ一側又ハ兩側ニ整列ス但シ隊列ノ位次ハ受禮者ノ來ルヘキ方ヲ上トス此ノ場所ハ要スレハ衛戍司令官之ヲ定ム第百四十條ノ場所亦之ニ準ス

天皇、汽車等ニテ通御ノ時モ前項ニ準ス

第百四十二條　迎送式ノ爲整列スル部隊ハ受禮者其ノ場ニ來着スルトキ第六十三條、第六十四條及第六十七條ニ據リ敬禮ヲ行フヘシ

第百四十三條　天皇皇族着御ノ時ハ師團長及衛戍司令官ハ波止場、停車場又ハ市ノ入口ニ奉迎シ而シテ行在所又ハ旅館迄隨從ス其ノ發御ノ時ハ之ニ反ス但シ此ノ場合ニ於テ師團長及衛戍司令官ハ要スレハ參謀官若ハ副官ヲ隨フルコトヲ得

第百四十四條　天皇、着御及發御ノ時ニ限リ該地所在ノ諸將校悉皆奉迎、奉送ヲ爲スヘシ

第三章　伺候式

第百四十五條　天皇及高貴ノ人軍隊屯在地着發ノ時行在所又ハ旅館ニ將校參伺スル之ヲ伺候式ト稱ス

第百四十六條　第百三十六條乃至第百三十九條ハ伺候式ニモ亦適用ス

第百四十七條　伺候式ハ受禮者ニ依リ區別アルコト左ノ如シ但シ各自ノ伺候ヲ各階級ノ總代伺候ニ換フルコトヲ得

一　天皇皇族ニハ該地所在ノ士官以上行在所又ハ旅館ニ伺候ス

（二、三號略ス）

第百四十八條　伺候式ハ到着後二十四時間以内出發前二十四時間以内ニ於テスルヲ例

トス

第百四十九條　伺候式ハ拜謁又ハ對謁スルヲ例トス然レトモ時宜ニ依リ拜謁ヲ賜ハラス又ハ受禮者對謁ヲ辭スルトキハ只官氏名ヲ帳簿ニ記スルカ若ハ名刺ヲ呈シ其ノ禮意ヲ通スヘシ

第百五十條　伺候式ニ在リテハ特更ニ對話陳述ヲ要スルニアラサレハ敬禮ヲ行フノ後直ニ退去スルモノトス

第百五十一條　伺候式ハ一定ノ時限ヲ期シ止ムヲ得サル支障アル者ノ外所在ノ將校皆同時ニ行フヲ要ス故ニ該地衛戍司令官其ノ時限ヲ定メ一般ニ通達スヘシ

第四章　觀兵式

第百五十二條　天長節、陸軍始其ノ他臨時ノ儀式等ニ依リ團隊ヲ集合シ整飾シテ觀閲ニ供スル之ヲ觀兵式ト稱ス

第百五十三條　觀兵式ヲ分テ二トス卽チ左ノ如シ

一　閲兵式

二　分列式

第百五十四條　觀兵式ハ左記ニ列スルモノニ對シ行フモノトス但シ之ヲ行フハ天長節、紀元節、陸軍始ノ外特ニ規定アルカ又ハ特ニ命令アルトキニ限ル

一　天皇、皇族

（二、三號略ス）

第百五十五條　觀兵式ニ出場スル者ハ正裝ヲ爲スヘシ

第百五十七條　天皇ニ對シ觀兵式ヲ行フトキニ限リ該地所在ノ諸將校悉皆出場スヘシ

第百五十八條　天長節、陸軍始ニ當リテハ小衛戍地ノ軍隊及分遣隊ニ在リテモ亦本章ノ規定ニ準シ其ノ隊長分列式ヲ行フヘシ

第百五十九條　觀兵式ニ關スル細部ノ規定ハ本禮式附錄ニ從フ此ノ附錄ハ陸軍大臣之ヲ定ム

第五章　禮砲式

第百六十條　敬禮ノ爲發砲スル之ヲ禮砲式ト稱ス

第百六十一條　禮砲式ハ紀元節、天長節其ノ他臨時ノ祝日ニ當リ行フノ外左ニ列記スルモノニ對シテ行フモノトス

一　天皇、皇族

（二號略ス）

第百六十二條　禮砲式ノ發砲數ニ區別アルコト左ノ如シ

一　紀元節、天長節及臨時祝日ニハ百零一發

二　天皇ニ對シテハ百零一發

三　皇族ニ對シテハ二十一發

（四、五號略ス）

第百六十三條　禮砲式ヲ行フハ左ニ列記スル場合ノ外特ニ規定アルカ又ハ特ニ命令アルトキニ限ル

一　紀元節、天長節

二　天皇、皇族、野戰砲兵隊（臺灣守備砲兵隊ヲ含ム）屯在ノ地ニ行幸、行啓若ハ通御アリテ其ノ地着御及發御ノ時

（三、四號略ス）

第百六十四條　禮砲式ハ晝間ニアラサレハ行フコトナシ而シテ紀元節、天長節其ノ他臨時ノ祝日ニ於テスルモノハ特ニ命令アルニアラサレハ當日正午ニ之ヲ行フモノトス

第百六十五條　紀元節、天長節其ノ他臨時祝日ニ於テスル禮砲式ハ全國各野戰砲隊悉皆之ヲ行フモノトス

第百六十六條　同一衛戍地ニ數個ノ砲兵隊集圍シアル場合ニ於テハ其ノ內ノ一隊ヲ限リ發砲ヲ爲スモノトス

明治十五年十二月二十八日
陸軍省送乙第五二二九號

別紙之通太政大臣ヨリ御達有之候條此旨相達候事

（別紙）

勅使通行之節皇居御門始其他之番兵若クハ儀仗兵ハ捧銃式ヲ行ヒ隊伍編制途上通行之諸兵ハ其隊長ノミ劍ヲ以テ敬禮スヘシ

此旨相達候事

明治二十五年十月十一日
陸軍省陸達第七十二號

陸軍軍人參內參拜ノ節自今左ノ通心得ヘシ

一　參內ノ節ハ昇殿ノ際ヨリ室內ハ勿論廊下ト雖トモ脫帽スヘシ

一　宮中諸祭典竝ニ賢所參拜ノ節ハ脫帽拜禮スヘシ

○陸軍軍屬ノ敬禮

明治二十年十二月四日
陸軍省陸達第百十三號

陸軍軍屬ノ敬禮ハ軍人同樣陸軍禮式ヲ遵守スヘシ其奏任官以上ハ將校ニ判任官以下ハ下士以下ニ準ス但理事ノ制服ヲ著用スル場合竝ニ陸軍監獄看守長及看守ヲ除クノ外舉手注目ヲ脫帽注目ニ換フ

明治二十年陸達第六號及同二十四年陸達第十六號ハ廢止ス

○海軍敬禮式（摘錄）

明治三十年一月二十五日
海軍省達第六號　改正　三一年第三八號、三七年第一三四號、三八年第一八五號、三九年第一八號

海軍敬禮式別冊ノ通定メラル

（別冊）

海軍敬禮式

第一章　總則

第一條　海軍敬禮式ハ海軍軍人ノ敬禮ニ關スルコトヲ規定ス

第二條　本式中軍人ト稱スルハ將校同相當官兵曹長同相當官候補生准士官生徒及下士卒ヲ謂ヒ上官ト稱スルハ階級ノ上ナル者ヲ謂ヒ軍隊ト稱スルハ武裝セルト否トニ關セス又人員ノ多少ニ拘ラス隊伍ヲ組ミタルモノヲ謂ヒ隊長ト稱スルハ其ノ軍隊ノ大小ヲ論セス之ヲ引率スル者ヲ謂フ

第三條　本式中艦船ト稱スルハ軍艦驅逐艦水雷艇潛水艇及排水量十五噸以上ノ船舟ヲ謂ヒ舟艇ト稱スルハ軍艦ニ搭載スル水雷艇小蒸汽船端舟及排水量十五噸ニ滿タサル船舟ヲ謂フ

第五條　敬禮ハ公然ノ通知ヲ受ケタルトキ若クハ制服著用ノトキニ行フヲ例トス然レトモ各個ノ敬禮ハ面識アル人ニ對シテハ其ノ著服ノ如何ヲ論セス之ヲ行フヘシ

第七條　端舟軍隊及衛兵ノ敬禮ハ別ニ規定アルカ又ハ特ニ命令アル場合ノ外晝間ニ非サレハ行フコトナシ

第八條　軍人「君ケ代」ノ奏樂ヲ聞クトキハ時ト場合トヲ問ハス姿勢ヲ正フスヘシ

第九條　皇族竝ニ外國ノ皇帝皇族若クハ大統領ニ對シテハ本式中規定アルモノ又ハ特ニ式アルモノヽ外總テ天皇ニ準シ敬禮ヲ行フ但之ヲ行フハ公式ノ場合ニ限ル

前項ニ依リ外國ノ皇帝皇族若クハ大統領ニ對シ敬禮ヲ行フトキハ其ノ國ノ樂譜ヲ奏スルヲ例トス

第十條　皇族文武官等ノ資格ニ於ケルトキハ其ノ本官職等ニ相當スル敬禮ヲ行フヘシ

第十二條　本式ニ規定セサル場合若クハ艦船ノ構造運用上及演習等ニ依リ本式ノ規定ヲ適用スルコト能ハサルトキハ適宜之ヲ取捨スルコトヲ得

第十四條　候補生ノ敬禮ハ士官ニ同シ

第十五條　生徒ノ敬禮ハ下士ニ同シ

第十六條　驅逐艦水雷艇及潛水艇ノ敬禮ハ適用シ得ル限リ第三章ニ準據シ軍艦ニ搭載スヘキ水雷艇ノミハ第四章ニ準據スヘシ但驅逐隊司令及艇隊司令ニ對シテハ艦長ニ對スル敬禮ヲ準用シ軍艦ニ於テ衛兵司令ノ指揮ヲ以テ衛兵禮式ヲ行フ場合ニハ乘員上甲板ニ整列シテ敬禮ヲ行フヘシ

第十七條　本式中特ニ規定スルモノヲ除クノ外所在海軍先任將校ノ命令アルニ非サレハ祝聲等ヲ發スヘカラス

第十七條ノ三　本式ニ規定セサル特別ノ場合ニ行フヘキ禮式ハ海軍大臣臨時之ヲ定ム

第二章　各個ノ敬禮

第十八條　各個ノ敬禮ハ分テ室內ノ敬禮室外ノ敬禮トス

第十九條　室內トハ公室私室事務室講堂會食所諸倉庫應接所等ヲ謂ヒ室外トハ諸甲板端舟砲臺通路廊下等ノ類ヲ謂フ但宮中ニ在テハ特ニ其ノ規定ニ從フ

第二十條　事業中ノ者ハ場合ニ依リ本章ノ敬禮ヲ行ハサルコトヲ得又操練中ノ者ハ之ヲ行ハサルヲ例トス但別ニ規定アルモノハ此ノ限ニアラス

第二十條ノ二　儀式祭典等ニ參與スル軍人ハ該式典ノ爲ニスルノ外式ノ執行中敬禮若ハ答禮スルコトナシ

職務上皇族若ハ長官ニ隨從スル軍人ハ該皇族若ハ長官カ敬禮スル場合ノ外敬禮スルコトナシ

一　室內ノ敬禮

第二十一條　軍人室內ニ入ルトキハ戶外ニ於テ先ツ帽ヲ脫スヘシ但下士卒銃ヲ携フルトキハ此ノ限ニアラス

第二十三條　室內ノ敬禮ハ敬禮スヘキ人ニ對シテ正面シ姿勢ヲ正シ其ノ眼ニ注目シテ體ノ上部ヲ少シク前ニ傾ク但帽ヲ手ニ持ツトキハ右手ニテ其ノ前部ヲ摘ミ之ヲ垂直ニ提ケ其ノ內部ヲ右股ニ對セシム又劍ヲ佩フルトキハ之ヲ鉤ヨリ外シ左手ヲ以テ其ノ柄ノ上部ヲ握ルヲ例トス時宜ニ依リ第二十四條ノ場合ヲ除クノ外鉤ニ掛ケタル儘左手ヲ以テ其ノ鞘ヲ握ルコトヲ得

下士卒銃ヲ携フルトキニ於ケル室內ノ敬禮ハ室外ノ敬禮ニ同シ

第二十四條　軍人　天皇ニ拜謁スルトキハ御室ニ入リ一タヒ敬禮シ玉座ヲ離ルヽコト凡ソ六步ノ所ニ進ミ二タヒ敬禮シ數步退キ御室ノ出口ニ於テ三タヒ敬禮シ然ル後退去スヘシ但特ニ式アルトキハ此ノ限ニアラス

第三十四條　賢所參拜並ニ宮中諸祭典ノ場合ニ於テ行フ敬禮其ノ他軍人拜神ノ敬禮ハ室內ノ敬禮トス

二　室外ノ敬禮

第三十六條　軍人室外ノ敬禮ハ擧手注目トス其ノ法姿勢ヲ正シ右手ヲ擧ケ五指ヲ伸ハシテ之ヲ並ヘ掌ヲ左方ニ向ケ食指ヲ帽ノ前部右側ニ當テ受禮者ニ注目ス答禮亦之ニ準ス

第三十七條　准士官以上扶劍シアルトキハ劍ヲ以テ敬禮ヲ行フ其ノ法左ノ如シ

第一節　劍ヲ肩ニシタル姿勢ニ在テ之ヲ垂直ニ上ケ其ノ刄ヲ左方ニ向ケ平面ヲ顔ノ中央ニ對セシメ鍔ヲ肩ノ高サニ齊シクシ肘ハ自然ニ體ニ近接ス

第二節　右臂ヲ全ク伸シテ劍ヲ右斜ニ下ケ爪ヲ上ニシ拳ヲ右股ヨリ少シク離シ受禮者ノ眼ニ注目ス

第三節　再ヒ劍ヲ擧ケテ之ヲ肩ニス

第三十八條　下士卒執銃シアルトキノ敬禮ハ皇族以上ニ對シテハ捧銃シ將官同相當官以下ニ對シテハ步行中ハ注目シ停止中ハ立銃シテ姿勢ヲ正スヘシ

第三十九條　下士卒喇叭ヲ携フルトキノ敬禮ハ紐ヲ頸ニ掛ケ右手ノ四指ヲ接シ拇指ヲ上ニシ喇叭ノ後身ト前身トヲ握リ接著管ヲ右手ノ脈部ニ接シ漏斗狀ノ邊端ヲ右腋骨下部ニ當テ口管ヲ右足尖ノ方向ニ一致セシメ之ヲ水平ニ保持シ臂ハ自然ニ體ニ接著シ受禮者若クハ敬禮ヲ行フ者ニ注目ス

第四十條　軍人兩手ニ物件ヲ提携シ右手ヲ擧クルコト能ハサルトキ若クハ擔荷シアルトキハ頭ヲ少シク受禮者若クハ敬禮ヲ行フ者ノ方ニ向ケ注目シテ敬禮ノ意ヲ表スヘシ

第四十一條　軍人途上ニ於テ行幸ニ遇フトキハ前驅ノ稍〻前ヨリ道路ノ一側ニ停止正面（乘馬ハ其ノ儘乘車ハ下車シ）シ車駕六步前ニ近ツクトキ敬禮ヲ行ヒ六步過キ去ルマテ其ノ姿勢ヲ保ツヘシ

第五十五條　軍人隊列ニ在ルトキハ何人ニ對スルモ上官ノ號令アルニ非サレハ敬禮ヲ行フコトナシ但一時隊列ヲ離レ在ル者ハ軍人單獨ノ敬禮法ニ從フヘシ

第三章　軍艦ノ敬禮

第六十條　天皇軍艦ニ臨御ノトキハ左ノ敬禮ヲ行フヘシ

一　司令長官司令官參謀長艦長及當直將校ハ舷門ニ他ノ高等武官ハ其ノ舷側後甲板ニ序列シ奉迎ス

二　尉官二名舷梯ノ下部ニ於テ奉迎シ兵曹長（上等兵曹）二名號笛ヲ吹ク

三　衛兵（衛兵司令之ヲ指揮ス）ハ對舷ニ整列捧銃シ「君ケ代」ノ喇叭ヲ吹奏ス

四　准士官ハ甲板中部ニ整列ス

五　下士卒ハ舷側上（帆桁ヲ有スル艦ニ在テハ桁上以下之ニ倣フ）ニ整列シ副長ノ號令ニテ「奉賀」三回ヲ唱ヘ殘餘ノ下士卒ハ甲板前部ニ整列ス

第六十一條　還御ノトキハ其ノ式前條ニ準ス但乘御ノ舟艇本艦ヲ離ルヽトキ舷側上ノ下士卒ハ「奉賀」三回ヲ唱フヘシ

第六十二條　乘御ノ艦船若ハ舟艇軍艦ノ近傍ヲ通過スルトキハ該軍艦ニ於テ司令長官司令官參謀長艦長副長及當直將校ハ艦橋ニ其ノ他ノ高等武官及准士官ハ甲板ニ於テ

敬禮ヲ行ヒ衛兵ハ捧銃シ「君ケ代」ノ喇叭ヲ吹奏シ下士卒ハ舷側上ニ整列シ副長ノ號令ニテ「奉賀」三回ヲ唱ヘ其ノ他ノ下士卒ハ甲板ニ於テ敬禮ヲ行フヘシ但軍艦展帆航行中乘御ノ艦船ニ遇フトキハ本條ノ敬禮ヲ行フニ當リ先ツ之ヲ絞ルヲ例トス

前項乘御ノ舟艇數〻軍艦ノ近傍ヲ通過スル場合ニハ該艦ニ於テ衛兵（衛兵司令之ヲ指揮ス）及番兵ハ捧銃シ「君ケ代」ノ喇叭ヲ吹奏シ敬禮ヲ行フノ外他ノ敬禮ヲ省略スルコトヲ得

第六十三條　天皇乘御ノ舟艇ニ於テハ海軍中佐若ハ少佐指揮ヲ司リ海軍中少尉若ハ兵曹長舵ヲ按スヘシ

第六十四條　天皇乘御ノ艦船ハ如何ナル場合ニ於ケルモ答禮ヲ行ハス

第六十五條　皇族公式ニアラスシテ軍艦ニ來艦セラルヽトキハ諸員通常禮服ヲ著シ左ノ敬禮ヲ行フヘシ其ノ退艦セラルヽトキ亦同シ以下之ニ倣フ

一　司令長官司令官參謀長（其ノ旗艦ニアラサルトキハ奉迎セサルモ妨ケナシ）艦長及當直將校ハ舷門ニ他ノ高等武官ハ其ノ舷側後甲板ニ序列シ奉迎ス

二　尉官二名舷梯ノ下部ニ於テ奉迎シ上等兵曹二名號笛ヲ吹ク

三　衛兵（衛兵司令之ヲ指揮ス）ハ對舷ニ整列捧銃シ「君ケ代」ノ喇叭ヲ吹奏ス

四　准士官ハ甲板中部ニ下士卒ハ甲板前部ニ整列ス

勅使來艦スルトキハ前項ニ依リ敬禮ヲ行フヘシ但シ將官タル勅使ニ對シテハ「海行カバ」ノ喇叭一回ヲ吹奏ス其ノ他ノ勅使ニ對シテハ喇叭ヲ吹奏スルコトナシ

第六十五條ノ二　上命ニ依リ差遣サレタル侍從武官及令旨ヲ奉シ來艦スル東宮武官ニハ本章ニ依リ其ノ本官ニ相當スル敬禮ヲ行フノ外准士官以上通常禮服ヲ著シ左ノ諸號ニ依リ各敬禮ヲ行フヘシ

一　司令長官司令官參謀長（以上ハ其ノ乘艦ニ於ケルトキニ限ル以下之ニ倣フ）艦長及當直將校ハ舷門ニ出迎ス

二　高等武官ハ其ノ舷側後甲板ニ序列ス

三　准士官ハ甲板中部ニ整列ス

上命若ハ令旨ノ事項ニ依リ前項ノ武官屢〻軍艦ヲ出入スルトキハ其ノ最初來艦ノトキ及最後退艦ノトキノ外ハ前項一號乃至三號ノ敬禮ヲ省略スルコトヲ得

第六十五條第六十一條第六十五條第六十五條ノ二ノ規定ハ之ヲ陸上官衙ニ準用スヘシ但シ號笛ヲ吹クコトナク祝聲ヲ發スルコトナシ

第九十一條ノ二　軍艦入渠中ナルトキ及陸岸ニ近接繫維中ハ本章ノ規定ノ外第六章ニ定ムル所ニ準シ適宜敬禮ヲ行フヘシ

第九十二條　海軍所屬船舶ノ敬禮ハ別ニ規定アルモノヽ外本章ニ準據スヘシ

第四章　端舟ノ敬禮

第九十三條　端舟ハ左ノ表ニ依リ敬禮ヲ行フヘシ

敬禮ヲ行フヘキ場合 ＼ 端舟ニ乘レル首席者	海軍大臣、將官、司令官タル大佐若ハ總監	上長官	士官（端舟指揮ヲモ含ム）	准士官（端舟指揮タルヲ准士官ナルヲ含ム）	下士卒（端舟長ヲモ含ム）
天皇乘御ノ舟艇ニ過フトキ若ハ水岸ニ於テ車駕ニ過フトキ	橈走中若ハ橈ヲ出シアル間ハ總帆ヲ下ス　橈ヲ立テ帆走中ハ端舟指揮及端舟長起立シ挙手注目ノ敬禮ヲ行フ　橈手ハ座シタル儘姿勢ヲ正シ注目シ橈手ニアラサル端舟定員及定員外ノ者ハ總テ起立シ姿勢ヲ正シ注目シ准士官以上ハ各個ノ敬禮ヲ行フ	同上	同上	同上	同上
（中略）	（中略）	（中略）	（中略）	（中略）	（中略）

一　本表中橈及帆ヲ以テスル敬禮ハ皇族以上ニ對スルトキ及海軍大臣、將官、佐官、尉官若ハ兵曹長ノ乘リタル舟艇ニ過フトキニノミ適用ス

二　本表中橈及帆ヲ以テスル敬禮ハ　天皇乘御ノ舟艇ニ過フトキハ該舟艇ヲ距ルコト凡三十米突ノ所ニ於テ之ヲ始メ凡十米突過去ルマテ其ノ姿勢ヲ保チ其ノ他ノ場合ニ於テハ受禮者ノ乘リタル舟艇ヲ距ルコト凡十五米突ノ所ニ於テ之ヲ始メ過去ルマテ其ノ姿勢ヲ保ツヘシ

三　端舟天幕ヲ張リタルトキ若ハ「グラツチ」ヲ備フル端舟ハ本表中橈ヲ立ツル場合ニ橈ヲ上ケ端舟定員起立ノ場合ニ座シタル儘姿勢ヲ正シ注目ス

四　本表中下士以下姿勢ヲ正シ注目スル場合ニハ端舟指揮若ハ端舟長ヨリ「頭右（左）」ト令シ終ツテ「直レ」ノ令ヲ下スモノトス

五　「グラツチ」ヲ備フル端舟ニ於テ端舟長橈手ヲ兼ヌルトキハ特ニ端舟長ノ行フヘキ敬禮ヲ行フコトナシ　此ノ場合ニ於テハ前號ノ「頭右（左）」ノ令ハ該端舟ニ乘レル首座者之ヲ下スモノトス

六　端舟他船ニ曳カレ或ハ曳船ヲ爲シ若ハ積荷ヲ爲シタルトキハ停止スルコトナク本表中停止間ノ敬禮ヲ行フ

七　端舟葬儀ノ列中ニ在ルトキハ皇族以上ニ過フトキノ外敬禮ヲ行フコトナシ

八　同級者ノ乘リタル舟艇相過フトキハ互フ本表ノ敬禮ヲ行フヘシ

九　本表中下級者ノ敬禮ニ對シテハ受禮者中首席者ノミ答禮ヲ行フ

第九十九條　端舟玉座ノ近傍ニ近ツクトキ若クハ他ノ敬禮スヘキ人ノ近傍ニ近ツクトキハ第九十三條ニ準據シ敬禮ヲ行フヘシ

第百三條　禮砲ヲ受クル端舟ハ禮砲施行間進行ヲ停止スヘシ其ノ橈走ノ端舟ニ在リテハ初發ニテ橈ヲ上ケ終發ニテ進行ヲ始ムルヲ例トス

天皇乘御ノ端舟ハ禮砲ヲ受クル間ト雖進行ヲ停止スルコトナシ

第百四條　小蒸汽船ノ敬禮ハ本章ニ準據スヘシ但シ第九十三條中端舟橈ヲ立ツル場合ニハ機關ノ運轉ヲ止メ橈ヲ上クル場合ニハ速力ヲ緩ニスヘシ

第百四條ノ二　排水量十五噸ニ滿タサル雜役船舟ハ出來得ル限リ本章ノ敬禮ニ準據スヘシ但シ櫓ヲ備フル小舟ニシテ操櫓中ハ端舟橈ヲ立テ若ハ之ヲ上クル場合ニ操櫓ヲ

止ムヘシ

第五章　軍隊ノ敬禮

第百七條　武裝セサル部隊（水兵ノ武器ヲ持タサル類以下之ニ倣フ）ノ敬禮ハ停止間ナレハ隊列ヲ正シ行進間ナレハ「頭左(右)」ノ令ニテ皆頭ヲ少シク他隊若クハ受禮者ノ方ニ向ケ之ニ注目シ其ノ隊長ノミ擧手注目ノ敬禮ヲ行ヒ終テ「直レ」ノ令ヲ下スヘシ

第百七條ノ二　武裝セサル部隊行進中行幸ニ遇フトキハ直ニ停止シテ道路ノ一側ニ整列シ前條ノ敬禮ヲ行フ

第百十一條　武裝セル軍隊　天皇ニ對シ停止間ナレハ銃ニ劍ヲ裝シ捧銃ヲ爲シ准士官以上ハ劍ヲ以テ敬禮ヲ行ヒ「君ケ代」ノ喇叭ヲ吹奏ス行進間ナレハ直ニ停止シ道路ノ一側ニ整列シテ本條ノ敬禮ヲ行フ

隊附准士官以上抜劍シアラサル者ハ擧手注目ノ敬禮ヲ行ヒ隊附下士卒銃ヲ携ヘサル者ハ注目ノ敬禮ヲ行フヘシ以下之ニ倣フ

第百十二條　軍隊海軍大臣將官若クハ司令官タル大佐ニ對シテハ停止間ナレハ姿勢ヲ正シ受禮者ノ眼ニ注目シ准士官以上ハ劍ヲ以テ敬禮ヲ行ヒ各「海行カバ」ノ喇叭ヲ一回吹奏ス終テ「直レ」ノ令ヲ下ス行進間ナレハ行進ヲ止メス「頭左(右)」ノ令ニテ皆頭ヲ少シク受禮者ノ方ニ向ケ其ノ眼ニ注目シ准士官以上ハ劍ヲ以テ敬禮ヲ行ヒ各「海行カバ」ノ喇叭ヲ一回吹奏ス終テ「直レ」ノ令ヲ下ス

軍隊、勅使ニ對スル敬禮ハ前項ニ準ス但シ將官タル勅使ニ對スルトキノ外ハ喇叭ヲ吹奏スルコトナシ

第百十四條　第百七條ノ二及第百十一條ノ場合ニ於テハ車駕隊列ヨリ凡ソ三十歩ノ所ニ來ルトキ敬禮ノ姿勢ヲ執リ凡ソ十五歩過去ルマテ其ノ姿勢ヲ保ツヘシ

第百十二條第百十三條ノ場合ニ於テハ停止間ハ受禮者隊列ヨリ凡ソ十歩ノ所ニ來ルトキ敬禮ノ姿勢ヲ執リ凡ソ五歩過去ルマテ其ノ姿勢ヲ保チ行進間ハ受禮者其ノ隊ノ先頭ヨリ凡ソ六歩ノ所ニ來ルトキ敬禮ノ姿勢ヲ執リ隊列ノ過去ルマテ其ノ姿勢ヲ保ツヘシ但大隊以上ノトキハ中隊毎ニ行フモ妨ケナシ

第百十五條　第百十二條乃至第百十四條ニ掲クル敬禮ハ隊長ヨリ上級ノ者ニ對シテノミ之ヲ行フ

（二項略ス）

第百十七條　軍隊拜神ノ禮ハ其ノ神前ニ於テ横隊又ハ縱隊ニ整列シ銃ニ劍ヲ裝シ捧銃ヲ爲シ隊長ハ劍ヲ以テ敬禮ヲ行ヒ隊長ノ外准士官以上ハ劍ヲ以テスル敬禮ノ第一節ヲ行ヒ「國ノ鎭メ」ノ喇叭一回ヲ吹奏ス但シ靖國神社參拜其ノ他招魂祭ニハ「水漬ク屍」ノ喇叭一回ヲ吹奏スヘシ

前項ノ場合ニ當リ部隊整列位置ニ關シ神官若ハ祭典掛官ヨリ協議アラハ之ニ應スヘシ

第百十八條　儀式祭典等ノ爲メ其ノ場所ニ整列シアル軍隊ハ皇族以上、勅使ニ對シ及其ノ儀式祭典ニ關シ敬禮ヲ行フノ外總テ敬禮ヲ行フコトナシ

第百二十條　軍隊途歩行進間ハ左ノ諸項ニ依リ敬禮ヲ行フヘシ

一　天皇ニ對シテハ第百十一條及第百十四條ニ依リ敬禮ヲ行フ其ノ休憩セルトキ亦同シ

二　前項ノ外軍隊衛兵其ノ他尊敬スヘキ人ニ對シテハ准士官以上ハ各個ノ敬禮ヲ行ヒ下士卒ハ別ニ敬禮ヲ行ハスト雖隊中皆高聲ニ談話セス唱歌ヲ止メ吹煙セサル等總テ靜肅ニ歩行スヘシ時宜ニ依リ市街等ニ於テハ速歩行進ニ復シ第百五條乃至第百十條第十二條乃至第百十六條及第百十九條ニ依リ敬禮ヲ行フヘシ

第百二十一條　軍隊演習間ハ左ノ諸項ニ依リ敬禮ヲ行フヘシ但野外演習實施中ハ總テ軍隊ノ敬禮ヲ行ハサルヲ例トス

一　天皇臨御セラルヽトキハ最初ニ之ヲ認知スル隊長ハ「氣ヲ附ケ」ノ喇叭ヲ吹奏セシメ各隊皆演習ヲ止メ其ノ位置ニ於テ第百十一條ニ準シ敬禮ヲ行ヒ最上ノ指揮權ヲ有スル各隊長ハ車駕ノ許ニ至リ演習ノ次第ヲ奏上ス而シテ勅命アルカ又ハ車駕其ノ場ヲ去ルニアラサレハ演習ヲ始ムヘカラス車駕其ノ場ヲ去ルニ方リテハ再ヒ敬禮ヲ行フヘシ

二（略ス）

三　前各項ノ場合ニ於テ軍隊休憩シアルトキハ「氣ヲ附ケ」ノ喇叭ニテ整列シ敬禮ヲ行フヘシ

第百二十二條　軍樂隊ハ左ノ諸號ニ依リ敬禮ヲ行フヘシ

一　軍樂隊軍隊ニ附屬シ奏樂中ハ別ニ敬禮ヲ行ハス但シ軍樂隊長ハ准士官以上劍ヲ以テ敬禮スル場合ニハ受禮者ノ通過スル瞬間ニノミ指揮杖ヲ以テ敬禮ヲ行フ其ノ法劍ヲ以テスル敬禮ニ同シ

二　軍樂隊軍隊ニ附屬シ軍隊敬禮ヲ行フトキ奏樂ヲ爲ササル場合ニハ武裝セサル部隊ト同一ノ敬禮ヲ行フ

三　孤立軍樂隊行進奏樂中ハ軍樂隊長ノミ指揮杖ヲ以テ敬禮ヲ行ヒ停止奏樂中ハ總テ敬禮ヲ行フコトナシ

四　孤立軍樂隊奏樂ヲ爲ササルトキハ武裝セサル部隊ト同一ノ敬禮ヲ行フ

第百二十三條　奏樂セサルトキ軍樂員敬禮ヲ行フニハ右手ニテ左ノ如ク樂器ヲ携フ

一　木製樂器ハ漏斗狀ノ邊端ヲ下方ニ向ケ拇指ヲ前ニシ漏斗狀ノ上部ヲ握リ右手ヲ伸シ口部ヲシテ右脇ニ接セシメ之ヲ垂直ニ保ツ但「フリユート」「ピツコロ」類ハ口部ヲ前ニシ其ノ中央ヲ握リ右手ヲ伸シテ之ヲ水平ニ保ツ

二　眞鍮製樂器類ハ漏斗狀ノ邊端ヲ下方ニ向ケ其ノ上方ノ彎曲部ヲ握リ之ヲ右側ニ接著セシメ垂直ニ保ツ但「トロンボーン」類ハ彎曲部ヲ握ラスシテ機關部ヲ握リ

右脇ニ接セシメ漏斗狀ノ部ヲ正シク側面ニ向ハシム

三　小太鼓ハ胴ヲ前面ニ向ケ股部ニ接スヘキ鐶ヲ握リ右側ニ接著シテ之ヲ保ツ

四　大太鼓ハ停止間ハ胴ヲ前面ニ向ケ右手ヲ胴ニ添ヘ之ヲ右側ニ置キ行進間二名ニテ提携スルトキハ不整頓ナラサル樣之ヲ保ツ但「シムボールス」ハ右脇ニ挾ミ保ツヘシ

第六章　衛兵及番兵ノ敬禮

第百二十四條　本章中衛兵ト稱スルハ府部團ノ諸衛兵ヲ謂ヒ番兵ト稱スルハ府部艦團ノ番兵ヲ謂フ

第百二十五條　衛兵ハ　天皇ニ對シテハ門外又ハ衛舍前ニ橫隊ニ整列シテ敬禮ヲ行フヘシ（以下略ス）

第百二十七條　衛兵ハ左ノ諸項ニ依リ敬禮ヲ行フヘシ

一　天皇ニ對シテハ第百十一條中停止間ノ敬禮ニ準シ敬禮ヲ行フヘシ

（二、三號略ス）

第百二十八條　番兵敬禮ヲ行フトキハ其ノ定位置ニ立チ受禮者凡ソ六步前ニ來ルトキ敬禮ノ姿勢ヲ執リ之ニ注目シ六步過去ルマテ其ノ姿勢ヲ保ツヘシ

第百二十九條　番兵ハ　天皇ニ對シテハ捧銃ノ敬禮ヲ行ヒ准士官以上ニハ捧銃シ下士ニハ立銃シテ姿勢ヲ正シ敬禮ヲ行ヒ卒ヨリ敬禮ヲ受クルトキハ立銃シテ姿勢ヲ正シ答禮ヲ行フヘシ

第百三十六條　番兵銃ヲ携ヘサルトキニ行フ敬禮ハ第三十六條ニ依ル

第百三十六條ノ二　番兵ハ夜間受禮者ヲ認識シ得サルトキハ之ニ對シ敬禮ヲ行ハサルモ妨ケナシ

第七章　儀仗兵

第百三十七條　儀仗トシテ　天皇ニ供スル軍隊ヲ儀仗兵ト稱ス特命檢閲使鎭守府司令長官若クハ要港部司令官等ニ供スルモノ亦同シ

第百三十八條　儀仗兵ヲ分テ儀仗隊及儀仗衛兵トス

第百三十九條　儀仗隊トハ　天皇著御發御ノトキニ當リ行在所ト波止場停車場等ノ間ニ於ケル途上ノ警衛ニ任スルモノ又特命檢閲使鎭守府司令長官若クハ要港部司令官等發著ノトキニ當リ官廳旅館ト波止場停車場等ノ間ニ於ケル途上ノ警衛ニ任スルモノヲ謂フ

第百四十條　儀仗隊ヲ供スルハ左ニ揭クル事項ノ一ニ該ル場合若クハ他ノ條例規則等ニ於テ規定アルトキ又ハ特ニ命令アルトキニ限ル

一　天皇軍隊所在地ニ著御竝ニ發御ノトキ

（二、三號略ス）

第百四十一條　儀仗衛兵ヲ供スルハ　天皇軍隊所在地ニ滯御ノトキ若クハ條例規則等

ニ於テ規定アルトキ又ハ特ニ命令アルトキニ限ル

第百四十二條　儀仗兵ハ總テ禮服ヲ著用スヘシ

第百四十三條　儀仗兵ノ敬禮ハ儀仗隊ニ在テハ第五章軍隊ノ敬禮法ニ依リ儀仗衛兵ニ在テハ第六章衛兵ノ敬禮法ニ依ルヘシ

第百四十四條　儀仗隊現ニ儀仗服務ノ位置ニ在ルトキハ　天皇皇族勅使若クハ其ノ儀仗兵ヲ供セラルヽ人ト同等以上ノ人ニ對スルノ外何人ニ對シテモ敬禮ヲ行ハス

第百四十五條　儀仗兵ハ晝夜ノ別ナク何レノ時ト雖之ヲ供スルモノニシテ其ノ儀仗衛兵ハ夜間ニ於テモ敬禮ヲ行フ

第百四十六條　儀仗隊ノ編制ハ左ノ諸項ニ依ル但人員此ノ編制ニ充タサルトキハ適宜ニ之ヲ定ムルコトヲ得

一　天皇若クハ皇后ニ供スル儀仗隊ハ一大隊ニシテ大佐之ヲ指揮ス

二　皇族ニ供スル儀仗隊ハ一大隊（二中隊ヲ以テ編制ス）ニシテ中佐之ヲ指揮ス

（三、四號略ス）

第百四十七條　儀仗衛兵ノ人員ハ適宜之ヲ定ムヘシ

第百四十七條ノ二　海軍葬儀ノ儀仗隊現ニ儀仗服務ノ位置ニ在ルトキハ皇族以上若ハ勅使ニ對スルノ外何人ニ對シテモ敬禮ヲ行ハス（二項）

第八章　迎送式及伺候式

第百四十八條　天皇著御發御ノトキ軍隊軍人等ノ奉迎奉送スル之ヲ迎送式ト稱ス鎮守府司令長官若クハ要港部司令官等發著ノトキニ當リ軍隊軍人等ノ迎送スル亦同シ天皇著御發御ノトキ行在所ニ士官以上參向スル之ヲ伺候式ト稱ス司令長官若クハ司令官等發著ノトキニ當リ官廳旅館又ハ旗艦等ニ士官以上參向スル亦同シ

第百四十九條　迎送式及伺候式ヲ行フハ左ニ掲クル事項ノ一ニ該ル場合若クハ他ノ條例規則等ニ於テ規定アルトキ又ハ特ニ命令アルトキニ限ル

一　天皇軍隊所在地其ノ他海軍官廳ニ著御竝ニ發御ノトキ

（二、三號略ス）

（二項略ス）

第百五十條　迎送式及伺候式ニハ禮服ヲ著用スヘシ但シ同日他ノ主要ナル儀式ニ於テ禮服ニ非サル服裝ヲ要スルトキハ其ノ服裝ヲ用フルコトヲ得

第百五十一條　迎送式及伺候式ハ晝間ニ於テノミ行フヲ例トス

第百五十二條　迎送式ハ左ノ諸項ニ依リ之ヲ行フヘシ

一　天皇ニ對シテハ該地所在ノ兵員（儀仗隊ノ外）武裝ヲ爲サス悉ク道路ノ側方ニ横隊ニ列シ敬禮ヲ行フ此ノ場合ニ於テハ第百四十四條ヲ適用ス又該地所在ノ准士官以上奉迎奉送ス時宜ニ依リ艦船若干隻港外ヘ奉迎奉送（海路ヨリセラルヽトキ）ス

（二、三號略ス）

第百五十三條　伺候式ハ左ノ諸項ニ依リ之ヲ行フヘシ

一　天皇ニ對シテハ該地所在ノ士官以上行在所ニ奉伺ス

（二、三號略ス）

第百五十四條　伺候式ハ著後若クハ出發前二十四時間内ニ於テスルヲ例トス

第百五十五條　行在所ニ奉伺スルトキハ拜謁ヲ賜ハル場合ノ外掛官ノ指示ニ從ヒ指定ノ用紙ニ自己ノ官氏名ヲ書シ退出スヘシ

（二項略ス）

第百五十七條　伺候式ハ一定ノ時限ヲ期シ止ムヲ得サル支障アル者ノ外同時ニ之ヲ行フヲ要ス

第九章　遙拜式

第百五十八條　遙拜式ハ宮中ヘ朝拜參賀參拜スヘキ日等ニ當リ艦船團其ノ他各部（東京ニ在ル者ヲ除ク）ニ於テ行フモノトス

第百五十九條　一月一日紀元節天長節ニハ艦船ニ在テハ艦船長（旗艦ニ在テハ司令長官若ハ司令官）若ハ司令ノ指揮下ニ左ノ敬禮ヲ行フヘシ

一　司令長官司令官參謀長艦長副長ハ艦橋ニ他ノ高等武官及准士官ハ後甲板ニ序列シ各敬禮ヲ行フ

二　衛兵（衛兵司令之ヲ指揮ス）ハ後甲板ニ整列捧銃シ「君ヶ代」ノ喇叭一回ヲ吹奏ス

三　番兵ハ捧銃ス

四　下士卒ハ分隊毎ニ分隊長ノ指揮下ニ上甲板ニ整列シ各第百七條ノ敬禮ヲ行フ

五　前諸號ノ敬禮畢リテ准士官以上及下士卒中ノ帶勳者　御眞影ヲ拜ス

盤船ニアラサル海軍各部ニ於テハ前項ニ準シ敬禮ヲ行フヘシ

第百六十條　元始祭日孝明天皇祭日春季皇靈祭日神武天皇祭日秋季皇靈祭日神嘗祭日新嘗祭日ニハ艦船團ニ限リ前條（第一項第五號ヲ除ク）ニ準シ遙拜式ヲ行フヘシ但シ此ノ場合ニ於テハ「國ノ鎮メ」ノ喇叭一回ヲ吹奏スルモノトス

第百六十二條　艦船團其ノ他各部ニ於テ勅諭書勅語書等ヲ奉讀スルトキハ第百五十九條ニ準シ適宜位置ヲ定メ奉讀ヲ始ムル前及之ヲ畢リシ後ニ於テ各敬禮ヲ行フヘシ

○海軍監獄看守長看守ノ行フヘキ禮式

（明治二十八年七月十日海軍省達第五十五號）

海軍監獄看守長看守ハ左ノ諸項ニ依リ禮式ヲ行フヘシ

一　海軍監獄看守長及看守ハ各官等ニ應シ海軍敬禮式ニ準據シ敬禮若クハ答禮ヲ行フヘシ

二　門衛及見張所ニアルモノハ高等官ニハ起立シ其他ニハ其儘敬禮若クハ答禮ヲ行フヘシ

三　囚徒護送其他特別ノ注意ヲ要スル職務ニ從事中ハ禮式ヲ行ハサルモ妨ケナシ

○海軍軍屬敬禮式（摘錄）

明治三十三年四月十四日
海軍省達第五十八號　改正　三八年第六八號

海軍軍屬敬禮式左ノ通定ム

海軍軍屬敬禮式

第一條　本式ニ於テ軍屬ト稱スルハ總テ海軍部內ノ高等文官、判任文官、雇員及傭人ヲ謂フ

第二條　本式中特ニ規定アルモノヽ外軍屬ハ各官等ニ屬シ一般ノ慣例ニ從ヒ脫帽注目ノ禮ヲ行フヘシ

第二條ノ二　勅令ニ定メラレタル制服ヲ著用スルモノハ海軍敬禮式ニ準據シ敬禮ヲ行フヘシ

第六條　軍屬其ノ屬スル艦團其ノ他各部ノ內ニ在テハ總テ海軍軍人ノ敬禮ヲ行フヘキ場合ニ亦敬禮ヲ行フヘシ

第十一條　海軍敬禮式第八章ニ定ムル所ノ海軍高等武官ニ關スル事項ハ海軍高等文官ニ適用シ海軍判任武官ニ關スル事項ハ海軍判任文官ニ適用ス

第十二條　本式ハ海軍ノ事務ニ從事スル文官待遇者ニ適用ス

○海軍旗章條例（摘錄）

明治三十年一月四日
勅令第一號　改正　三一年第一六號
三七年第二號

朕海軍旗章條例ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍旗章條例

第一條　海軍旗章ヲ類別シテ左ノ二種トス

第一種旗章

第二種旗章

第二條　第一種旗章ノ列序及名稱ハ左ノ如シ

第一　天皇旗
第二　皇后旗
第三　皇太子旗
第四　皇族旗
第五　海軍大臣旗
第六　大將旗
第七　中將旗
第八　少將旗

第九　代將旒
第十　先任旒
第十一　司令旒
第十二　長旒

第三條　第二種旗章ハ左ノ如シ
軍艦旗
艦首旗
當直旗
運送船旗
工作船旗
白地赤十字旗

第四條　海軍旗章ノ制式ハ別圖定ムル所ニ依ル

第五條　天皇旗ハ　天皇乘御ノ艦船ニ於テ大檣頂ニ掲ク又軍隊ノ司令權ヲ有スル海軍官廳ニ臨御ノ時ハ其ノ旗竿ニ掲ク
天皇乘御ノ端舟ニ於テハ天皇旗ヲ舟首ノ旗竿ニ掲ク
本令ニ依リ天皇旗ト第二種旗章トヲ同一檣頂ニ掲クヘキ場合ニ於テハ之ヲ併揚セス
第二種旗章ハ適宜ノ所ニ掲揚ス

第六條　皇后旗ハ　太皇太后皇太后皇后ニ對シ之ヲ掲ク其ノ掲揚ノ法ハ第五條ニ依ル

第七條　皇太子旗ハ　皇太子皇太子妃ニ對シ之ヲ掲ク其ノ掲揚ノ法ハ第五條ニ依ル但皇太子文武官等ノ資格ノ場合ニハ之ヲ掲ケス

第八條　皇族旗ハ前二條ノ外ノ皇族ニ對シ之ヲ掲ク其ノ掲揚ノ法ハ第五條ニ依ル但皇族文武官等ノ資格ノ場合ニハ之ヲ掲ケス

第九條　天皇若クハ皇族乘御ノ艦船ニ於テハ日沒ヨリ日出マテ大檣樓ノ後部ニ於テ周圍ヨリ見易キ場所ニ白燈ヲ掲ク但皇族文武官等ノ資格ノ場合ニハ之ヲ掲ケス
天皇乘御ノトキハ五箇ニシテ中央及左右ニ列シ皇族ニハ四箇ニシテ左右ニ列シ其ノ間隔ハ各凡ソ一米突トス

第十條　第六條乃至第八條ノ旗章及第九條ノ皇族ニ對スル白燈ハ公式ノ場合ニアラサレハ之ヲ掲揚セス

第十一條　外國ノ皇帝皇族及大統領ニ對シテハ第五條乃至第十條ニ準シ各其ノ旗章若クハ白燈ヲ掲揚スヘシ

第十五條　第二條ノ第一乃至第九ノ旗旒ハ水雷艇及小蒸汽船ニ於テハ第五條乃至第十四條ニ準シ之ヲ掲揚ス

第二十條　第一種旗章ハ同一ノ艦船若クハ官廳等ニ於テハ二箇以上ヲ掲揚セス只其ノ上位ノ旗章ノミヲ掲揚ス但皇后旗皇太子旗皇族旗若クハ海軍大臣旗ト將旗代將旒先

任旒司令旒トハ同時ニ之ヲ掲揚シ又先任旒ト長旒トハ同時ニ之ヲ掲揚スルモノトス

外國ノ皇帝皇族大統領及其ノ他ニ對シ旗章ヲ掲クルハ前項本文ニ依ルノ限ニアラス

第二十一條　第九條及第十六條ニ依リ同一艦船ニ同時ニ白燈ヲ掲揚スヘキ場合ニ於テハ只其ノ最多數ノ白燈ヲ掲揚ス

第二十三條　軍艦旗ハ在泊中午前八時ニ之ヲ掲揚シ日沒ニ至テ之ヲ降下スヘシ

第三十三條　滿艦飾艦飾ハ軍艦在泊中ニ行フモノニシテ滿艦飾ハ各檣頂ヲ亘リ艦首ヨリ艦尾ニ旗旒ヲ列揚シ各檣頂ニ軍艦旗ヲ掲ク艦飾ハ單ニ各檣頂ニ軍艦旗ヲ掲揚ス但外國ノ爲ニスルトキハ大檣頂ノ軍艦旗ヲ其ノ國ノ旗章ニ代フ又檣頂ノ旗章ハ左ノ規定ニ從ヒ掲揚シ若クハ掲揚セサルモノトス

二檣以上ノ軍艦ニ於テ天皇旗皇后旗皇太子旗皇族旗ヲ掲揚スル場合ニ於テハ之ニ掲クル檣頂ニ軍艦旗若クハ外國旗章ヲ掲揚セス但第二十條第二項ノ場合ニ於テ外國ノ旗章ヲ掲クルハ此ノ限ニアラス

二檣以上ノ軍艦ニ於テ海軍大臣旗大將旗中將旗少將旗代將旒先任旒ヲ掲揚スル場合ニ於テハ之ヲ掲クル檣頂ニ軍艦旗ヲ掲揚セス但外國ノ爲ニスルトキハ其ノ國ノ旗章ヲ併揚スルモノトス

單檣ノ軍艦ニ於テ天皇旗皇后旗皇太子旗皇族旗ヲ掲揚スル場合ニハ其ノ檣頂ニ軍艦旗若クハ外國ノ旗章ヲ掲揚セス但第二十條第二項ノ場合ニ於テ外國ノ旗章ヲ掲クルハ此ノ限ニアラス

單檣ノ軍艦ニ於テ海軍大臣旗大將旗中將旗少將旗代將旒先任旒ヲ掲揚スル場合ニハ其ノ檣頂ニ軍艦旗若クハ外國ノ旗章ヲ併揚スルモノトス

第三十四條　本艦ニ於テ滿艦飾若クハ艦飾ヲナストキハ其ノ所在ノ水上ニアル端舟及小蒸汽船ニ軍艦旗ヲ掲揚スルモノトス

第三十五條　左ノ祝日ニハ諸軍艦總テ滿艦飾ヲナスヘシ但暴風雨ノ節ハ之ヲ艦飾ニ代ヘ若クハ禮砲施行時間ノミ滿艦飾若クハ艦飾ヲナシ或ハ全ク之ヲ省略スルコトヲ得

紀元節

天長節

天皇皇族外國ノ皇帝皇族大統領ニ對シ皇禮砲ヲ發スヘキ日

其ノ他規則命令ニヨリ滿艦飾ヲ施行スヘキ日

第三十六條　左ノ祝日ニハ諸軍艦總テ艦飾ヲナスヘシ但暴風雨ノ節ハ之ヲ省略スルコトヲ得

一月一日

第三十五條但書ノ場合

第三十七條　第三十五條第三十六條ニ記載スル祝日ニ當リ帝國軍艦外國軍艦ト同所ニ

在泊スルトキハ所在海軍先任將校ハ其ノ前日ニ士官ヲ各外國海軍先任官ニ遣シ公然我祝日ノ告知ヲ爲スヘシ但帝國軍艦外國港灣ニ在泊スルトキハ所在地方廳ニ通知シ其ノ地駐劄ノ我外交官或ハ領事官アルトキハ豫メ之ト協議スルヲ要ス

前項ノ告知ヲ受ケ敬意ヲ表シタル各外國ノ先任官ニハ翌日士官ヲ遣シ謝意ヲ通スヘシ

第三十五條ニ記載スル祝日ニ當リ內國港灣ニ於テ外國軍艦ノミ在泊シ帝國軍艦在泊セサルトキハ該地ノ地方長官ハ部下ノ官吏ヲ遣ハシ本條第一項第二項ノ事ヲ行フヘシ

第三十九條　滿艦飾艦飾ノ揭揚降下ハ第二十三條ノ時刻ニ於テスヘシ但外國軍艦ト同所ニ在リ其ノ國ノ祝日等ニ際シ滿艦飾或ハ艦飾ヲ爲ストキハ其ノ揭揚降下ハ該艦ト同時タルヘシ

第四十條　滿艦飾或ハ艦飾ヲ爲シタル軍艦拔錨スルトキハ之ヲ降下スヘシ

第四十九條　天皇皇族臨御還御ニ際シ其ノ他本艦ニ旗章ヲ揭揚スヘキ者來艦退艦ニ當リ端舟ニ其ノ旗章ヲ揭クルトキハ端舟著發ノ際其ノ旗章ノ撤却揭揚ニ應シ本艦ノ旗章ヲ揭揚降下スルヲ例トス其ノ他ノ場合ニ於テ亦之ニ準ス

第五十條　外國ノ皇帝皇族大統領若クハ官吏ニ對シ竝ニ其ノ祝日等ニ當リ其ノ旗章ヲ揭揚スルハ帝國ニ於テ其ノ政府ヲ公然承認シタルモノニ限ル

第五十一條　旗章ノ揭揚降下ニ就キ本條例ニ規定セサル場合若クハ外交上彼我厚薄ノ差ヲ生シ不權衡ト認ムル場合ニハ帝國ノ威嚴ヲ損セサル限リ所在海軍先任將校ハ臨時ノ處置ヲナスコトヲ得此ノ場合ニ於テハ事後其ノ情況ヲ報告スヘシ

（天皇旗皇后旗皇太子旗皇族旗ハ御旗ノ部內旗章ニ同シキヲ以テ略ス但シ本條例ノ菊全徑ハ天皇旗皇后旗ハ縱ノ三分二皇太子旗皇族旗ハ縱ノ二分ノ一ニシテ且風雨ノ際用フルモノニハ黃旗布ヲ以テ菊章ヲ作ル）

○海軍禮砲條例（摘錄）

明治三十年一月二十二日勅令第六號

朕海軍禮砲條例ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍禮砲條例

第一章　總則

第一條　本條例中先任官後任官トハ官階ノ高下、同官階ニ在テハ任官ノ前後ヲ以テ區分シ軍隊指揮權ヲ有スル者ノミニ用フ但禮砲ヲ受クヘキ資格ヲ有スル者ハ總テ其ノ之ヲ有セサル者ニ對シ先任官トス

第二條　軍艦ヨリ禮砲ヲ行フ場合ニ於テ同所ニ海軍先任官在ルトキハ豫メ其ノ認可ヲ經ルコトヲ要ス但天皇旗皇后旗皇太子旗皇族旗及該先任官ニ對スル禮砲ハ此ノ限ニアラス

第三條　禮砲ハ之ヲ行フヘキ時機ニ遭遇シタル後二十四時間以內ニ努メテ速ニ行フヘ

シ若シ此ノ時間内ニ行フコト能ハサルトキハ對方ニ其ノ理由ヲ説明スヘシ

第四條　軍艦ニ於テ來乘者又ハ退艦者ニ對シ禮砲ヲ行フハ來乘ノ際ニハ其ノ乘艦ノ後ニ於テシ退艦ノ際ニハ本艦ヲ離レ適宜ノ距離ニ在ルトキニ於テス臨御若クハ還御ノ時亦同シ

第八條　禮砲ヲ行フヘキ海岸砲臺及軍艦ハ左ノ如シ

一　禮砲ヲ行フ爲メ特ニ陸軍大臣ノ指定シタル海岸砲臺

二　口徑十六珊以下ノ砲熕（速射砲ヲ除ク）六門以上ヲ側砲トシテ備フル軍艦及禮砲用ノ砲熕ヲ備フル軍艦

三　口徑四十七密以上ノ同口徑速射砲四門以上ヲ備フル軍艦

軍艦ヨリ禮砲ヲ行フヘキ場合ニ於テ該艦本條ニ適合セサルトキハ海軍先任官ハ所在ノ軍艦中他ノ適合スルモノニ命シテ禮砲ヲ行ハシムルコトヲ得

第十條　軍艦及砲臺ヨリ一齊ニ禮砲ヲ行フ場合ニハ各艦及各砲臺ハ所在海軍先任官ノ軍艦又ハ特ニ定メタル標準艦ノ第二發目ト同時ニ發砲ヲ始ムヘキモノトス

第十一條　禮砲ハ日出前及日沒後ニ於テ行ハサルヲ例トス碇泊中ノ軍艦其ノ軍艦旗揭揚前ニ於テ亦同シ

禮砲施行ノ時機日沒後ニ生シタル時ハ次日之ヲ行フヘシ但特別ノ場合ニ於テハ旗章ヲ識別シ得ル限リ日出前日沒後ト雖之ヲ行フコトヲ得

第十三條　帝國軍ノ凱旋又ハ戰勝其ノ他全國ノ慶賀ニ當リテハ所在陸海軍各先任官ハ砲臺若クハ軍艦ヨリ禮砲ヲ行ハシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ事後其ノ詳細ヲ報告スヘシ但第八條ノ軍艦及砲臺同所ニ在ルトキハ陸海軍各先任官協議ノ上之ヲ行ヒ唯其ノ一方ニ於テノミ之ヲ行フコトヲ得ス

第十六條　本條例ハ在役艦船其ノ他軍艦旗揭揚中ノ艦船及海岸砲臺ニ適用ス

第十七條　禮砲ニ關シ本條例ニ規定セサルモノハ海軍大臣便宜之ヲ處理スルコトヲ得

第二章　皇禮砲

第十八條　天皇旗皇后旗皇太子旗及皇族旗ニ對シ行フ禮砲ヲ皇禮砲ト謂フ

皇禮砲ノ數ハ二十一發トス

第十九條　天皇帝國軍艦ノ在泊セル港灣又ハ海岸砲臺所在地ニ著御發御若クハ其ノ近傍通御ノトキハ在泊ノ各軍艦及該砲臺ヨリ皇禮砲ヲ行フヘシ

第二十條　天皇軍艦ニ臨御ノトキハ皇禮砲ヲ行フ所在各軍艦ニ於テモ亦臨御ノ軍艦ト齊シク皇禮砲ヲ行フヘシ但時宜ニ依リ乘御ノ舟艇本艦ニ近接セサル前ニ於テ禮砲ヲ畢ルコトヲ得

第二十一條　天皇軍艦ヨリ還御ノトキハ皇禮砲ヲ行フ所在各軍艦ニ於テモ亦該艦ト齊シテ皇禮砲ヲ行フヘシ

第二十二條　軍艦海上ニ於テ天皇旗ヲ揭クル艦船ニ遇フトキ又ハ天皇旗ヲ揭ケアル場

所ニ來著シ若クハ之ニ近接シテ航行スルトキハ必ス皇禮砲ヲ行フヘシ

第二十三條　天皇一境域内ニ滯御ノトキハ最初著御ノトキト最後發御ノトキノミ第十九條ノ禮砲ヲ行フモノトス但第二十條第二十一條ノ禮砲ハ此ノ限ニアラス若シ同日數隻ノ軍艦ニ臨御ノトキハ所在海軍先任官ハ適宜禮砲施行ノ場合ヲ定ムルコトヲ得

第二十四條　皇后旗皇太子旗及皇族旗ニ對シテハ天皇旗ニ對スルト同一ノ例ニ依リ皇禮砲ヲ行フヘシ但皇族旗ヲ掲クル皇族軍艦ニ來乘ノ時ハ其ノ來艦退艦ノ時該艦ノミ皇禮砲ヲ行フヘシ

第二十五條　天皇旗皇后旗皇太子旗及皇族旗ヲ掲揚セル間該地ニテハ帝國國旗ニ對スル禮砲ノ答砲ノ外總テ禮砲ヲ行フコトナシ

第二十六條　皇族ニ對シテハ公式ノ場合ニアラサレハ皇禮砲ヲ行ハス皇族ノ資格ニアラサル場合ニハ其ノ官職相當ノ禮遇ニ止マリ皇禮砲ヲ行フコトナシ

第二十七條　天皇旗皇后旗皇太子旗及皇族旗ハ唯皇禮砲ヲ受クルノミニシテ答砲ヲ行フコトナシ

第二十八條　外國ノ皇帝太皇太后皇太后皇后皇太子及皇太子妃又ハ大統領ニ對シテハ天皇旗ヲ掲クル場合ニ限リ該國ノ軍艦旗（軍艦旗ノ制ナキ國ニ對シテハ國旗）ヲ掲クル外天皇旗ニ對スルト同一ノ例ニ依リ皇禮砲ヲ行フヘシ

第二十九條　前條ノ外ノ外國ノ皇族ニ對シテハ皇族旗ヲ掲クル場合ニ該國ノ軍艦旗（軍艦旗ノ制ナキ國ニ對シテハ國旗）ヲ掲クル外皇族ニ對スルト同一ノ例ニ依リ皇禮砲ヲ行フヘシ

第三十條　左ノ祝日ニハ各軍艦及砲臺ヨリ正午ニ皇禮砲ヲ行フヘシ

紀元節

天長節

右ノ祝日ニ當リ帝國軍艦外國ノ軍艦ト同所ニ在泊スルトキハ所在我海軍先任官ハ其ノ前日ニ士官ヲ各外國軍艦ノ海軍先任官ニ遣シ之ニ我祝日ノ告知ヲナスヘシ

外國港灣ニ在リテハ所在地方廳ヲ經テ所在砲臺ニモ前項ノ告知ヲナスヘシ

此ノ場合ニ於テハ該地ニ駐劄ノ我外務官吏アルトキハ豫メ之ト協議スルヲ要ス

前二項ノ告知ヲ受ケ敬意ヲ表シタル各外國軍艦ノ海軍先任官及外國砲臺ノ長ニハ翌日士官ヲ遣シ謝意ヲ通スヘシ

內國港灣ニ外國軍艦ノミ在泊シ帝國軍艦在泊セサルトキハ該地ノ地方長官ハ部下ノ官吏ヲ遣シ本條ノ第二項及第四項ノ事ヲ行フヘシ

第六章　禮砲或ハ答砲ヲ行フトキ旗章ノ掲揚法

第四十八條　禮砲ヲ行フヘキ砲臺ハ常ニ國旗ヲ全掲シ置クヘク禮砲若クハ答砲ヲ行フニ當リ之ヲ變換セサルモノトス

明治三十三年六月二十二日
海軍省達第百二十五號

驅逐艦ニ於テハ禮砲ヲ施行セサル儀ト心得ヘシ

○大禮服及通常禮服着用日

明治五年十一月二十九日
太政官布告第三百七十三號　改正　六年第九一號

大禮服著用日

新年朝拜　元始祭　新年宴會
伊勢兩宮例祭　紀元節　神武天皇例祭
孝明天皇例祭　天長節　外國公使　參朝ノ節

通常禮服著用日

參賀　禮服御用召並任叙御禮

右之通被相定候事

諸省府縣局廻シ

（參考）

明治六年二月十三日
太政官布告第四十八號

先般禮服制式被　仰出候ニ付左ノ通相達候事

一　判任官ハ大禮服調製致候迄通常禮服ヲ以テ換用不苦候事

（一、三、四號略ス）

明治十年九月十八日
太政官達第六十五號

〔官〕院省〔使〕府縣

〔勅奏任官大禮服ノ儀上下衣袴トモ黑羅紗地金飾章ノ大禮服著用可致事〕

〔但朝儀ニ係リ白鼠色ノ下衣袴著用ノ節ハ其旨兼テ式部寮ヨリ可及通知事〕

官吏通常禮服著用ノ場合ハ黑若クハ紺色ノ上服（英語フロックコート）ヲ以テ換用スルヲ得ヘシ

但判任官以下ハ各廳長官ノ見込ニヨリ羽織袴ヲ以テ代用不苦候事

右相達候事

明治十七年十月二十五日
宮內省達乙第九號

有爵者一般

來ル明治十八年一月一日ヨリ有爵之輩通常禮服ヲ以テ大禮服ニ換用不相成候條此旨相達候事

明治十七年十二月六日
宮內省達乙第十二號

來明治十八年一月ヨリ有位ノ准奏任及非役有位ノ輩朝拜參賀參拜ノ節通常禮服ヲ以テ大禮服ニ換用不相成候條此旨相達候事

明治三十二年二月十八日
勅令第三十九號

朕臺灣總督府文官服制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府文官ノ服制左ノ通定ム但シ別ニ規定アルモノハ此ノ限ニアラス

服制表備考

一　此ノ制服ハ通常禮服ニ代用ス

（其ノ他略ス）

明治三十九年二月三日
勅令第十四號　改正（略ス）

朕統監府及所屬官署職員服制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

統監府及所屬官署職員服制左ノ通定ム

服制表備考

一　此ノ制服ハ紺又ハ黑地ノモノニ限リ大禮服又ハ通常禮服ニ代用スルコトヲ得

七　此ノ服制ハ統監ノ定ムル所ニ依リ統監府及所屬官署ノ囑託員ニ適用スルコトヲ得

（其ノ他略ス）

明治三十九年八月三十日
勅令第二百三十二號　改正（略ス）

朕關東都督府文官服制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

關東都督府文官服制別表ノ通定ム但シ別ニ規定アルモノハ此ノ限ニ在ラス

服制表備考

一　此ノ制服ハ大禮服又ハ通常禮服ニ代用スルコトヲ得

（其ノ他略ス）

明治四十一年三月三日
勅令第十五號

朕外交官及領事官大禮服代用服制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

外交官及領事官大禮服代用服制

熱帶地方又ハ炎暑酷烈ナル地方ニ在勤スル外交官及領事官其ノ在勤地ニ於テ大禮服ニ代用スルコトヲ得ヘキ服制別表ノ通定ム

前項ノ地方ハ外務大臣之ヲ指定ス

（其ノ他略ス）

明治四十二年三月十三日
勅令第二十一號

朕港務部職員服制改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

港務部職員ノ服制左ノ通改正ス

港務部職員服制圖例備考

一　此ノ制服ハ通常禮服ニ代用ス

（其ノ他略ス）

○文武官兼任者及警視官兼任者制服着用方

明治十一年三月二十一日
太政官達第十號　改正　一六年第三號

〔官〕院省〔使〕府縣

文武官兼任ノ者着服ノ儀左ノ通可相心得此旨相達候事

一　武官ニシテ文官兼任ノ者朝拜參賀ノ節ハ總テ本官ノ制服ヲ着用スヘシ

但〔後備軍軍員並ニ退職或ハ罷役〕ニシテ文官ニ任スル者ハ其文官ノ禮服ヲ着用スルモ妨ケナシ

一　警視官兼任ノ者平常警視ノ職務ニ服スル時ハ警視官ノ制服ヲ着用スヘシ

○神宮及官國幣社諸陵墓等祭典ノ節坐禮立禮及着服區別

明治八年十二月二十日
式部寮布達

府縣

伊勢神宮及官國幣社諸陵墓等祭典ノ節〔奉仕並ニ〕拜禮ノ輩殿上ノ式ハ祭服坐禮庭上ノ式ハ大禮服著用立禮ノ事

但神官ハ〔明治七年正院御達第三十八號〕ニ依リ坐禮立禮共〔祭服〕ヲ用ユヘキ事

右ノ通被定候條來明治九年一月ヨリ執行可致且ツ管内ニ官國幣社等有之向ハ其旨神官ヘ可被相達此段及布達候也

○神宮及官國幣社諸陵墓等祭典勅使著服制

明治十七年一月二十四日
宮内省達乙第一號

府縣

神宮及官國幣社諸陵墓等祭典ニ付勅使トシテ掌典參向ノ節ハ自今祭服（從前ノ衣冠）著用候條此旨相達候事

但地方官勅使相勤候節ハ便宜大禮服ヲ以テ祭服ニ換用可致尤殿上ノ式ハ明治八年十

二月式部寮布達ノ通可心得事

○神官神職制服（摘錄）

明治二十七年二月一日 勅令第六號 改正 三三年第三七九號

朕神官神職服制ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

神官神職服制

第二條　神官神職ノ制服ハ正服略服及齋服トス

第三條　正服ハ大禮ノ場合ニ著用スルモノトス

大禮トハ天皇三后皇太子皇太孫御參拜、勅使奉幣、大祭、朝拜、參賀及謁見ヲ云フ

第四條　略服ハ小禮ノ場合ニ著用スルモノトス

小禮トハ毎月恒例小祭、日拜等ヲ云フ

第五條　齋服ハ公式ノ祭祀ニ著用スルモノトス但朝拜、參賀及謁見ヲ除クノ外時宜ニ依リ正服ニ換用スルコトヲ得

○神道諸宗教師僧侶禮服

明治七年三月二十四日 太政官布告第三十八號

〔神官教導職〕及僧侶禮服ノ儀左ノ通相定候條此旨夫々〔使〕府縣〔可〕布告事

一〔華族ニテ神官又ハ教導職ニ任補ノ輩ハ其位階相當ノ大禮服著用不苦事〕

一　神道〔教導職〕ハ大禮服著用ノ節〔神官同樣〕祭服ヲ可相用事

但常禮ノ節ハ淨衣直垂ヲ以テ通常禮服ニ換用不苦事

一　諸宗〔教導職〕ハ同上ノ節法衣ヲ可相用事

一　僧侶ハ法用ノ外禮服著用ノ節通常禮服又ハ法衣可相用事

○警察官及消防官服裝規則（摘錄）

明治二十三年七月二十九日 內務省訓令第二十七號 改正 二七年第八號 四一年第一號

警察官及消防官服裝規則左ノ通之ヲ定ム

警察官及消防官服裝規則

第一條　警察官及消防官ノ服裝ヲ分テ正裝禮裝常裝ノ三種トス

第六條　正裝ハ儀式祭典等總テ大禮ノトキ著用スルモノトス其場合概子左ノ如シ

一　新年參賀

一　三大節（新年宴會紀元節天長節）參賀

一　天機伺其他拜謁ノ爲メ參內スルトキ

一　靖國神社招魂社大祭參拜

一　國儀式及公式行幸行啓御先驅竝供奉ノトキ

一　任官叙位叙勳ノトキ
一　一般大禮服著用ノ場合
一　成規上明文アル場合

第七條　禮裝ハ概ヲ左ニ列記スル場合ニ於テ著用スルモノトス

一　宮中ニ於テ御宴ニ陪スルトキ
一　通常行幸、行啓御先驅及供奉ノトキ
一　天覽ノ場所ニ臨ミ陪覽スルトキ
一　行幸啓ノ場所ヘ參集シ若ハ奉送奉迎スルトキ
一　正式勅使警備
一　政始出廳
一　歳暮參賀
一　任官叙位叙勳ノ御禮及之ニ齊シキ場合ニテ參内スルトキ
一　巡閲ヲ行ヒ及巡閲ヲ受クルトキ
一　夜會其他廉アル宴會ニ臨ムトキ
一　通常禮服及「フロックコート」著用ノ場合
一　自家親屬其他ノ賀儀葬祭

第八條　常裝ハ平常勤務ノ際著用スル所ノ服裝トス

第九條　已ムヲ得サル場合ニ於テハ國儀式竝公式行幸啓御先驅ニ參スルトキ任官叙位叙勳ノトキニ限リ禮裝ヲ著用スルコトヲ得

第十條　行幸啓ノ道筋警備及監臨等ノ場合ニ於テハ常裝ニ正帽ヲ用フヘキモノトス但急遽ノ場合ニ於テ監臨ヲ要スルトキハ正帽ヲ用ヒサルモ妨ケナシ

第二十六條　奉送奉迎御先驅正式勅使警備其他儀式上隊伍ヲ爲ス場合ニ於テハ各員齊一ノ服裝ヲ爲スヘシ

○巡査服裝規則（摘錄）

明治二十九年十一月二十六日内務省訓令第十一號　改正　三四年第一九號　四一年第二號

警視廳　府縣（東京府ヲ除ク）

巡査服裝規則左ノ通相定ム

巡査服裝規則

第二條　服裝ハ正肩章ヲ著クルヲ正裝トシ略肩章ヲ著クルヲ常裝トス（但書略ス）

（二項略ス）

第三條　正裝ハ警察官及消防官服裝規則第六條、第七條ノ場合ニ於テ用ユル所ノ服裝トス

第四條　常裝ハ平常勤務ノ際用ユル所ノ服裝トス

第十四條　儀式上隊伍ヲ爲ス場合ニ於テハ各自齊一ノ服裝ヲ爲スヘシ

明治三十年一月十三日
拓殖務省訓令第一號

北海道廳

明治二十九年十一月内務省訓令第十一號巡査服裝規則ハ北海道廳巡査ニ之ヲ適用ス

○典獄看守長看守服裝規則（摘錄）

明治二十九年十一月二十五日
内務省訓令第十號　改正　四二年司法省訓令第三號

〔警視廳府縣東京府ヲ除ク集治監北海道集治監ヲ除ク〕

典獄看守長看守服裝規則左ノ通相定ム

典獄看守長看守服裝規則

第五條　正裝ハ儀式祭典等總テ大禮服著用ノ場合ニ著用スルモノトス但典獄ニ在テハ大禮服ヲ著用スルモ妨ナシ

第六條　禮裝トハ通常禮服著用ノ場合ニ著用スルモノトス

第七條　常裝ハ平常勤務ノ際著用スル所ノ服裝トス

明治二十九年十二月四日
拓殖務省訓令第二十號

本年勅令第三百六十六號ニ定メタル制服ヲ著用スル典獄以下ノ服裝ハ本年十一月内務省訓令第十號ニ準據スヘシ

〔北海道廳　北海道集治監〕

〔但分監長ノ服裝ハ典獄ニ同シ〕

○小林區署職員服制禮式規程（摘錄）

明治三十六年十二月二十九日
農商務省訓令第二十二號

大林區署

小林區署職員服制禮式規程左ノ通相定ム

小林區署職員服制禮式規程

第一章　服裝

第二條　小林區署職員禮裝ノトキハ一般ニ規定スル相當官ノ禮服ヲ著用スヘシ但シ通常禮服著用ノ場合ニ於テハ制裝ヲ以テ之ニ代用スルコトヲ得

○北海道廳森林監守服裝帶劍並禮式規定

明治三十二年六月二十二日
内務省訓令第二十一號

北海道廳

北海道廳

北海道廳森林監守服裝帶劍並禮式ニ關スル規定ハ（明治二十四年七月農商務省訓令第三十號）ヲ準用スヘシ

○貴族院衆議院守衛長守衛番長及守衛服裝規則（摘錄）

明治三十年十月十三日閣令第三號

貴族院衆議院守衛長守衛番長及守衛服裝規則左ノ通定ム

守衛長守衛番長守衛服裝規則

第一條　守衛長守衛番長ノ服裝ヲ分チテ正裝略裝ノ二種トシ守衛ノ服裝ハ正裝ノミトス

第三條　正裝ヲ著用スル場合左ノ如シ

一　新年參賀

一　三大節參賀及祭典參拜

三　叙位叙勳及之ニ均シキ場合

四　一般大禮服及通常禮服著用スヘキ場合

守衛ハ總テ勤務ノトキニ在テモ正裝ヲ著用スヘシ

第四條　守衛長守衛番長ノ略裝ハ議會開會中及當直勤務ノ際著用スヘシ

○陸軍服裝規則（摘錄）

明治三十九年十二月十九日陸軍省陸達第八十一號

陸軍服裝規則別冊ノ通定メラル

但明治三十四年陸達第五十九號ハ之ヲ廢止ス

（別冊）

陸軍服裝規則

第一章　服裝ノ種類及著裝法

第一條　陸軍軍人ノ服裝ハ左ノ四種ニ區分ス但シ第一號第二號ハ將校（將校相當官及准士官ヲ含ム以下同シ）ニ限ル

一　正裝

二　禮裝

三　軍裝

四　略裝

第二章　各種服裝ヲ用ウル場合

第十二條　正裝ヲ爲ス場合概子左ノ如シ

一　新年

二　三大節（新年宴會、紀元節、天長節）

三　特ニ拜謁ノ爲參內スルトキ

四　賢所參拜ノトキ

五　靖國神社大祭日（單獨參拜スルトキ）

六　任官叙位叙勳ノトキ

七　一般大禮服著用ノトキ

其ノ他自家ノ賀儀葬祭ニモ之ヲ著用スルコトヲ得

第十三條　禮裝ヲ爲ス場合概子左ノ如シ

一　宮中若ク皇族ノ晩餐ニ陪スルトキ

二　夜會其ノ他廉アル宴會ニ出ルトキ

三　一般通常禮服著用ノトキ

其ノ他親族ノ賀儀葬祭ニモ之ヲ著用スルコトヲ得

第十四條　軍裝ヲ爲ス場合概子左ノ如シ

一　宮中若ハ皇族ノ午餐ニ陪スルトキ

二　內謁見ノ爲參內スルトキ

三　歲末御祝詞ノ爲參內スルトキ

四　天機伺竝御禮（任官叙位叙勳其ノ他）ノ爲參內スルトキ

五　天覽ノ場所ニ參列スルトキ

六　行幸行啓等ノ場所ニ參集スルトキ

七　特ニ上官ニ謁スルトキ

八　陸軍始

九　靖國神社大祭日（隊伍ヲ爲シテ參拜スルトキ）

十　觀兵式送迎式伺候式又ハ儀仗服務ノトキ

十一　動員部隊ニ屬スルトキ

十二　衛戍勤務ニ服スルトキ

十三　秋季演習及廉アル演習ノトキ

十四　軍法會議ニ列スルトキ

十五　下士以下ニシテ將校ノ正裝禮裝ヲ著用スル場合ニ相當スルトキ

十六　一般通常服著用ノトキ

其ノ他一般ノ賀儀葬祭ニモ之ヲ著用スルコトヲ得

（三、四項略ス）

第十五條　略裝ハ前三條ニ列記スル場合ノ外之ヲ用ウ

第十六條　動員セル部隊ニ屬スル者ハ正裝禮裝ヲ爲スヘキ場合ニ於テ軍裝ヲ用ウ

守備又ハ特別ノ任務ニ由リ衛戍地外ニ駐屯スル部隊ニ屬スル者ニシテ正裝禮裝ヲ整

ヒ得サルトキハ前項ニ同シ

（明治三十八年一月二十日 陸軍省陸達第四號）

陸軍軍人ニシテ戰時中　御座所ニ於テ拜謁仰付ラルル場合ニハ其ノ服裝ハ總テ軍裝ヲ爲スコトニ定メラル

但シ特ニ著服指定ノ場合ニハ本文ノ限ニ在ラス

（明治三十八年二月十日 陸軍省陸達第九號）

大本營陸軍部職員及動員シタル諸部團體ニ屬スル軍人ハ宮中諸儀式ニ際シ正裝禮裝通常禮裝著用ノ場合ニ於テモ軍裝ヲナスヲ得ルコトニ特ニ許可セラル

○理事理事試補及陸軍監獄長服裝規則（摘錄）

（明治三十九年九月十九日 陸軍省陸達第六十三號）

理事理事試補及陸軍監獄長服裝規則左ノ通定ム

但シ明治二十四年陸達第九號ハ之ヲ廢止ス

理事理事試補及陸軍監獄長服裝規則

第一條　服裝ヲ分テ正裝、禮裝、軍裝、略裝ノ四種トシ左ノ如ク著裝ス

（左記略ス）

第二條　各種服裝著用ノ場合ハ陸軍將校ニ就テ規定シタルモノニ同シ但シ軍法會議ニ列スルトキハ軍裝ヲ用ウルモノトス

○陸軍錄事陸軍監獄看守長陸軍監獄看守及陸軍警守服裝規則（摘錄）

（明治四十一年七月二十五日 陸軍省陸達第五十四號）

陸軍錄事、陸軍監獄看守長、陸軍監獄看守及陸軍警守服裝規則左ノ通定ム

明治二十六年陸達第百六號ハ之ヲ廢止ス

陸軍錄事、陸軍監獄看守長、陸軍監獄看守及陸軍警守服裝規則

第一條　錄事、監獄看守長、監獄看守及警守ノ服裝ハ左ニ列記スルモノヲ著裝スルモノトス

（左記略ス）

第二條　前條ノ服裝ハ職務ニ服スルトキ其ノ他陸軍服裝規則ニ定ムル陸軍下士以下ノ軍裝、略裝ヲ爲ス場合ニ之ヲ著用ス

○在鄕陸軍下士兵卒制服著用ヲ得ル場合

明治三十四年九月二日
陸軍省訓令甲第二號

北海道廳　府縣

在郷陸軍下士兵卒ハ左ノ場合ニ限リ制服（帶劍ヲ除ク）ヲ著用スルコトヲ得

一　滿期歸郷ノトキ
二　召集若クハ簡閲點呼ノトキ
三　演習及觀兵式參觀ノトキ
四　賀儀葬祭ノトキ
五　以上掲クルモノヽ外在郷軍人ノ資格ヲ表スルトキ

○海軍服裝規則（摘錄）

明治二十九年十一月二十日
海軍省達第百二號　改正　二九年第一〇六號、三二年第一五三號、三三年第八四號第一三七號、三五年第一七號、三六年第五八號、三七年第一〇四號、三八年第四號第一〇二號、四〇年第六二號第一〇六號、四一年第六六號、四二年第五八號

海軍服裝規則左ノ通改正ス

海軍服裝規則

第一條　海軍服裝規則ハ海軍軍人ノ服裝ニ關スルコトヲ規定ス

第二條　正服著用ノ場合ハ概子左ノ如シ

一　新年朝拜參賀、天長節參賀若ハ紀元節參賀參拜又ハ是等ノ日ニ於テ艦團等ニ在テ遙拜ノトキ
二　特ニ拜謁ノ爲參內スルトキ及賢所參拜ノトキ
三　新年宴會、紀元節宴會、天長節宴會
四　勳章奉授拜受又ハ其ノ式ニ班列スルトキ
五　臨御ノ觀兵式ニ出場スルトキ若ハ之ヲ拜觀ノ爲參列スルトキ
六　臨御ノ議會開院式ニ參列スルトキ竝同式陪觀ノ爲參院スルトキ
七　御祭日參內參拜ノトキ
八　靖國神社大祭參拜ノトキ
九　賢所御神樂ニ參列スルトキ
十　臨時大禮ニ係ル儀式祭典及之ニ均シキ場合ニ於ケル儀式祭典
十一　前諸號ノ外條例規則等ニ於テ規定アルトキ

第三條　禮服著用ノ場合ハ概子左ノ如シ

一　晩餐御陪食ノトキ但シ正服袴及正服劍帶
二　任官叙位ノ宣旨ヲ受クル爲參內スルトキ
三　皇族ノ晩餐若ハ皇族ノ臨マル、晩餐ニ陪スルトキ但シ正服袴及正服劍帶
四　天長節及之ニ均シキ場合ニ於ケル夜會但シ通常禮服帽正服袴正服劍帶及短劍
五　臨御ノ式場ニ參列スルトキ
六　鎭守府、要港部、艦團若ハ勤務ノ廳（其ノ廳ニ隸スル所在各廳ヲ包含ス）ニ臨御ノトキ

七　重立タル晩餐但シ通常禮服帽短劍
八　儀仗トシテ出場スルトキ
九　海軍葬儀ニ於テ喪主、先導、陪柩若ハ幹事タルトキ若ハ自家及親戚ノ賀儀葬祭ノトキ
十　外國ノ軍艦若ハ外國ノ重ナル文武官員ヲ訪問若ハ回訪スルトキ
十一　前諸號ノ外條例規則等ニ於テ規定アルトキ

第四條　通常禮服著用ノ場合ハ概ネ左ノ如シ

一　艦團等ニ於テハ一月一日、同二日、同三日、紀元節及天長節右以外ノ祭日、祝日、日曜日及之ニ均シキ公暇日ニ於テ遙拜式、分隊點檢等施行ノトキ
二　午餐御陪食並觀花御宴會ニ陪スルトキ
三　御座所拜謁ノ爲參內スルトキ
四　天機伺ノ爲參內スルトキ
五　任官叙位叙勳御陪食御宴會ノ御禮若ハ之ニ齊シキ場內ニ於テ參內スルトキ
六　歲末其ノ他御祝詞ノ爲參內スルトキ
七　臨幸ノ節奉送奉迎奉伺スルトキ
八　臨御ノ場所ニ參會スルトキ
九　皇族ノ午餐ニ陪スルトキ
十　進水式、學術卒業證書授與式又ハ學術及第證書授與式ニ參列若ハ參會スルトキ
但シ臨御ノトキハ參列者ノミ禮服
十一　大祓ニ參列スルトキ
十二　重立タル午餐及宴會
十三　迎送式、伺候式
十四　特ニ上官ニ伺候スルトキ
十五　就職退職ノトキ
十六　任官叙位ノ宣旨若ハ賞狀等ヲ受クルトキ
十七　海軍葬儀ニ會葬スルトキ及知人ノ賀儀葬祭
十八　軍法會議構成員トシテ出廷スルトキ
十九　第三號第十號ノ場合ノ外內外國ノ文武官員（本邦海軍武官ヲ除ク）ヲ訪問若ハ回訪スルトキ
二十　政始出廳ノトキ
二十一　前諸號ノ外條例規則等ニ於テ規定アルトキ

第四條ノ二　行啓ノトキ若ハ皇族ノ其ノ資格ヲ以テ成ラセラルヽトキニ於ケル服裝ハ總テ臨御ノトキニ準スヘシ

第四條ノ三　第二條乃至第四條ニ依リ同時ニ二樣ノ服ヲ著用スヘキ場合ニ際會セハ其ノ重キニ從フヘシ

第二條乃至第四條ノ場合ニ於テ正服通常禮服ノ制ナキ下士卒ニ在テハ正服著用ノ場

合ニ禮服、通常禮服著用ノ場合ニ軍服ヲ著用スヘシ

第五條　軍服ハ第四條ニ掲クルノ外正服禮服著用ノ場合ヲ除キ一般ニ著用スルコトヲ得但正服禮服ノ制ナキ者ハ正服禮服著用ノ場合ニ於テモ軍服ヲ著用スヘシ

（二項略ス）

第六條　正服禮服及軍服ハ第二條乃至第五條ニ於テ其ノ著用ノ場合ヲ規定スト雖戰時事變演習若クハ操練等ノ場合ニ於テハ特命アルニアラサレハ之ヲ著用セサルヲ例トス

第七條　通常軍服ハ正服禮服及軍服著用ノ場合ヲ除キ一般ニ著用スヘシ但所在先任將校ノ指定ニ依リ軍服著用ノ場合ニ於テモ之ヲ著用スルコトヲ得

第八條　夏服ハ夏期ノ間（暑氣ノ候ヲ謂フ內地ニ在テハ凡ソ六月一日ヨリ九月盡日マテ以下之ニ倣フ）通常禮服若ハ軍服著用ノ場合ニ著用スヘシ

第八條ノ二　軍服若ハ夏服ハ前諸條ニ於テ其ノ著用ノ場合ヲ定ムト雖炎暑ノ際又ハ特別ノトキニ限リ禮服著用ノ場合ニ亦之ヲ著用スルコトヲ得

○海軍監獄長服裝規則

（明治四十一年七月六日　海軍省達第八十三號）

海軍監獄長服裝規則左ノ通定ム

海軍監獄長服裝規則

第一條　海軍監獄長ノ服裝ハ適用シ得ル限リ海軍服裝規則ニ準據ス但シ正服禮服ハ各其ノ相當服、職務服ハ通常禮服軍服著用ノ場合ニ準シ各規定シアル條項ヲ適用スルモノトス

第二條　宮中ノ儀式禮典等ニ際シ文官ノ服裝ニ關シ宮內省ヨリ特ニ指定アルニ方リ海軍服裝規則ト牴觸スルトキハ宮內省ノ指定ニ從フヘシ

○豫備役後備役海軍下士卒制服ヲ著用スヘキ場合

（明治三十五年一月十七日　海軍省訓令第一號）

北海道廳　府縣

召集中ニアラサル豫備役若ハ後備役海軍下士卒ハ左記ノ場合ニ限リ可成制服ヲ著用スヘシ

一　滿期歸鄉ノトキ

二　行幸行啓ニ際シ奉迎奉送スルトキ

三　召集若ハ簡閱點呼ノトキ

四　觀兵式觀艦式若ハ演習ヲ陪觀スルトキ

五　賀儀葬祭ノトキ

六　前諸號ノ外軍人ノ資格ヲ表スルトキ

參內　參賀　參拜　參入

○宮中儀式上席次

明治二十四年十二月二十二日宮內省達甲第六號　改正　二五年甲第九號、二六年甲第三號、甲第四號

宮中儀式上席次左ノ通改定ス

第一條　宮中儀式上ノ席次ハ別表ニ依リ其次第ヲ定ム

但職務上ニ關スルモノニアラス

第二條　同等中ノ順次ハ任補ノ日ヲ以テ之ヲ定ム若シ其任補ノ日同シキ時ハ前官ノ席次ニ據ル

但爵香間錦鷄間祗候ハ爵位勳ノ內其高キヲ以テ席次シ有爵有勳者ハ從前ノ例ヲ以テ席次ス

第三條　同等中ニテ官職ヲ轉スルコトアルモ初メテ其等ニ進ミタル日ヲ以テ席次ヲ定ム

第四條　兼官アルモノハ本官ト兼官トヲ問ハス其高キニ據ル

第五條　初任ニシテ同日同等ノ者全ク席次ヲ定ムヘキ事由ナキ時ハ其年齡ニ據ル

第六條　廢官辭職ノ後三十日以內ニ更ニ前官ト同等ノ官ニ任補ノ輩ハ尙ホ前席ヲ保ツコトヲ得

第七條　官職ヲ降リタル者ハ現官同等中ノ首座トス

但親任ヨリ一等ニ一等ヨリ二等ニ降リタルモノハ同等中特別席ノ次席トス

第八條　特ニ席次ヲ定メラルヽ者ハ此條項ノ限リニアラス

（別表）

大勳位	叙勳ノ前後ヲ以テ席次ス
內閣總理大臣	
各大臣	任官ノ前後ヲ以テ席次ス
樞密院議長	任官ノ前後ヲ以テ席次ス
陸軍大將	任官ノ前後ヲ以テ席次ス
海軍大將	任官ノ前後ヲ以テ席次ス
侍從長	
樞密院副議長	
樞密顧問官	任官ノ前後ヲ以テ席次ス
旭日桐花章	叙勳ノ前後ヲ以テ席次ス
公爵	叙位ノ前後ヲ以テ席次ス
勳一等	

參內　參賀　參拜　參入

旭日章　叙勳ノ前後ヲ以テ席次ス
瑞寶章　同上

一等

式部長
掌典長
〔皇太后宮大夫〕
皇后宮大夫　任補ノ前後ヲ以テ席次ス
大審院長
會計檢査院長〔二等〕
行政裁判所長官

中將ニシテ參謀總長及〔監軍〕海軍軍令部長ニ補セラルヽコトアルトキハ一等官中特別席ニ列シ任補ノ前後ヲ以テ席次ス

高等官一等　任補ノ前後ヲ以テ席次ス
侯爵　叙位ノ前後ヲ以テ席次ス

二等

〔會計檢査院長〕
高等官二等　任補ノ前後ヲ以テ席次ス

廢香間祇候　爵位勳ノ內其高キヲ以テ席次ス
錦鷄間祇候　同上
伯爵　叙位ノ前後ヲ以テ席次ス

勳二等

旭日章　叙勳ノ前後ヲ以テ席次ス
瑞寶章　同上

子爵　叙位ノ前後ヲ以テ席次ス

勳三等

旭日章　叙勳ノ前後ヲ以テ席次ス
瑞寶章　同上

男爵　叙位ノ前後ヲ以テ席次ス

三等

高等官三等　任補ノ前後ヲ以テ席次ス

四等

高等官四等　任補ノ前後ヲ以テ席次ス

五等

高等官五等　任補ノ前後ヲ以テ席次ス

參內　參賀　參拜　參入

奏任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル各公立學校校長敎諭ハ其任補ノ前後ヲ以テ席次ス

六等

高等官六等　任補ノ前後ヲ以テ席次ス

奏任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル各公立學校校長敎諭ハ其任補ノ前後ヲ以テ席次ス

七等

高等官七等　任補ノ前後ヲ以テ席次ス

雅樂部副長

奏任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル各公立學校校長敎諭及〔尋常〕師範學校敎諭ハ其任補ノ前後ヲ以テ席次ス

八等

高等官八等　任補ノ前後ヲ以テ席次ス

雅樂部副長

奏任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル各公立學校校長敎諭及〔尋常〕師範學校敎諭ハ其任補ノ前後ヲ以テ席次ス

九等

高等官九等　任補ノ前後ヲ以テ席次ス

○帶勳有位ノ輩新年並紀元節天長節參賀方

明治十一年十二月二日
太政官布告第三十六號

帶勳有位ノ輩新年並紀元節天長節參賀ノ儀左ノ通被定候條此旨布告候事

一　非役勳六等以上同從六位以上在京ノ輩ハ參內拜賀シ他ハ〔所在ノ地方廳ヲ經テ〕賀表ヲ上ルヘシ

但在官職ト雖モ判任以下ハ仍ホ非役ニ同シ

一〔非役勳七等以下同正七位以下ハ其身所在ノ地方廳ニ參賀スヘシ〕

〔但等外吏タルノ類ハ仍ホ非役ニ同シ〕

一〔勳三等以上從三位以上ハ　皇居中仕切門迄乘車馬ヲ得ヘシ〕

〔但在官職ノ廉ヲ以テ參上ノ節ハ其官職ノ本分ニ從フヘシ〕

一〔勳六等上從六位以上ハ　皇居御門臺迄乘車馬車寄ヨリ昇降ヲ得ヘシ〕

〔但在官職ノ廉ヲ以テ參上ノ節ハ上ニ同シ〕

明治二十六年十二月二十五日
宮內省達乙第七號

自今新年紀元節天長節ニ於テ非役正七位以下同勳七等以下在京ノ者ハ宮中ニ參賀シ地方ニ在ル者ハ賀表ヲ上ルヘシ

參内　參賀　參拜　參入

但在官職ト雖モ判任官以下ハ本文ニ同シ

明治二十八年十二月二十八日
海軍省達第百三十九號

功六級以下ニ叙セラレタル者ハ新年及祝節祭典等ノ節勳七等ノ者ト同樣同一ノ時刻ニ參賀參拜スヘシ

○新年紀元節天長節賀表書式

明治二十六年十二月二十五日
宮内省達乙第八號

新年紀元節天長節賀表書式左ノ通改正ス

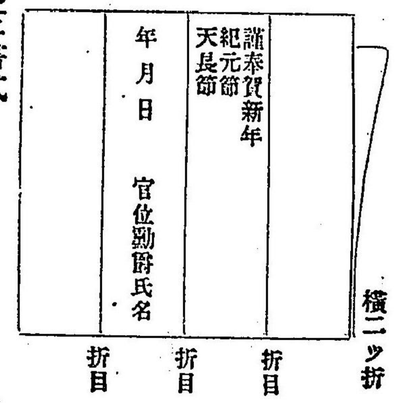
賀表書式

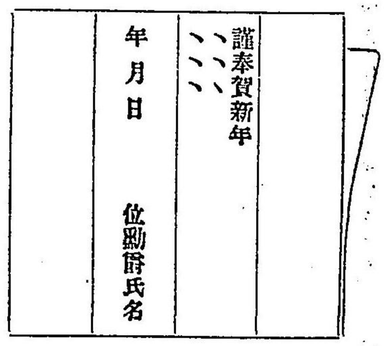
一　新年ニ拜賀シ又ハ新年紀元節天長節ニ宮中ヘ參賀シ得ヘキモノニシテ地方ニ在ルトキハ第一第二書式ニ據リ賀表ヲ式部職ニ差出スヘシ但連名ヲ以テスルモ妨ナシ

一　判任官准判任官判任待遇者ノ參賀又ハ賀表ヲ受ケタル各長官ハ第三書式ニ據リ言上書ヲ式部職ニ差出スヘシ

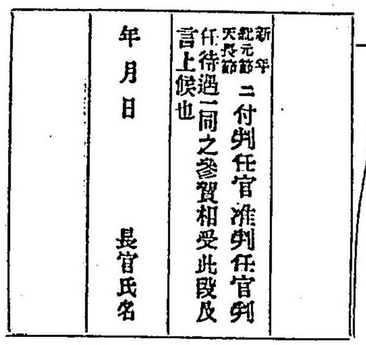
第一書式

第二書式





第三書式



參内　參賀　參拜　參入

料紙大廣奉書ヲ用フヘシ但美濃紙薄葉ヲ代用スルモ妨ナシ

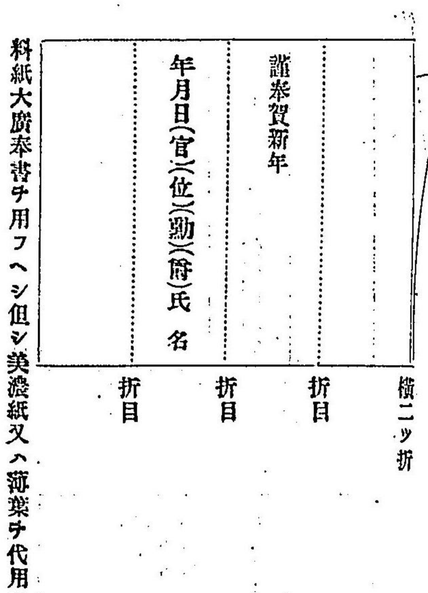
○東宮御所ヘ新年賀表差出方

明治三十七年十二月二十四日
宮內省達乙第一號

自今新年式ニ據リ東宮御所ヘ拜賀又ハ參賀スヘキ者ニシテ地方ニアルトキハ左ノ書式ニ據リ賀表ヲ東宮職ニ差出スヘシ

但シ連名ヲ以テ上ツルモ妨ケナシ

書式



料紙大廣奉書ヲ用フヘシ但シ美濃紙又ハ薄葉ヲ代用スルモ妨ケナシ

○非役從六位以上同勳六等以上ノ輩賢所皇靈神殿等祭典ノ節參拜

明治十七年三月二十二日
宮內省達乙第三號

府縣

非役從六位以上同勳六等以上ノ輩自今賢所　皇靈　神殿等祭典ノ節參拜被差許候條此旨相達候事

○天長節拜賀重服者憚ルニ及ハス

明治五年九月十八日
太政官布告第二百七十六號

天長節拜賀自今重服者不及憚候事

○除服出仕者御祭典奉仕參拜憚ルニ及ハス

明治六年二月七日
太政官布告第四十二號

除服出仕　宣下候輩自今御祭典ノ節奉仕參拜不及憚候事

但忌明ノ輩同樣不及憚候事

○奏任官以上天機伺竝任叙御禮申上方

明治四年五月十四日
辨官達

自今　天機伺任叙御禮等勅任官ハ宮内省ヘ罷出申上〔奏任官ハ同省面謁所ニテ可申上〕候此段爲心得相達候也

明治四年八月十四日
史官達

諸御禮是迄奏任官宮内省面謁所ヘ罷出申上候處自今同省當番〔大亟〕ヲ以テ可申上此段相達候也

○師團在勤竝地方奏任官以上赴任ノ節天機窺方

明治五年二月七日
太政官布告第三十七號

〔兵部省〕宮内省府縣諸〔鎮臺出張〕奏任官以上並地方奏任官以上ノ輩赴任ノ節於宮内省ニ窺　天機謁見被仰付候條此旨相達候事

（參考）

明治六年八月七日
陸軍省布第三十號

諸局寮司各鎮臺一般各鎮臺ニ派出將官始文武官員是迄出張申付候例ニ有之候處自今ハ在勤ニ改定候條此旨相達候事

但現今出張ノ向キモ即在勤ト可相心得事

○御近火ノ節勅任官ハ參朝天機伺奏任官以下ハ其官省ヘ參集

明治三年六月十七日
太政官布告

御近火之節諸官省勅任官爲　天機伺參　朝可致其他奏任官以下之輩ハ各其官省ヘ可相詰候事

○御車寄其他沓ノ儘昇降ヲ許シ草履ヲ禁ス

明治四年十二月十四日
太政官達

來ル十七日ヨリ御車寄始都テ沓ノ儘昇降被差許候此段相達候事

明治四年十二月二十七日
太政官布告

先般沓ノ儘昇降被差許候處草履相用候者モ有之不體裁ノ儀ニ付自今沓ノ外昇降不相成候事

但上沓相用候儀ハ可爲勝手事

○參内及賢所參拜吹上御苑參入昇降下乘制限

明治二十二年一月九日
宮内省達號外

參内及
賢所參拜吹上御苑參入ノ輩昇降下乘制限左ノ如ク相定メ本年本月十一日ヨリ之ヲ實施ス

但時ニ臨ミ特ニ示達スル場合ニ於テハ此限ニアラス

參内

一　親任官勅任官麝香間祗候有爵者非役從四位以上外國公使其他内外國人ノ勳三等以上若クハ勅任ノ待遇ヲ受クルノ輩新年朝拜三大節及外國公使國書ヲ捧呈スル場合ニ限リ正門ヲ入リ御車寄ヨリ昇降シ乘馬車乘馬ノ儘昇降所ニ至ルヲ得若シ其人力車ナルトキハ正門ヨリスルモノハ正門外ニ於テ阪下門又ハ通用門ヨリスルモノハ東車寄前ニ於テ下乘スヘシ

一　同上ノ輩同上ノ場合ヲ除クノ外ハ都テ阪下門又ハ通用門ヲ入リ東車寄ヨリ昇降シ乘車馬ノ儘昇降所ニ至ルモノトス

一　奏任官華族非役正五位以下從六位以上内外國人ノ勳四等以下勳六等以上若クハ奏任ノ待遇ヲ受クルノ輩門跡寺院ノ住職ハ〔新年朝拜〕以下都テノ場合ニ於テ阪下門又ハ通用門ヲ入リ東車寄ヨリ昇降シ乘車馬ノ儘昇降所ニ至ルモノトス

賢所

一　親任官以下奏任ノ待遇ヲ受クル輩門跡寺院ノ住職ハ正門又ハ阪下門通用門吹上門ヲ入リ其正門吹上門ヨリスルモノハ千里門外ニ於テ阪下門通用門ヨリスルモノハ外庭東門ヲ經テ道灌門外ニ於テ下乘スルモノトス但正門ヨリスルモノハ乘馬車乘馬ノモノニ限ル

吹上御苑

一　親任官以下勅任ノ待遇ヲ受クル輩ハ吹上門ヲ入リ廣芝口ニ於テ下乘スルモノトス

一　奏任官以下奏任ノ待遇ヲ受クル輩ハ吹上門ヲ入リ吹上一ノ門ニ於テ下乘スルモノトス

明治二十三年十二月三十一日
宮内省達號外

奏任官華族非役正五位以下從六位以上内外國人ノ勳四等以下勳六等以上若クハ奏任ノ待遇ヲ受クルノ輩門跡寺院ノ住職ハ新年朝拜三大節參賀ノ節乘馬車乘馬ノ儘正門通行東車寄ヨリ昇降スヘシ若シ人力車ナル時ハ正門外ニ於テ下乘シ又阪下門通用門ヨリスルモノハ東車寄前ニ於テ下乘スヘシ

明治二十六年十二月二十六日
宮內省達乙第九號

正七位勳七等以下有位帶勳者　參賀並
賢所參拜ノ節及判任官判任待遇ノ輩
賢所參拜ノ節昇降下乘制限ハ明治二十二年一月九日宮內省達號外參內ノ條第三項及賢所ノ條ヲ適用ス

○赤阪濱芝三離宮及延遼館下乘制限

明治二十二年七月二十日宮內省達號外　改正　二二年一二月二六日同達號外

〔青山御所並花御殿〕赤阪濱芝三離宮延遼館參入ノ輩下乘制限左ノ如ク改定シ本年八月一日ヨリ之ヲ實施ス

但時ニ臨ミ特ニ示達スル場合ニ於テハ此限ニアラス

〔青山御所〕

一〔親任官勅任官爵香間祗候有爵者非役從四位以上外國公使其他內外國人ノ勳三等以上若クハ勅任ノ待遇ヲ受クルノ輩ハ御車寄ニテ下乘スヘシ〕

一〔奏任官華族非役正五位以下從六位以上內外國人ノ勳四等以下勳六等以上若クハ奏任ノ待遇ヲ受クルノ輩及門跡寺院ノ住職ハ表門內ニ於テ下乘スヘシ〕

〔花御殿〕

一〔親任官以下勅任ノ待遇ヲ受クルノ輩ハ御車寄ニ於テ下乘スヘシ〕

一〔奏任官以下奏任ノ待遇ヲ受クルノ輩及門跡寺院ノ住職ハ二ノ門內ニ於テ下乘スヘシ〕

赤阪離宮

一　親任官以下勅任ノ待遇ヲ受クルノ輩ハ御車寄ヨリ昇降シ乘馬車乘馬ノ儘昇降所ニ至ルヲ得

但御車寄ヲ開カサルトキハ車寄又車寄ヲ開カサルトキハ舊宮內省玄關ヨリ昇降スヘシ

一　奏任官以下奏任ノ待遇ヲ受クルノ輩ハ車寄ニ於テ下乘スヘシ

但車寄ヲ開カサルトキハ舊宮內省玄關ヨリ昇降スヘシ

濱離宮

一　親任官以下奏任ノ待遇ヲ受クルノ輩ハ中ノ門外ニ於テ下乘スヘシ

延遼館

芝離宮

一　親任官以下奏任ノ待遇ヲ受クルノ輩ハ昇降所ニ於テ下乘スヘシ

○青山離宮内假東宮御所昇降下乘制限

明治三十一年十二月二十一日
宮内省達乙第二號

青山離宮内假東宮御所參入ノ輩昇降下乘制限左ノ如ク相定ム

但シ時ニ臨ミ特ニ示達スル場合ニ於テハ此ノ限ニアラス

一　高等官及高等官ノ待遇ヲ受クル者並有爵者從六位勳六等以上ノ輩及門跡寺院ノ住職ハ新年及東宮御誕辰參賀ノ節ニ限リ乘馬車ノ儘御車寄ニ至リ昇降スルコトヲ得其ノ他ノ場合ハ都テ乘車馬ノ儘車寄ニ至リ昇降スヘシ

一　正七位勳七等以下ノ有位有勳者ハ都テ乘車馬ノ儘西門ヲ入リ車寄ニ至リ昇降スヘシ

○御門鑑ノ制

明治八年十二月二十二日
太政官布告

院省〔使〕廳東京府

今般御門鑑左之通改正候條來ル明治九年一月十一日ヨリ右御門鑑所持通行可致尤モ從前之分ハ同月同日ヨリ廢シ候儀ト可心得此旨相達候事

〔但規則之儀ハ從前之通可心得事〕

（雛形改正ニ付略ス）

明治四年正月十日
太政官布告

御門通行印鑑ノ儀私ニ外人ヘ借渡シ候者有之趣以ノ外ノ事ニ候自今右樣ノ儀無之樣末々迄屹度相心得可申事

○大禮服著用及勳章佩用者並制服著用軍人警察官御門通行門鑑ヲ要セス

明治七年四月二十四日
太政官達第五十五號

院省〔使〕府縣

文官大禮服着用ニテ　皇城〔假皇居〕青山御所〔太政官代〕ノ諸御門通行ノ節ハ印鑑所持ニ及ハス候條此旨相達候事

明治七年五月十二日
太政官布告第五十二號

非職有位ノ輩大禮服着用ニテ　皇城〔假皇居〕青山御所〔太政官代〕ノ諸御門通行ノ節ハ印鑑所持ニ及ハス候此旨布告候事

明治七年十月十二日
太政官達第百三十五號

文官大禮服着用ニテ　皇城〔假皇居〕等ノ諸御門通行ノ節ハ印鑑所持ニ及ハサル旨本年四月第五十五號ヲ以テ相達置候處非常並近火ノ節ハ大禮服着用候共文官奏任以下ハ印鑑所持通行可致此旨相達候事

但非役有位ノ輩モ本文同樣ニ候條其所轄廳ヨリ可相達事

明治十三年十二月十五日
太政官達第六十四號　改正　一四年第二一號

〔官〕省院〔使〕府縣

皇居諸門規則左ノ通相定來ル十四年一月一日ヨリ施行候條此旨相達候事

皇居諸門規則（摘錄）

第四條　外郭諸門出入ノ際大禮服著用ノ者及ヒ勳章掲帶ノ者並軍人警察官制服着用ノ者ハ其門鑑ヲ要セス

但大臣〔參議諸省ノ卿〕ハ常服着用ノ時ト雖モ其官姓名ヲ告ケテ出入スルコトヲ得

○陸軍將校下士兵卒宮城諸御門乘馬通行資格

明治十一年三月十二日
陸軍省達乙第三十三號

陸軍將校以下別紙記載ノ軍人自今　皇居諸御門乘馬通行被差許候條此旨相達候事

陸軍全般

（別紙）

一〔陸軍佐官及ヒ同等官以上並之ト同等官ノ職務ヲ奉スル者〕

一〔參謀士官〕砲騎輜重兵科〔士官〕下士兵卒

一〔傳令使並砲騎輜重兵隊附會計軍醫馬醫部士官〕

一〔工兵中隊長並步工兩隊副官ノ職ヲ奉スル士官〕

〔但他ノ士官ニ在テモ時トシテ差使ノ命ヲ奉シ乘馬セシムル者ハ本文ニ準ス〕

○諸御門通行カムリ笠差傘著帽ヲ許ス

明治五年六月三日
太政官布告第百六十九號

大手坂下兩御門內晴雨ニ不拘カムリ笠差傘共被差許候事

明治五年十一月二日
史官局廻

〔半藏〕竹橋兩御門本日ヨリ往來被差許候條爲御心得御達ニ及候也

明治八年七月十三日
陸軍省達第十號

内外人民着帽差傘ノ儘諸御門通行不苦旨御達相成候條爲心得此旨相達候事

陸軍全般

御名　御諱　御影　御肖像　勅語謄本　御紋章　御料文字

○御諱御名ノ文字熟字ノ外人民一般相名乘ルヲ許ス

明治六年三月二十八日太政官布告第百十八號

御歴代御諱並御名ノ文字自今人民一般相名乘候儀不及憚候事

但熟字ノ儘相用候儀ハ不相成候事

○天皇皇后兩陛下御影並教育ニ關スル勅語謄本奉安方

明治二十四年十一月十七日文部省訓令第四號

北海道廳　府縣

管内學校ヘ下賜セラレタル

天皇陛下

皇后陛下ノ　御影並教育ニ關シ下シタマヒタル

勅語ノ謄本ハ校内一定ノ場所ヲ撰ヒ最モ尊重ニ奉置セシムヘシ

明治四十二年六月五日官報號監府訓令第十四號

管内學校ニ下付セラレタル

天皇陛下

皇后陛下ノ　御影並教育ニ關シ下シタマヒタル　勅語謄本奉置心得左ノ通定ム

御影並　勅語謄本奉置心得

第一條　御影ハ學校内ニ特別ナル奉置所ヲ設ケ若ハ校舍内ニ最清淨ナル場所ヲ選ヒ一室又ハ一區域ヲ設ケ唐櫃等ニ納メ最尊重ニ奉置スヘシ

學校ニ適當ナル場所ナキトキハ理事廳民團役所等ニ於テ前項ニ準シ奉置スルコトヲ得

第二條　勅語謄本ハ　御影ト共ニ奉置所ニ奉置スヘシ

勅語謄本ノミヲ下付セラレタル學校ニ在リテハ校舍内最清淨ナル場所若ハ職員室内ノ高所ニ尊重ニ奉置スヘシ

第三條　御影並　勅語謄本ヲ奉置セル學校ニ在リテハ職員ヲシテ宿直セシムヘシ

勅語謄本ノミ奉置セル學校ニ於テモ亦同シ

學校内ニ教員住宅ノ設アリテ管守ヲ缺カサルモノハ特ニ宿直ヲ置クコトヲ要セス

第四條　非常變災ノ爲豫メ奉遷所ヲ定メ置クヘシ

第五條　御影竝　勅語謄本ハ儀式ヲ擧行スル場合ノ外他ニ假用セシムルコトヲ得ス

第六條　御影竝　勅語謄本奉置ノ學校ニシテ廢校シタル場合ハ　御影竝　勅語謄本ヲ返納スヘシ

○御肖像ニ關スル取締方

明治三十一年十二月二十八日　内務省訓令

御肖像ハ左ノ各項ニ準據シテ苟モ心得違ノ次第無之樣厚ク注意ヲ加フヘシ

右諭告ス

第一　天皇皇族ノ御肖像ハ其尊號御稱號ヲ標記シアルト否トヲ問ハス御肖像トシテノ外ハ寫出スヘカラス

第二　御肖像ハ總テ粗造ニ流レ不敬ニ渉ルヘカラス

第三　御肖像ハ不敬ニ渉ルヘキ場所ニ掲ケ又ハ陳列スヘカラス

第四　御肖像ハ露店ニ於テ發賣頒布スヘカラス

○菊御紋竝禁裏御用等ノ文字濫用ヲ禁ス

明治元年三月二十八日　太政官布告

一　禁裏御用或ハ　禁裏御料又ハ　禁裏御内抔ト會符牓示杭標札等ニ書記シ候儀ハ有之間敷事ニ候處往々見受候ニ付以來屹度相改　御用　御料ト而已書記イタシ候樣被　仰出候事

但標札ハ姓名相記シ又ハ官名役名等記シ候儀不苦候事

一　提燈又ハ陶器其外賣物等エ御紋ヲ畫キ候事共如何ノ儀ニ候以來右之類　御紋ヲ私ニ附ケ候事屹度可禁止旨被　仰出候事

但御用ニ付是迄被免之分モ一應伺出可申候

右之通被　仰出候條末々迄不洩樣可申達事

明治二年二月二十八日　行政官布告

從來宮堂上ヨリ諸國寺院ヘ祈願所ト唱ヘ妄ニ菊　御紋附ノ品々寄附致候儀無謂次第ニ付堅ク禁止被　仰出候尤新ニ祈願所ニ致候儀モ一切不相成候此旨可相心得樣　御沙汰候事

但無據舊來之由緒ヲ以テ　御紋附ノ品其儘致寄附且新ニ祈願所ニ致置度分ハ其筋ヘ

伺出可受御差圖候事

明治二年八月二十五日
太政官布告

社寺ニテ是迄菊御紋用ヒ來ル者不少候處今般御改正相成社ハ伊勢八幡上下加茂等寺ハ泉涌寺般舟院等ノ外ハ一切被差止候旨被　仰出候事
但格別由緒有之社寺ハ由緒書ヲ以テ可伺出候事

明治二年十月十日
留守官

菊御紋之儀於親王家ハ十四五葉以下或ハ裏菊等品ヲ替用可申旨兼テ被　仰出有之候處宮門跡黒御所華族等ニ於テモ右ニ準シ候儀勿論ノ事ニ候是迄親王家始社寺之向ヘ寄附ニ相成來リ候分　朝廷御寄附ニ紛敷甚不都合之次第ニ付早々相改候樣從東京　御沙汰候間此段相達候事

明治三年三月十七日
太政官布告

一親王家ニ而用來候菊紋葉替又ハ裏表等品ヲ替ヘ御紋ニ不紛樣可致旨先般　御沙汰之通ニ候條右紋付之品々社寺ヘ致寄附候儀堅禁止被　仰出候事

明治四年六月十七日
太政官布告

菊御紋禁止ノ儀ハ兼テ御布告有之候處猶又向後由緒ノ有無ニ不關皇族ノ外總テ被禁止候尤モ御紋ニ紛敷品相用候儀モ同樣不相成候條相改可申事
但從來諸社ノ社頭ニ於テ相用來候分ハ地方官ニ於テ取調可申出事

明治十三年四月五日
宮内省達乙第二號

府縣

菊御紋章ヲ賣物等ニ畫キ候儀並紛敷品相用候儀モ不相成旨明治元年三月二十八日明治四年六月十七日太政官布告ノ趣モ有之候處近來往々賣品ニ御紋章ヲ畫キ候向有之哉ニ付取締方一層注意可致候此段相達候事

明治三十四年十一月二十三日
内務省訓令第二十號

廳府縣（東京府ヲ除ク）

近來往々各種ノ商品、商品容器、封皮、引札、廣告、看板等ノ物件ニ於テ帝室御用、東宮御用、宮内省御用其ノ他皇室ニ關スル文字ヲ濫用スル者ナキニアラス右ハ明治元年三月太政官布告ノ精神ニ違背シ穩ナラサル儀ニ付心得違ノ者ナキ樣嚴重取締ラルヘシ

○府縣廳並飛地出張所等門玄關御紋ノ幕挑灯ヲ用井シム

明治三年十月十四日
太政官布告

府縣廳（並ニ飛地出張所）等門玄關自今御紋之幕挑燈相用可申事

○官幣社社殿ノ裝飾及社頭ノ幕提燈ニ限リ菊御紋ヲ用ウルヲ許ス

明治七年四月二日
太政官達

（開拓使）京都府　大阪府
兵庫縣　埼玉縣（足柄縣）
千葉縣（新治縣）栃木縣
奈良縣（堺縣）愛知縣
滋賀縣　島根縣　和歌山縣
（小倉縣）宮崎縣　鹿兒島縣

各通

社寺ニシテ菊御紋相用候義禁止ノ旨明治二年己巳八月布告候處自今官幣社社殿ノ裝飾及社頭之幕提灯ニ限リ菊御紋相用不苦候條此旨管内官幣社ヘ可相達事

明治十二年四月二十二日
太政官達第二十號

國幣社所在（使）府縣

社寺ニシテ菊御紋相用候儀ニ付明治二年八月布告ノ趣モ有之候處自今國幣社社殿ノ裝飾及社頭ノ幕提燈ニ限リ菊御紋相用不苦候條此旨管内國幣社ヘ可相達事

○明治二年八月菊御紋禁止ノ布告前神殿佛堂ニ裝飾セシ菊御紋ニ限リ存置ヲ許ス

明治十二年五月二十二日
太政官達第二十三號

（使）府縣

一般社寺ニ於テ菊御紋相用候儀不相成旨明治二年八月布告ノ趣モ候處右布告前神殿佛堂ニ粧飾シタル分ニ限リ其儘存シ置苦シカラス候此旨相達候事

宮内衛生

○宮中衛生會規程

明治四十一年二月二十八日
宮内省令第三號

宮中衛生會規程勅裁ヲ經テ左ノ通定ム

宮中衛生會規程

第一條　宮內省ニ宮中衛生會ヲ置ク

第二條　宮中衛生會ハ宮中ノ衛生及防疫ニ關スル事項ヲ調査審議ス

第三條　宮中衛生會ハ會長一人委員十二人ヲ以テ之ヲ組織ス

會長及委員ハ宮內高等官ノ中ヲ以テ之ニ充ツ

第四條　特別ノ事件ヲ調査審議セシムル爲必要アルトキハ前條定員ノ外臨時委員若干人ヲ置クコトヲ得

第五條　會長ハ會務及議事ヲ整理シ其ノ議決ヲ宮內大臣ニ具申ス

第六條　會長ハ委員ヲ指名シテ特別ノ調査ヲ爲サシムルコトヲ得

第七條　宮中衛生會ハ宮內大臣ノ命令又ハ委員二人以上ノ請求ニ依リ會長之ヲ召集ス

第八條　侍醫頭ハ宮中衛生會ノ會議ニ出席シテ意見ヲ述フルコトヲ得

第九條　宮中衛生會ニ幹事一人ヲ置ク

幹事ハ侍醫補ノ中ヲ以テ之ニ充ツ庶務ヲ掌ル

第十條　宮中衛生會ニ書記三人ヲ置ク

書記ハ宮內屬及皇宮警部ノ中ヲ以テ之ニ充ツ議事ノ筆記及庶務ニ從事ス

附則

本令ハ明治四十一年三月一日ヨリ之ヲ施行ス

○宮內傳染病豫防令

明治四十一年十月十日　皇室令第二號

朕宮內傳染病豫防令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

宮內傳染病豫防令

第一條　本令ニ於テ傳染病ト稱スルハ左ニ掲ケタル三類ノ傳染病及其ノ疑似症ヲ謂ヒ有病地ト稱スルハ第一類ノ傳染病又ハ其ノ疑似症流行シ若ハ流行ノ兆アリテ宮內大臣ニ於テ有病地ト指定シタル土地ノ區域ヲ謂フ

第一類　「ペスト」、虎列刺、赤痢(疫痢ヲ含ム)、腸窒扶私、痘瘡(假痘ヲ含ム)、發疹窒扶私及猩紅熱

第二類　實布垤利亞(格魯布ヲ含ム)、麻疹、流行性感冒及流行性腦脊髓膜炎

第三類　肺結核、癩、丹毒、「トラホーム」、膿漏性結膜炎及傳染性皮膚病

前項ニ掲ケタル傳染病ノ外本令ニ依リ豫防方法ノ施行ヲ必要ト認メタル傳染病アルトキハ宮內大臣之ヲ指定ス

第二條　第一類ノ傳染病ニ付キ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ一定ノ期間宮中ニ參入スルコトヲ得ス

一　傳染病ニ罹リタル者
二　患者ニ接シ又ハ之ト同居シタル者
三　宮中參入中又ハ退出後傳染病ニ罹リタル者ト同一ノ場所ニ在リタル者
四　病毒ニ汚染シ又ハ汚染ノ疑アル物件ニ接シタル者
五　患者ノ在ル家其ノ他病毒ニ汚染シ又ハ汚染ノ疑アル家ニ立寄リタル者
六　傳染病豫防法ニ依リ隔離ノ處分ヲ受ケタル者

第三條　第二類ノ傳染病ニ罹リタル者ハ全治ノ後ニ非サレハ宮中ニ參入スルコトヲ得ス

第四條　流行性腦脊髓膜炎ニ付キ第二條第二號乃至第四號ノ一ニ該當スル者ハ一定ノ期間宮中ニ參入スルコトヲ得ス

第五條　左ニ掲ケタル者ハ宮中ニ參入スルコトヲ得ル場合ニ在リテモ仍一定ノ期間側近ニ奉仕シ又ハ臨時進謁スルコトヲ得ス

一　第一類ノ傳染病ニ付テハ「ペスト」ヲ除キ第二條第一號乃至第五號ノ一ニ該當シ「ペスト」及盧列刺ニ付テハ同條第六號ニ該當スル者但シ腸窒扶私ニ付テハ同條第五號ニ該當スル者ヲ除ク
二　痲疹ニ付テハ第二條第一號乃至第五號ノ一ニ該當シ實布垤利亞及流行性腦脊髓膜炎ニ付テハ同條第二號乃至第四號ノ一ニ該當シ流行性感冒ニ付テハ同條第一號ニ該當スル者但シ曾テ痲疹ニ罹リタルコトアル者ニ付テハ同條第二號乃至第五號ノ一ニ該當スル者ヲ除ク
三　有病地ヲ發シ又ハ之ニ立寄リタル者

第六條　第三類ノ傳染病ニ罹リタル者ハ全治ノ後ニ非サレハ側近ニ奉仕シ又ハ臨時進謁スルコトヲ得ス

第七條　宮中ニ參入シ側近ニ奉仕シ又ハ臨時進謁スルコトヲ得サル期間及其ノ起算ノ日ハ宮内大臣之ヲ定ム

第八條　第二條乃至第六條ノ規定ハ勅旨ニ由リ宮中ニ參入シ側近ニ奉仕シ又ハ臨時進謁スル者ニ之ヲ適用セス

第九條　一定ノ期間ヲ經過シ又ハ疾病ノ全治シタル後若ハ前條ノ規定ニ依リ宮中ニ參入シ側近ニ奉仕シ又ハ臨時進謁スル者ハ豫メ沐浴更衣シ病毒汚染ノ疑アル携帶品アルトキハ之ヲ消毒スヘシ但シ職服ノ著用ヲ必要トシ其ノ他更衣スルコト能ハサル事由アル場合ニ限リ消毒ヲ以テ更衣ニ代フルコトヲ得
前項ノ場合ニ於テ宮内大臣ハ必要ト認メタルトキハ健康診斷又ハ携帶品ノ消毒ヲ行ハシムルコトヲ得

第十條　前條ノ規定ハ左ノ場合ニ之ヲ準用ス
一　第五條第三號ニ該當スル者及「ペスト」ニ付キ隔離ノ處分ヲ解除セラレタル者宮

中ニ參入スルトキ

二　腸窒扶私、實布垤利亞及流行性腦脊髓膜炎ニ付テハ第二條第五號ニ該當シ流行性感冒ニ付テハ同條第二號ニ該當スル者及曾テ痲疹ニ罹リタルコトアル者ニシテ同條第二號乃至第五號ノ一ニ該當スル者側近ニ奉仕シ又ハ臨時進謁スルトキ

第十一條　宮中參入中又ハ退出後第一類若ハ第二類ノ傳染病ニ罹リタル者アルトキハ宮內大臣ハ病毒ニ汚染シ又ハ汚染ノ疑アル場所及物件ノ消毒ヲ行ハシムヘシ

第十二條　傳染病流行ノ狀況ニ依リ宮內大臣ハ宮中ノ場所ヲ限リ參入ヲ制限又ハ禁止スルコトヲ得

第十三條　有病地又ハ交通遮斷區域內ヲ發シ若ハ經過シタル物件ハ消毒ヲ行ヒタル後ニ非サレハ之ヲ宮中ニ搬入スルコトヲ得ス

宮中ニ搬入シタル物件ニシテ有病地又ハ交通遮斷區域內ヲ發シ若ハ經過シタル疑アルトキハ宮內大臣ハ其ノ包裝ヲ解カシメ又ハ消毒セシムヘシ

前二項ノ規定ハ有病地又ハ交通遮斷區域內ヲ發シ若ハ經過シ又ハ其ノ疑アル物件ト混同シタル物件ニ之ヲ準用ス

第十四條　傳染病流行ノ狀況ニ依リ宮內大臣ハ左ノ各號ノ全部又ハ一部ヲ施行スルコトヲ得

一　病毒傳播ノ虞アル物件ノ搬入ヲ制限若ハ停止シ又ハ既ニ受入レタル物件ヲ廢棄スルコト

二　病毒傳播ノ虞アル水ノ使用ヲ制限又ハ停止スルコト

三　清潔方法ヲ行フコト

四　鼠族ノ驅除ヲ行フコト

第十五條　傳染病流行ノ狀況ニ依リ宮內大臣ハ勅裁ヲ經テ宮中ニ臨時傳染病豫防委員ヲ置キ其ノ職制ヲ定ムルコトヲ得

第十六條　宮內大臣ニ於テ傳染病又ハ有病地ヲ指定スルトキ及有病地ヲ解除スルトキハ之ヲ告示ス

第十七條　第二條乃至第六條第九條第一項第十條第十三條第一項第三項ノ規定其ノ他本令ノ施行ニ關スル宮內大臣ノ命令ニ違反シタル者アルトキハ勅旨ニ由リ又ハ宮內大臣ノ命令ヲ以テ宮中ノ參入ヲ停止又ハ禁止スルコトアルヘシ

第十八條　本令ノ規定ハ東宮御所其ノ他東京府下所在ノ宮殿及行幸啓ノ場所ニ之ヲ準用ス

宮內大臣ハ必要ト認メタルトキハ本令ノ全部又ハ一部ヲ東京府外所在ノ宮殿及皇族ノ殿邸竝旅館ニ準用スルコトヲ得

前二項ノ規定ニ依リ本令ノ全部又ハ一部ヲ準用スル場合ニ於テハ宮內大臣ハ疫咳、

水痘、風疹又ハ流行性耳下腺炎ニ罹リタル者ニ付テモ一定ノ期間其ノ參入ヲ止ムルコトヲ得實布垤利亞ニ付キ第二條第一號乃至第四號ノ一ニ該當スル者亦同シ

第八條及第九條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十九條　本令ノ施行ニ付キ必要アルトキハ宮內大臣ハ皇宮警察官ノ職務ノ全部又ハ一部ヲ地方警察官ニ委託シテ之ヲ行ハシムルコトヲ得

第二十條　本令ノ施行ニ付キ國務大臣ノ職務ニ關連スルモノアルトキハ宮內大臣ハ主任ノ國務大臣ト協定ヲ經ヘシ

附則

本令ハ明治四十一年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

○宮內傳染病豫防令施行規則

明治四十一年十月二十二日
宮內省令第八號

宮內傳染病豫防令施行規則左ノ通定ム

宮內傳染病豫防令施行規則

第一條　宮內傳染病豫防令第二條第四條及第五條ノ規定ニ依リ宮中ニ參入シ側近ニ奉仕シ又ハ臨時進謁スルコトヲ得サル期間ハ左表ニ依ル

傳染病ノ種類	期間	宮中ニ參入シ側近ニ奉仕シ又ハ臨時進謁スルコトヲ得サル者ノ種類						
	別	第一號 傳染病ニ罹リタル者	第二號 患者ニ接シ又ハ之ト同居シタル者	第三號 宮中參入中又ハ退出後傳染病ニ罹リタル者ト同一ノ場所ニ在リタル者	第四號 病毒ニ汚染シ又ハ汚染ノ疑アル物件ニ接シタル者	第五號 患者ノ在ル家其ノ他病毒ニ汚染シ又ハ汚染ノ疑アル家ニ立寄リタル者	第六號 隔離ノ處分ヲ受ケタル者	第七號 有病地ヲ發シ又ハ之ニ立寄リタル者
ペスト	一	十日	十日	十日	十日	十日		
	二						十日	十日
虎列刺	一	十四日	五日	五日	五日	五日	五日	七日
	二	七日	五日	五日	五日	五日	五日	七日
赤痢	一	十四日	五日	五日	五日	五日	五日	七日
	二	七日	五日	五日	五日	五日	五日	七日
腸窒扶私	一	十四日	七日	七日	七日	七日	七日	七日
	二	七日	七日	七日	七日	七日	七日	十四日
痘瘡	一	十四日	七日	七日	七日	七日	七日	
	二	七日	七日	七日	七日	十四日		十四日

發疹窒扶私		猩紅熱		實布垤利亞		痲疹		流行性感冒		流行性腦脊髓膜炎	
一	二	一	二	一	二	一	二	一	二	一	二
十四日	七日	十四日	七日				七日		七日		
十四日	七日	三日	四日		七日		十四日			五日	二日
十四日	七日	三日	四日		七日		十四日			五日	二日
十四日	七日	三日	四日		七日		十四日			五日	二日
七日	七日		七日				十四日				
	七日		七日								

備考　一欄ハ宮中ニ參入スルコトヲ得サル期間ヲ示シ二欄ハ側近ニ奉仕シ又ハ臨時進謁スルコトヲ得サル期間ヲ示ス

第二條　宮中ニ參入スルコトヲ得サル期間ハ前條ノ表中第一號ニ該當スル者ニ在リテハ全治ノ日ノ翌日ヨリ第二號ニ該當スル者ノ內患者ニ接シタル者ニ在リテハ其ノ之ニ接シタル日ノ翌日ヨリ患者ト同居シタル者ニ在リテハ患者ノ全治又ハ死亡シタル場合ニハ其ノ全治又ハ死亡ノ日ノ翌日ヨリ患者又ハ之ト同居シタル者他ニ移轉シタル場合ニハ其ノ移轉ノ日ノ翌日ヨリ第三號ニ該當スル者ニ在リテハ患者ト同一ノ場所ニ在リタル最終ノ日ノ翌日ヨリ第四號ニ該當スル者ニ在リテハ物件ニ接シタル日ノ翌日ヨリ第五號ニ該當スル者ニ在リテハ家ニ立寄リタル日ノ翌日ヨリ第六號ニ該當スル者ニ在リテハ隔離ノ處分ヲ解除セラレタル日ヨリ之ヲ起算ス

側近ニ奉仕シ又ハ臨時進謁スルコトヲ得サル期間ハ宮中ニ參入スルコトヲ得サル期間ノ定アルモノニ付テハ其ノ期間經過ノ日ヨリ之ヲ起算シ其ノ定ナキモノニ付テハ前項ノ規定ヲ準用ス但シ前條ノ表中第七號ニ該當スル者ニ在リテハ有病地發程ノ日又ハ之ニ立寄リタル最終ノ日ノ翌日ヨリ之ヲ起算ス

第三條　現ニ患者ノ在ル室內ニ入リタル者ハ患者ニ接シタル者ト看做シ虎列刺赤痢及腸窒扶私ニ付テハ患者ト住家ヲ異ニスルモ厠圊又ハ飲料ニ係ル井水ヲ共用シタル者ハ仍之ヲ患者ト同居シタル者ト看做ス

第四條　宮內傳染病豫防令第九條ノ規定ニ依リ更衣ヲ必要トスルトキハ病毒汚染ノ疑ナキ衣服ヲ著用スヘシ

前項ノ衣服中ニハ帽手套襪衣足袋靴等身體ニ附著セシムルモノハ總テ之ヲ包含ス

第五條　宮內傳染病豫防令第十二條ノ規定ニ依リ宮中ノ場所ヲ限リ參入ヲ制限又ハ禁

止スルトキハ其ノ場所ノ區域及制限又ハ禁止ノ範圍ハ之ヲ便宜ノ場所ニ掲示ス

第六條　宮中參入者ノ健康診斷及宮中ニ搬入スル物件ノ消毒又ハ包裝ノ解除ハ特ニ設ケタル健康診斷所及消毒所ニ於テ之ヲ行フ

第七條　第一類ノ傳染病流行ノ狀況ニ依リ必要ト認メタルトキハ左ノ各號ノ全部又ハ一部ヲ施行ス

一　出入ノ廓門ヲ限定シ他ハ之ヲ閉鎖スルコト

二　物件受入ノ場所ヲ限定シ他ノ場所ニ於テ其ノ受入ヲ許ササルコト

三　宮中及其ノ附近ノ區域ヲ定メ特ニ嚴重ニ警戒ヲ行フコト

四　警戒區域内ノ用務ハ成ルヘク電話ヲ以テ處辨スルコト

五　天機伺御機嫌伺御禮等ノ受付所ハ之ヲ警戒區域外ニ假設スルコト

六　新ニ隔離舍ヲ設クルコト

七　公務其ノ他止ムコトヲ得サル事由ニ因リ出入スル者ヲ除クノ外一時門鑑ヲ引上クルコト

第八條　宮中參入者又ハ宮中常住者中自ラ傳染病ニ罹リタル疑アルコトヲ覺知シタルトキハ便宜皇宮警察官ニ報告スヘシ其ノ傳染病ニ罹リタル疑アル者ヲ發見シタルトキ亦同シ

皇宮警察官前項ノ報告ヲ受ケタルトキハ當該吏員ト協議ヲ遂ケ患者ニ急應ノ手當ヲ施シ且自宅病院又ハ隔離舍ニ送致ノ手續ヲ爲スヘシ

前項ノ規定ハ皇宮警察官ニ於テ傳染病ニ罹リタル疑アル者ヲ發見シタル場合ニ之ヲ準用ス

第九條　前條第二項又ハ第三項ノ場合ニ於テ屆出ヲ要スル傳染病ト確定シタルトキハ皇宮警視長ハ其ノ旨ヲ地方警察官廳ニ通報スヘシ

第十條　宮内傳染病豫防令第十四條ノ規定ニ依リ病毒傳播ノ虞アル物件ノ搬入ヲ制限又ハ停止スルトキハ其ノ物件ノ種類ヲ定メ之ヲ告示ス其ノ制限又ハ停止ヲ解除スル場合亦同シ

第十一條　宮内傳染病豫防令第十四條ノ規定ニ依リ病毒傳播ノ虞アル水ノ使用ヲ制限又ハ停止スルトキハ其ノ制限又ハ停止ノ範圍ハ便宜ノ場所ニ之ヲ掲示ス

第十二條　宮中ニ於テ捕鼠ヲ爲シ又ハ斃鼠ヲ發見シタルトキハ之ヲ皇宮警察官ニ引渡スヘシ但シ便宜之ヲ地方警察官ニ引渡スコトヲ妨ケス

第十三條　左ニ掲ケタル事項其ノ他本令ノ施行ニ關シ必要ナル事項ハ別ニ之ヲ定ム

一　清潔方法

二　消毒方法

三　宮中與向奉仕者及宮中常住者ニ關スル取締方法及注意事項

四　商工者職工車夫馬丁人足等ニ關スル取締方法及注意事項

五　宮中ニ患者ヲ發生シタル場合ニ於ケル取締方法及注意事項
六　飲食物及飲食器ニ關スル取締方法及注意事項
七　車馬ニ關スル取締方法及注意事項
八　物件受入ニ關スル取締方法及注意事項
九　宮中參入者昇降所ノ取締方法及注意事項

第十四條　宮內傳染病豫防令第十八條第二項ノ規定ニ依リ同令ノ全部又ハ一部ヲ準用スル場合ニ於テハ其ノ施行ニ關シ本令ノ全部又ハ一部ヲ準用ス
前項ノ場合ニ於テハ宮殿殿邸又ハ旅館及準用スヘキ事項ハ告示又ハ其ノ他ノ方法ニ依リ之ヲ知悉セシム

第十五條　宮內傳染病豫防令第十八條第三項ノ規定ハ十二年未滿ノ皇族ノ在ル宮殿殿邸及旅館ニ限リ之ヲ適用ス
前條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十六條　宮內傳染病豫防令第十八條第三項ノ規定ニ依リ參入スルコトヲ得サル期間ハ疫咳水痘風疹又ハ流行性耳下腺炎ニ付テハ全治ソ日ノ翌日ヨリ起算シ五日トシ實布垤利亞ニ付テハ宮內傳染病豫防令第二條第一號ニ該當スル者ハ三日第二號乃至第四號ノ一ニ該當スル者ハ七日トス
第二條ノ規定ハ實布垤利亞ニ付キ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

附　則

本令ハ明治四十一年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

宮內官制

○宮內省官制

明治四十年十一月一日　皇室令第三號　改正　四二年第五號

朕宮內省官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

宮內省官制

第一條　宮內大臣ハ親任トス皇室一切ノ事務ニ付キ輔弼ノ責ニ任ス

第二條　宮內大臣ハ所部ノ職員ヲ統督シ兼テ華族ヲ監督ス

第三條　宮內大臣ハ皇室令ノ制定改正又ハ廢止ヲ要スルモノアルトキハ案ヲ具ヘテ上奏スヘシ其ノ國務大臣ノ職務ニ關連スルモノニ付テハ內閣總理大臣又ハ內閣總理大臣及主任ノ國務大臣ト俱ニ上奏スヘシ

第四條　宮內大臣ハ皇室令ノ施行其ノ他主管ノ事務ニ關シ必要ノ規程ヲ定ムルコトヲ得其ノ國務大臣ノ職務ニ關連スルモノニ付テハ內閣總理大臣又ハ內閣總理大臣及主

任ノ國務大臣ト協定ヲ經ヘシ

第五條　宮內大臣ハ主管ノ事務ニ關シ省令ヲ發スルコトヲ得

第六條　宮內大臣ハ主管ノ事務ニ關シ警視總監及地方長官ニ指令又ハ訓令ヲ下スコトヲ得

第七條　宮內大臣ハ勅旨ヲ奉シ救恤褒賞及贈賜ノ事ヲ施行ス

第八條　宮內大臣ハ宮內奏任官及勅任待遇宮內職員ノ進退ハ之ヲ上奏シ宮內判任官及判任待遇等外宮內職員ノ進退ハ之ヲ專行ス

第九條　宮內大臣ハ宮內職員及華族ノ叙位ヲ上奏シ其ノ叙勳ハ內閣總理大臣ヲ經テ上奏ス

第十條　宮內大臣ハ主管ノ事務ニ關シ勅裁ヲ經テ顧問委員又ハ評議員ヲ置クコトヲ得

第十一條　宮內大臣ハ事故アルトキハ臨時其ノ職務ヲ次官ニ代理セシムルコトヲ得但シ皇室典範又ハ皇室令ニ依リ公告ヲ爲シ公式令ニ依リ副署ヲ爲シ省令ヲ發シ及重要ノ省務ヲ奏スルハ此ノ限ニ在ラス

第十二條　宮內大臣ハ次官及所管各部局長官ニ其ノ職務ノ一部ヲ委任スルコトヲ得

第十三條　宮內大臣ハ會計ノ審査ニ干涉スルコトヲ得ス

第十四條　宮內省ニ大臣官房ヲ置ク

大臣官房ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル但シ便宜ニ從ヒ大臣官房ノ事務ヲ所管各部局ニ於テ處理セシムルコトヲ得

一　機密ニ屬スル事項

二　職員ノ進退身分ニ關スル事項

三　大臣ノ官印及省印ノ管守ニ關スル事項

四　行幸啓ニ關スル事項

五　皇族ニ關スル事項

六　救恤褒賞及贈賜ニ關スル事項

七　進獻ニ關スル事項

八　法規其ノ他重要ナル公文ノ起草及審査ニ關スル事項

九　皇族會議ニ關スル事項

十　帝室經濟會議ニ關スル事項

十一　公文書類及成案文書ノ接受發送ニ關スル事項

十二　統計報告ノ調製ニ關スル事項

十三　恩給扶助料等ニ關スル事項

十四　所管各部局ノ主管ニ屬セサル財產ノ管理ニ關スル事項

十五　前各號ノ外所管各部局ノ主管ニ屬セサル事項

第十五條　宮內省ニ左ノ職員ヲ置ク

次官
秘書官
書記官
翻譯官
屬

第十六條　次官ハ一人勅任トス大臣ノ輔ケ省務ヲ整理ス

第十七條　秘書官專任二人奏任トス大臣ニ專屬シテ第十四條第二項第一號乃至第三號ノ事務ヲ分掌ス但シ省務ノ現況ニ依リ臨時大臣ノ命ヲ承ケ他ノ事務ヲ助ク

第十八條　書記官ハ專任四人奏任トス第十四條第二項第四號乃至第十五號ノ事務ヲ分掌ス但シ省務ノ現況ニ依リ臨時大臣ノ命ヲ承ケ他ノ事務ヲ助ク

第十九條　翻譯官ハ專任三人奏任トス翻譯及通譯ノ事ヲ分掌ス

第二十條　屬ハ二百七十人判任トス大臣官房各職及各寮ニ分屬シテ庶務ニ從事ス

第二十一條　宮内省ニ宮中顧問官二十五人ヲ置ク勅任名譽官トス大臣ノ諮詢ニ應シ又ハ臨時大臣ノ命ヲ承ケ省務ヲ輔ク

第二十二條　宮内省ニ左ノ各職及各寮ヲ置キ省務ヲ分掌セシム

侍從職
式部職

内藏寮
圖書寮
爵位寮
侍醫寮
大膳寮
諸陵寮
主殿寮
内匠寮
内苑寮
主馬寮
主獵寮
調度寮

第二十三條　侍從職ニ於テハ側近ノ事ヲ掌ル

第二十四條　侍從職ニ左ノ職員ヲ置ク

侍從長
侍從職幹事
侍從

次侍從

第二十五條　侍從長ハ親任又ハ勅任トス常侍奉仕シ侍從職ヲ統轄シ便宜事ヲ奏シ旨ヲ宣ス

第二十六條　侍從職幹事ハ一人勅任トス侍從長ヲ輔ケ侍從長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

第二十七條　侍從ハ十六人奏任トス側近ノ事ヲ分掌ス

第二十八條　次侍從ハ奏任トス侍從ノ定員内ヲ以テ之ヲ置ク侍從ヲ助ク

第二十九條　式部職ニ於テハ典式及交際ノ事ヲ掌ル

第三十條　式部職ニ左ノ職員ヲ置ク

式部長官

式部次官

式部官

舍人

第三十一條　式部長官ハ親任又ハ勅任トス典式ニ奉仕シ式部職ヲ統轄ス

第三十二條　式部次官ハ一人勅任トス式部長官ヲ輔ケ式部長官事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

第三十三條　式部官ハ二十八人内八人ヲ勅任二十人ヲ奏任トシ名譽官ト爲スコトヲ得典式及接待ノ事ヲ分掌ス

第三十三條ノ二　舍人ハ八十人判任トシ名譽官トス他ノ宮内判任官ヨリ兼任ス典式ニ關スル雜務ニ從事ス

第三十四條　式部職ニ掌典部及樂部ヲ置ク

掌典部ニ於テハ祭事ヲ掌リ樂部ニ於テハ樂事ヲ掌ル

第三十五條　掌典部ニ左ノ職員ヲ置ク

掌典長

掌典次長

掌典

内掌典

掌典補

掌典長ハ一人勅任トス部務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

掌典次長ハ一人勅任又ハ奏任トス掌典長ヲ助ケ掌典長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

掌典ハ八人奏任トシ名譽官ト爲スコトヲ得祭事ヲ分掌ス

内掌典ハ六人判任トス内一人ヲ奏任ト爲スコトヲ得掌典補ハ八人判任トス共ニ祭典ニ從事ス

第三十六條　樂部ニ左ノ職員ヲ置ク

部長

樂長

樂師

部長ハ奏任トス部務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

樂長ハ二人奏任トス樂事ヲ分掌ス

樂師ハ五十五人判任トス奏樂ニ從事ス

第三十七條　內藏寮ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　御資ノ保管運用及出納ニ關スル事項

二　豫算決算ニ關スル事項

三　金錢ノ保管出納ニ關スル事項

四　諸計算書ノ下檢査ニ關スル事項

五　特別會計ニ屬スル資金又ハ基金ノ保管出納ニ關スル事項

第三十八條　圖書寮ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　皇統譜ニ關スル事項

二　皇室典範ノ正本尙藏ニ關スル事項

三　詔書勅書及皇室令ノ正本尙藏ニ關スル事項

四　世傳御料臺帳ニ關スル事項

五　天皇及皇族實錄ノ編修ニ關スル事項

六　圖書ノ保管出納ニ關スル事項

七　公文書類ノ編纂及保管ニ關スル事項

第三十九條　爵位寮ニ於テハ爵位華族及有位者ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十條　侍醫寮ニ於テハ診候進藥調劑及衛生ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十一條　大膳寮ニ於テハ供御及饗宴ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十二條　諸陵寮ニ於テハ陵墓ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十三條　主殿寮ニ於テハ宮殿廳舍及其ノ附屬建物ノ管守並警察ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十四條　內匠寮ニ於テハ建築及土木ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十五條　內苑寮ニ於テハ庭苑及園藝ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十六條　主馬寮ニ於テハ馬匹車輛及牧場ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十七條　主獵寮ニ於テハ狩獵及獵場ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十八條　調度寮ニ於テハ物品ノ購入整備及雜役ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十九條　各寮ニ左ノ職員ヲ置ク

頭

主事

第五十條　頭ハ各一人勅任トス寮務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

第五十一條　主事ハ各一人內藏寮主事及主殿寮主事ハ各二人侍醫寮主事ハ三人共ニ奏任トス寮務ヲ掌ル

侍醫寮主事ハ侍醫ヲシテ之ヲ兼ネシム

第五十二條　圖書寮ニ編修官專任三人ヲ置ク奏任トス編修ノ事ヲ分掌ス

第五十三條　侍醫寮ニ左ノ職員ヲ置ク

侍醫

侍醫補

醫員

藥劑師長

藥劑師

藥劑員

侍醫ハ二十五人勅任又ハ奏任トス診候進藥及衛生ノ事ヲ分掌ス

侍醫補ハ奏任トス侍醫ノ定員內ヲ以テ之ヲ置ク侍醫ヲ助ク

醫員ハ十人判任トス醫務ニ從事ス

藥劑師長ハ一人奏任トス藥品ノ製造試驗及調劑ノ事ヲ掌ル

藥劑師ハ三人奏任トス藥劑師長ヲ助ク

藥師員ハ八人判任トス藥品ノ製造試驗及調劑ニ從事ス

第五十四條　大膳寮ニ左ノ職員ヲ置ク

主膳長

主膳

主膳長ハ一人奏任トス膳羞ノ事ヲ掌ル

主膳ハ專任三十人判任トス膳羞ニ從事ス

第五十四條ノ二　諸陵寮ニ左ノ職員ヲ置ク

陵墓守長

陵墓名譽守部

陵墓守長ハ三十五人判任トス陵墓管守ノ事ヲ分掌ス

陵墓名譽守部ハ二十人判任トシ名譽官トス陵墓ノ管守ニ從事ス

第五十四條ノ三　主殿寮ニ內舍人十七人ヲ置ク判任トス宮殿ノ雜務ニ從事ス

第五十五條　主殿寮ニ警察部ヲ置ク

警察部ニ於テハ宮殿及廳舍ノ警察ヲ掌ル

第五十六條　警察部ニ左ノ職員ヲ置ク

皇宮警視長

皇宮警視
皇宮警部
皇宮警視長ハ一人奏任トス部務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス
皇宮警視ハ一人奏任トス皇宮警視長ヲ助ク
皇宮警部ハ專任二十五人判任トス警察ニ從事ス

第五十七條　內匠寮及內苑寮ニ技師及技手ヲ置ク
內匠寮技師ハ六人內苑寮技師ハ四人共ニ奏任トス各主務ニ屬スル技術ノ事ヲ分掌ス
內匠寮技師一人ハ之ヲ勅任ト爲スコトヲ得
內匠寮技手ハ五十五人內苑寮技手ハ十二人共ニ判任トス技術ニ從事ス

第五十八條　主馬寮ニ左ノ職員ヲ置ク
車馬監
調馬師
馬醫師
馬醫
技師
技手

車馬監ハ一人奏任トス車馬裝具ノ管守及馬匹ノ飼養調習ニ關スル事務ヲ掌ル
調馬師ハ三人奏任トス馬匹調習ノ事ヲ分掌ス
馬醫師ハ二人奏任トス馬匹醫療ノ事ヲ分掌ス
馬醫ハ四人判任トス馬匹ノ醫療ニ從事ス
技師ハ六人奏任トス內一人ヲ勅任ト爲スコトヲ得牧場ニ關スル技術ノ事ヲ分掌ス
技手ハ百十二人判任トス牧場及車馬ニ關スル技術ニ從事ス

第五十九條　主獵寮ニ左ノ職員ヲ置ク
主獵官
獵場監守長
獵場名譽監守
鷹師
主獵官ハ十五人內二人ヲ勅任十三人ヲ奏任トシ共ニ名譽官トス狩獵ノ事ヲ掌ル
獵場監守長ハ九人判任トス獵場管守ノ事ヲ分掌ス
獵場名譽監守ハ十五人判任トシ名譽官トス獵場ノ管守ニ從事ス
鷹師ハ一人判任トス鷹隼ノ調習ニ從事ス

第六十條　宮內大臣ハ大臣官房及所管各部局ノ分課ヲ廢置シ及其ノ處務規程ヲ定ムルコトヲ得

各分課ニ課長ヲ置ク大臣官房分課ノ課長ニハ秘書官又ハ書記官ヲ以テ之ニ充テ所管各部局分課ノ課長ニハ奏任官又ハ判任官ヲ以テ之ニ充ツ

第六十一條　宮内大臣ハ須要ニ從ヒ勅任待遇奏任待遇判任待遇及等外ノ職ヲ置キ其ノ職制ヲ定ムルコトヲ得但シ奏任待遇以上ニ係ル者ノ職制ハ勅裁ヲ經ヘシ

附則

第六十二條　本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十二年宮内省達第十號明治二十三年宮内省達第十八號明治三十七年宮内省達甲第三號及明治三十九年宮内省達甲第十四號ハ之ヲ廢止ス

第六十三條　本令施行ノ際別ニ官記ヲ交付セス内藏主事ハ内藏寮主事ニ爵位局長ハ爵位頭ニ爵位局主事ハ爵位寮主事ニ侍醫局長ハ侍醫頭ニ侍醫局主事ハ侍醫寮主事ニ大膳大夫ハ大膳頭ニ大膳亮ハ大膳寮主事ニ主殿助ハ主殿寮主事ニ内匠助ハ内匠寮主事ニ内苑局長ハ内苑頭ニ内苑局技師ハ内苑寮技師ニ内苑局技手ハ内苑寮技手ニ主馬助ハ主馬寮主事ニ主獵局長ハ主獵頭ニ主獵局主事ハ主獵寮主事ニ調度局長ハ調度頭ニ調度局主事ハ調度寮主事ニ各職寮及局ノ屬ハ宮内屬ニ任セラレタルモノトス

本令施行ノ際宮中顧問官タル者ハ別ニ官記ヲ交付セス本令ノ宮中顧問官ニ任セラレタルモノトス

明治四十年十一月一日
宮内省令第八號

諸陵寮主殿寮出張所職制勅裁ヲ經テ左ノ通定ム

諸陵寮主殿寮出張所職制

第一條　諸陵寮及主殿寮ノ出張所ヲ京都ニ置ク

第二條　各出張所ニ所長ヲ置ク

所長ハ各本寮所屬ノ高等官又ハ判任官ノ中ヨリ之ヲ命ス

第三條　各出張所ニ本寮所屬ノ宮内屬ヲ在勤セシメ主殿寮出張所ニ皇宮警部皇宮警手及仕人ヲ在勤セシム其ノ配置ハ各本寮頭之ヲ定ム

第四條　主殿寮出張所ニ殿掌殿部及殿丁ヲ置ク

殿掌ハ五人奏任待遇殿部ハ十三人判任待遇殿丁ハ三十人等外トス

第五條　殿掌ノ俸給ハ年俸殿部及殿丁ノ俸給ハ月俸トシ左ノ定限ニ依ル

殿掌　自百二十圓至百八十圓
殿部　自十圓至十七圓
殿丁　自五圓至十圓

第六條　宮内官官等俸給令第六條第十條乃至第十四條第十七條乃至第十九條明治四十年宮内省令第六號第十六條第十七條ノ規定ハ第四條ノ職員ニ之ヲ準用ス

附　則

本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス
明治十六年太政官達第四十一號ハ之ヲ廢止ス

明治四十年十一月一日
宮内省令第九號

大臣官房分課規程左ノ通定ム

大臣官房分課規程

第一條　大臣官房ニ總務課調査課秘書課及文書課ヲ置ク

第二條　總務課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　行幸啓ニ關スル事項

二　皇族ニ關スル事項

三　救恤褒賞及贈賜ニ關スル事項

四　進獻ニ關スル事項

五　所管各部局ノ主管ニ屬セサル財産ノ管理ニ關スル事項

六　前各號ノ外他課ニ屬セサル事項

第三條　調査課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　法規其ノ他重要ナル公文ノ起草及審査ニ關スル事項

二　皇族會議ニ關スル事項

三　帝室經濟會議ニ關スル事項

四　恩給扶助料等ニ關スル事項

第四條　秘書課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　機密ニ屬スル事項

二　職員ノ進退身分ニ關スル事項

三　大臣ノ官印及省印ノ管守ニ關スル事項

第五條　文書課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　公文書類及成案文書ノ接受發送ニ關スル事項

二　文書ノ翻譯ニ關スル事項

三　統計報告ノ調製ニ關スル事項

四　大臣官房ノ書類整理ニ關スル事項

附　則

本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

○内大臣府官制

明治四十年十一月一日
皇室令第四號

朕内大臣府官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

内大臣府官制

第一條　内大臣府ニ於テハ御璽國璽ヲ尚藏シ及詔書勅書其ノ他内廷ノ文書ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條　内大臣ハ親任トス常侍輔弼シ内大臣府ヲ統轄ス

第三條　内大臣ハ所部職員ノ叙位叙勳其ノ他進退ニ關スル事項ニ付テハ之ヲ宮内大臣ニ移牒スヘシ

第四條　内大臣府ニ左ノ職員ヲ置ク

秘書官長

秘書官

屬

第五條　秘書官長ハ一人勅任トス文書ノ事ヲ掌理ス

第六條　秘書官ハ專任三人奏任トス文書ノ事及庶務ヲ分掌ス

第七條　屬ハ六人判任トス庶務ニ從事ス

附　則

本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治十八年太政官達第六十八號及明治二十三年宮内省達第二十三號ハ之ヲ廢止ス

○皇后宮職官制

明治四十年十一月一日　皇室令第五號

朕皇后宮職官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

皇后宮職官制

第一條　皇后宮職ハ宮内大臣ノ管理ニ屬シ皇后宮ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條　皇后宮職ニ左ノ職員ヲ置ク

大夫

主事

屬

第三條　大夫ハ一人勅任トス宮事ヲ掌理シ所部職員ヲ監督シ便宜事ヲ啓シ旨ヲ宣ス

第四條　主事ハ二人奏任トス庶務ヲ分掌ス

第五條　屬ハ九人判任トス庶務ニ從事ス

第六條　皇后宮職ニ女官ヲ置ク

女官ノ官制ハ別ニ之ヲ定ム

附　則

本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

○東宮職官制

明治四十年十一月一日 皇室令第六號 改正 四二年第六號

朕東宮職官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

東宮職官制

第一條 東宮職ハ宮内大臣ノ管理ニ屬シ東宮ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條 東宮職ニ左ノ職員ヲ置ク

大夫
侍從長
侍從
侍講
主事
屬
内舍人

第三條 大夫ハ一人勅任トス宮事ヲ掌理シ所部職員ヲ監督シ便宜事ヲ啓シ旨ヲ宣ス

第四條 侍從長ハ一人勅任トス常侍奉仕シ大夫事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

第五條 侍從ハ五人奏任トス侍側ノ事ヲ分掌ス

第六條 侍講ハ三人勅任又ハ奏任トス進講ノ事ヲ分掌ス

第七條 主事ハ三人奏任トス庶務ヲ分掌ス

第八條 屬ハ三十人判任トス庶務ニ從事ス

第八條ノ二 内舍人ハ六人判任トス殿中ノ雜務ニ從事ス

第九條 東宮職ニ女官ヲ置ク

女官ノ官制ハ別ニ之ヲ定ム

附則

本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十二年宮内省達第二十一號ハ之ヲ廢止ス

○皇族附職員官制

明治四十年十一月一日 皇室令第七號

朕皇族附職員官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

皇族附職員官制

第一條 宮號ヲ賜ハリタル皇族ニハ左ノ職員ヲ附屬セシム

家令
家扶

家從

第二條　家令ハ各一人奏任トス所屬ノ皇族ニ關スル事務ヲ掌理シ家扶家從ヲ監督ス

第三條　家扶ハ各專任一人判任トス家令ヲ助ク

第四條　家從ハ各專任六人判任トス庶務ニ從事ス

第五條　宮號ヲ賜ハリタル親王ニハ別當ヲ附屬セシムルコトヲ得

別當ハ各一人勅任トス所屬親王ヲ輔翼シ家令以下ノ職員ヲ監督ス

第六條　皇族附職員ハ宮内大臣之ヲ統督ス

附則

本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十三年宮内省達第一號ハ之ヲ廢止ス

○帝室會計審査局官制

明治四十年十一月一日　皇室令第七號

朕帝室會計審査局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝室會計審査局官制

第一條　帝室會計審査局ハ宮内大臣ノ管理ニ屬シ會計審査ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條　帝室會計審査局ニ左ノ職員ヲ置ク

長官

主事

審査官

審査官補

屬

第三條　長官ハ勅任トス局務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

第四條　主事ハ一人奏任トシ審査官ヲシテ之ヲ兼ネシム庶務ヲ掌ル

第五條　審査官ハ六人奏任トス會計審査ノ事ヲ分掌ス

第六條　審査官補ハ奏任トス審査官ノ定員内ヲ以テ之ヲ置ク審査官ヲ助ク

第七條　屬ハ十五人判任トス庶務ニ從事ス

第八條　長官ハ主管ノ部局長官ニ會計ノ審査上必要ナル書類ノ提出ヲ求メ又ハ樣式ヲ示シテ必要ノ報告ヲ求ムルコトヲ得

第九條　長官ハ會計上不明瞭又ハ不合規ノ件アルコトヲ認メタルトキハ主管ノ部局長官ニ推問書ヲ發シ辯明ヲ求ムルコトヲ得

第十條　主管ノ部局長官ニ於テ前二條ノ求ニ應スルコトヲ怠リタルトキハ長官ハ之ヲ宮内大臣ニ具申スルコトヲ得

第十一條　長官ハ審査官又ハ審査官補ヲシテ主管ノ部局ニ就キ會計書類帳簿計表及現

金物件ノ現在額其ノ他土木工事ノ實況等ヲ檢査セシムルコトヲ得

第十二條　長官ハ宮内大臣ヲ經テ毎年審査ノ成蹟ヲ上奏シ及會計ニ關シ改正ヲ必要トスル事項アルコトヲ認メタルトキハ併セテ意見ヲ上奏スルコトヲ得

第十三條　會計審査ニ關スル規程ハ本令ニ定ムルモノヲ除クノ外勅裁ヲ經テ宮内大臣之ヲ定ム

附　則

第十四條　本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

第十五條　本令施行ノ際別ニ官記ヲ交付セス帝室會計審査局長ハ帝室會計審査局長官ニ任セラレタルモノトス

○帝室林野管理局官制

明治四十年十一月一日　皇室令第九號　改正　四二年第七號

朕帝室林野管理局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝室林野管理局官制

第一條　帝室林野管理局ハ宮内大臣ノ管理ニ屬シ土地及林野ノ管理經營ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條　帝室林野管理局ニ左ノ職員ヲ置ク

長官
主事
主事補
屬

第三條　長官ハ勅任トス局務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

第四條　主事ハ九人奏任トス内一人ヲ勅任トスコトヲ得庶務ヲ分掌ス

第四條ノ二　主事補ハ十人奏任トス主事ヲ助ク

第五條　屬ハ百四十人判任トス庶務ニ從事ス

第六條　帝室林野管理局ニ技師及技手ヲ置ク

技師ハ四十六人奏任トス内二人ヲ勅任トスコトヲ得技術ノ事ヲ分掌ス

技手ハ五百五十五人判任トス技術ニ從事ス

第七條　帝室林野管理局ノ事務ヲ分掌セシムル爲支廳ヲ置ク其ノ職制ハ勅裁ヲ經テ宮内大臣之ヲ定ム

附　則

第八條　本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

第九條　本令施行ノ際別ニ官記ヲ交付セス御料局長ハ帝室林野管理局長官ニ御料局主事ハ帝室林野管理局主事ニ御料局屬ハ帝室林野管理局屬ニ御料局技師及御料局技師

補ハ帝室林野管理局技師ニ御料局技手及御料局技手補ハ帝室林野管理局技手ニ任セラレタルモノトス

明治四十年十一月一日宮內省令第七號　改正　四二年第二號

帝室林野管理局支廳職制勅裁ヲ經テ左ノ通定ム

帝室林野管理局支廳職制

第一條　帝室林野管理局支廳ノ名稱位置及管轄區域ハ左ノ如シ

名稱	位置	管轄區域
札幌支廳	北海道札幌區	膽振國　石狩國　天鹽國　釧路國　日高國
東京支廳	東京府東京市	磐城國　岩代國　上野國　下野國　常陸國　上總國　下總國　武藏國　相模國　佐渡國　伊豆國田方郡ノ內熱海村宇佐美村網代村多賀村
名古屋支廳	愛知縣名古屋市	尾張國　三河國　美濃國　飛驒國　伊勢國　志摩國
靜岡支廳	靜岡縣靜岡市	駿河國　遠江國　伊豆國田方郡ノ內熱海村宇佐美村網代村多賀村ヲ除ク
甲府支廳	山梨縣甲府市	甲斐國
木曾支廳	長野縣西筑摩郡福島町	信濃國
青森支廳	青森縣青森市	渡島國　陸奥國　羽後國　陸前國　陸中國

第二條　各支廳ニ於テハ其ノ管轄區域ニ屬スル土地及林野ノ管理經營ニ關スル事務ヲ掌ル

第三條　各支廳ニ支廳長ヲ置ク帝室林野管理局主事ヲ以テ之ニ充ツ

支廳長ハ廳務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

第四條　各支廳ニ帝室林野管理局主事補技師屬及技手ヲ分屬セシム

第五條　各支廳ノ事務ヲ分擔セシムル爲出張所ヲ置キ前條ノ職員中ヨリ之ニ在勤セシム

各出張所ノ名稱位置及管轄區域ハ之ヲ告示ス

第六條　各支廳ニ分屬セシメ又ハ各出張所ニ在勤セシムル職員ノ配置ハ帝室林野管理局長官之ヲ定ム

附則

本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治四十一年四月十日宮內省令第四號

帝室林野管理局出張所職制勅裁ヲ經テ左ノ通定ム

帝室林野管理局出張所職制

第一條　帝室林野管理局出張所ノ名稱及位置ハ左ノ如シ

名稱	位置
豐住出張所	東京府東京市
京都出張所	京都府京都市
大阪出張所	大阪府大阪市
箱根出張所	神奈川縣足柄下郡箱根町
日光出張所	栃木縣上都賀郡日光町
熱田出張所	愛知縣名古屋市

第二條　豐住大阪及熱田ノ各出張所ニ於テハ木材ノ貯藏處理ニ關スル事務ヲ分掌シ京都出張所ニ於テハ山城大和攝津播磨但馬ノ五箇國所在ノ土地及林野ノ管理經營ニ關スル事務ヲ分掌シ箱根及日光ノ各出張所ニ於テハ湖魚養殖ニ關スル事務ヲ分掌ス

第三條　各出張所ニ所長ヲ置ク

所長ハ本局所屬ノ高等官又ハ判任官ノ中ヨリ之ヲ命ス

第四條　各出張所ニ本局所屬ノ屬及技手ヲ在勤セシム其ノ配置ハ帝室林野管理局長官之ヲ定ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治四十年十二月二十五日
宮内省告示第九號

帝室林野管理局支廳出張所ノ名稱位置及管轄區域左ノ通定メ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

札幌支廳出張所ノ名稱位置及管轄區域

名稱	位置	管轄區域			
		國	郡區	町	村
札幌	札幌	石狩	札幌區	厚田	
札幌	札幌區	石狩國	札幌郡	千歲ノ內	千歲村
苫牧小村	白老	膽振	膽振國	千歲ノ內	烏柵舞村
苫牧小村	勇拂	膽振	勇拂郡	千歲ノ內	惠庭村
夕張	夕張	石狩	石狩國	夕張郡	登川村
空知	空知	石狩	石狩國	空知郡	砂川村
空知	空知	石狩	石狩國	空知郡	下富良野村ヲ除ク
雨龍	雨龍	石狩	石狩國	雨龍郡	深川村
增毛	增毛	天鹽	天鹽國	增毛郡	增毛町
增毛	留萌	天鹽	增毛	留萌	

東京支廳出張所ノ名稱位置及管轄區域

名稱	位置	國	郡	市	町	村	管轄區域
羽蜺		天鹽國	苫前郡			羽蜺村	天鹽 苫前
上川		石狩國	上川郡			神樂村	石狩 上川 空知 下富良野村 ノ內
名寄		天鹽國	上川郡			名寄村	天鹽 上川
中川		天鹽國	中川郡			中川村	天鹽 中川 天鹽
川上		釧路國	川上郡			弟子屈村	釧路 川上
下野		河內					
宇都宮		芳賀					
上都賀							
前橋		上野國		前橋市			上野
碓氷		吾妻	群馬	勢多	利根	山田	新田 田村 石川 西白河 盤城 安積 岩瀨 岩代 那須 安蘇 鹽谷 宇都宮 下野國 宇都宮市

北甘樂	東京市	豐多摩	南多摩	北多摩	西多摩	君津	夷隅	長生	市原	千葉	東葛飾	香取	東茨城	鹿島	東京 武藏國 東京市 常陸 下總 上總 武藏
佐渡	佐渡郡	佐渡國	相模國 中郡 大磯町	大磯	三浦	鎌倉	高座	市橫須賀	愛甲	足柄上	足柄下	中	久良岐	都筑	橘樹	橫濱市	武藏	伊豆	田方 熱海町 網代村 ノ內 宇佐美村 多賀村	佐渡	相模 津久井

名稱	位置	國	郡市	町村
	河原田町			

名古屋支廳出張所ノ名稱位置及管轄區域

名稱	位置	國	郡市	町村
愛知	尾張國名古屋市	尾張	愛知	
			東春日井	
			名古屋市	
			西春日井	
			中島	
			海東	
			海西	
			丹羽	
			葉栗	
			知多	
			郡上	上有知町 下牧村 安曾野村 洲原村
		美濃	武儀ノ内	上牧村 北武藝村 乾村 東武藝村 大矢田村 瀬尻村 倉知村 吉田村 中有知村 洞戸村 板取村 西武藝村 南武藝村 藍見村 小金田村 關町 下有知村 富野村ノ内(大字西神野上大野志津野小野)
			稻葉	
			本巢	
			山縣	
			岐阜市	
			羽島	
			安八	
			揖斐	
			海津	
			養老	
			不破	

名稱	位置	國	郡市	町村
岡崎	三河國額田郡岡崎町	三河	東加茂ノ内	賀茂村ノ内(大字明川大多賀連谷平澤安賀京東大見椿立山ヶ谷葛澤山ノ中立御內藏連綾渡大藏連漆畑室口有洞)盛岡村ノ内(大字川端戸中)下山村ノ内(大字羽布立岩大林高野野原吉平字連野阿藏梨野)ヲ除ク
			西加茂	
			碧海	
			額田	
			幡豆	
			豐橋市	
			渥美	
			寶飯	
新城	三河國南設樂郡新城町	三河	北設樂	
			八名	
			東加茂ノ内	賀茂村ノ内(大字明川大多賀連谷平澤安賀京東大見椿立山ヶ谷葛澤山ノ中立御內藏連綾渡大藏連漆畑室口有洞)盛岡村ノ内(大字川端戸中)下山村ノ内(大字羽布立岩大林高野野原吉平字連野阿藏梨野)
			南設樂	
中津	美濃國惠那郡中津町	美濃	惠那ノ内	中津町 三郷村ノ内(大字野井佐々良木椋實) 長島村 東野村 阿木村 上村 遠山村 明知町 串原村 吉田村 鶴岡村 坂本村 武並村 大井町 落合村 本郷村 岩村町 下原田村 靜波村 三濃村 陶村
			土岐	
付知	美濃國惠那郡付知町	美濃	惠那ノ内	加子母村ノ内(字西股入渡合尾山) 中野方村 福岡村 坂下村 付知町 笠置村 蛭川村 苗木町 川上村
			加茂ノ内	佐見村ノ内(大字上佐見) 黑川村 東白川村ノ内(大字神土越原)
小坂	飛驒國益田郡小坂町	飛驒	益田ノ内	馬瀬村竹原村上原村下原村中原村下呂村川西村ノ内(大字跡津西上田)ヲ除ク

靜岡支廳出張所ノ名稱位置及管轄區域

名稱	位置		管轄區域	
	國	郡	市	町村
下呂	飛驒國	益田郡		
		下呂村		
美濃	飛驒	益田		馬瀨村
		ノ內		上原村
				中原村
				竹原村
				下原村
				下呂村
				川西村ノ內（大字跡津西上田）
	美濃	惠那		加子母村ノ內（字西股入渡合尾山）ヲ除ク
		ノ內		
七宗	美濃國	加茂郡		
	河邊町			
	美濃	武儀		上有知町
		ノ內		安曾野村
				下牧村
				洲原村
				板取村
				上牧村
				洞戸村
				北武儀村
				東武儀村
				南武儀村
				乾村
				西武儀村
				藝村
				大矢田村
				倉知村
				藍見村
				關町
				吉田村
				瀨尻村
				下有知村
				小野村（大字西神野上大野志津野小野）ヲ除ク
				金田村
				中有知村
				富野村
				ノ內
	加茂			佐見村ノ內（大字上佐見黑川原）ヲ除ク
	ノ內			東白川村ノ內（大字神土越）
度會	伊勢國	宇治山田市		
	宇治山田市			
	伊勢	度會		
		多氣		
		志摩		
	志摩			

靜岡支廳出張所ノ名稱位置及管轄區域

名稱	位置		管轄區域	
	國	郡	市	町村
濱松	遠江國	濱名郡		
	濱松町			
	遠江	濱名		
		引佐		
		磐田		掛塚町
		ノ內		上阿多古村
				熊村
				下阿多古村
氣田	遠江國	周智郡		
	氣田村	氣多村		
	遠江	周智		
		ノ內		氣多村
				大居村
				城西村
	磐田			二俣町
		ノ內		龍山村
				光明村
				龍川村
				佐久間村
				熊切村
				浦川村
				奥山村
掛川	遠江國	小笠郡		
	掛川町			
	遠江	小笠		
				掛塚町
				熊村
				上阿多古村
				下阿多古村
				二俣町
				光明村
				龍山村
				龍川村
	磐田			古村
		ノ內		山香村
				佐久間村
				浦川村
				村ヲ除ク
	榛原			
	ノ內			天方村
				一宮村
				森町
				園田村
				上川根村中川根村ヲ除ク
	周智			
	ノ內			飯田村
				宇刈村
				山梨町
				久努西村
				三倉村
駿河	志太			
	ノ內			東川根村德山村笹間村ヲ除ク

木曾支廳出張所ノ名稱位置及管轄區域

名稱	位置		管轄區域	
	國	郡	市	町村
千頭	遠江國	榛原郡		
	上川根千頭村			
	駿河	志太		
		ノ內		東川根村
				笹間村
				德山村
		安倍		
		庵原		
		靜岡		
	遠江	榛原		
		ノ內		上川根村
				中川根村
沼津	駿河國	駿東郡		
	沼津町			
	駿河	駿東		
		富士		
天城	伊豆國	田方郡		
	上狩野村			
	伊豆	田方		
		ノ內		熱海町宇佐美村網代村多賀村ヲ除ク
河津	伊豆國	賀茂郡		
	下河津村			
	伊豆	賀茂		
飯田	信濃國	下伊那郡		
	飯田町			
	信濃	上伊那		
		ノ內		上片桐村
				飯島村
				宮田村
				片桐村
				七久保村
				赤穗村
				西春近村
鷲川	信濃國	西筑摩郡		
	櫛川村			
	信濃	西筑摩		
		ノ內		櫛川村
藪原	信濃國	西筑摩郡		
	木祖村			
	信濃	西筑摩		
		ノ內		木祖村
				奈川村
福島	信濃國	西筑摩郡		
	福島町			
	信濃	西筑摩		
		ノ內		新開村
				福島町ノ內（字和合澤ヲ除ク）
				日義村
王瀧	信濃國	西筑摩郡		
	王瀧村			
	信濃	西筑摩		
		ノ內		開田村
				藤掛大ケ峯ヲ除ク）
				三岳村ノ內（字赤澤キツカフヨリ赤其マテヲ除ク）
				王瀧村ノ內（字赤澤キツカフヨリ赤其マテ）
上松	信濃國	西筑摩郡		
	駒ケ根村			
	信濃	西筑摩		
		ノ內		駒ケ根村
				和合澤）
				福島町ノ內（字王瀧村ノ內（字赤澤キツカフヨリ赤其マテ）
				三岳村ノ內（字藤掛大ケ峯）
野尻	信濃國	西筑摩郡		
	大桑村			
	信濃	西筑摩		
		ノ內		大桑村
				三ケ其箱登八人石澤）
				讀書村ノ內（字
諏訪	信濃國	諏訪郡		
	上諏訪町			
	信濃	諏訪		
		上伊那		
		ノ內		上片桐村七久保村飯島村赤穗村宮田村西春近村片桐村ヲ除ク

甲府支廳出張所ノ名稱位置及管轄區域

名稱	位置	管轄區域	
	國	郡	町村
三殿	信濃國	西筑摩郡諏訪村	西筑摩ノ内
			諏訪村ノ内（字三ヶ其箱巒八人石澤ヲ除ク）
妻籠	信濃國	西筑摩郡吾妻村	西筑摩ノ内
			山口村
			吾妻村
			田立村
湯舟澤	信濃國	西筑摩郡神坂村	西筑摩ノ内
			神坂村
谷村	甲斐國	南都留郡谷村町	南都留
			北都留
甲府	甲斐國	甲府市	甲府
			西山梨
			東山梨
			東八代
			國母村
			三町村
			貢川村
			西條村

名稱	位置	管轄區域	
	國	郡	町村
韮崎	甲斐國	北巨摩郡韮崎町	北巨摩
鰍澤	甲斐國	南巨摩郡鰍澤町	西八代
			南巨摩
			中巨摩ノ内
			國母村
			積玉村
			貢川村
			三町村
			西條村
			稲積村
			龍王村
			小井川村
			大鎌田村
			二川村
			福岡村
			宮本村
			清川村
			玉幡村
			忍村
			花輪村
			常永村
			松島村
			池田村
			睦澤村
			吉澤村
			積花村
			玉幡村
			大鎌田村
			常永村
			二川村
			福岡村
			池田村
			宮本村
			睦澤村
			清川村
			吉澤村ヲ除ク

青森支廳出張所ノ名稱位置及管轄區域

名稱	位置	管轄區域	
	國	郡	町村
三戸	陸奥國	三戸郡	三戸
上北	陸奥國	上北郡	上北
下北	陸奥國	下北郡	下北
野邊地	陸奥國	野邊地郡	野邊地町
盛岡	陸中國	盛岡市	盛岡
和賀	陸中國	和賀郡	和賀
膽澤	陸中國	膽澤郡	膽澤
伊達	陸前國	伊達郡	伊達
宮城	陸前國	宮城郡	宮城
栗原	陸前國	栗原郡	栗原
登米	陸前國	登米郡	登米
秋田	羽後國	秋田郡	秋田
山本	羽後國	山本郡	山本
津輕	陸奥國	津輕郡	津輕
函館	渡島國	函館區	函館區
茅部	渡島國	函館區	茅部
上磯	渡島國	函館區	上磯
松前	渡島國	函館區	松前
檜山	渡島國	檜山郡江差北新町	檜山
江差	渡島國	檜山郡江差北新町	江差

明治四十年十二月二十九日
宮内省告示第十二號

明治四十一年一月一日ヨリ京都市ニ帝室林野管理局ノ出張所ヲ置ク其ノ名稱及管轄區域ハ左ノ如シ

名稱	管轄區域
帝室林野管理局京都出張所	山城國 大和國 攝津國 播磨國 但馬國

明治四十年十一月一日
皇室令第十二號

朕帝室林野管理局臨時職員官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝室林野管理局臨時職員官制

御料ニ屬スル土地及林野ノ整理ニ關スル事務ニ從事セシムル爲帝室林野管理局ニ臨時左ノ職員ヲ置ク

屬　三十人
技手　八十人

附則

本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際別ニ官記ヲ交付セス御料局臨時特設職員中御料局屬ハ帝室林野管理局屬ニ御料局技手及御料局技手補ハ帝室林野管理局技手ニ任セラレタルモノトス

○御歌所官制

明治四十年十一月一日
皇室令第十號

朕御歌所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御歌所官制

第一條　御歌所ハ宮内大臣ノ管理ニ屬シ御製御歌及歌御會ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條　御歌所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長
主事
錄事

第三條　所長ハ勅任トス御製御歌ノ事ヲ祇承シ所務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

第四條　主事ハ一人奏任トス庶務ヲ掌ル

第五條　錄事ハ六人判任トス庶務ニ從事ス

附則

本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十年宮内省達甲第七號ハ之ヲ廢止ス

○帝室博物館官制

明治四十年十一月一日
皇室令第十一號　改正　四二年第八號

朕帝室博物館官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝室博物館官制

第一條　帝室博物館ハ宮内大臣ノ管理ニ屬シ古今ノ技藝品ヲ蒐集保存シ及衆庶ノ觀覽

參考ノ用ニ供スル所トス

第二條　帝室博物館ハ之ヲ東京京都及奈良ニ置ク

第三條　東京帝室博物館ニ帝室博物館總長ヲ置ク勅任トス各帝室博物館正倉院表慶館上野公園及上野動物園ノ事務ヲ統理シ所部職員ヲ監督ス

第四條　東京帝室博物館ニ主事一人ヲ置ク奏任トス庶務ヲ掌ル

第五條　京都帝室博物館及奈良帝室博物館ニ館長各一人ヲ置ク奏任トス館務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

第六條　各帝室博物館ニ左ノ職員ヲ置ク

部長
部次長
屬
技手

第七條　部長ハ東京帝室博物館四人京都及奈良帝室博物館各二人共ニ奏任トス列品部門ノ別ニ從ヒ部務ヲ分掌ス

第八條　部次長ハ東京帝室博物館四人京都及奈良帝室博物館各二人共ニ判任トス部長ヲ助ク

第九條　屬ハ十八人判任トス庶務ニ從事ス

第十條　技手ハ四十人判任トス技術ニ從事ス

附則

第十一條　本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十三年宮内省達甲第三號ハ之ヲ廢止ス

第十二條　本令施行ノ際別ニ官記ヲ交付セス各帝室博物館書記ハ各帝室博物館屬ニ任セラレタルモノトス

○宮内官等俸給令（摘錄）

明治四十年十一月一日皇室令第十三號　改正　四二年第九號

朕宮内官官等俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

宮内官官等俸給令

第一條　親任式ヲ以テ任スル官ヲ除クノ外高等官ヲ分テ八等トス親任式ヲ以テ任スル官及一等官二等官ヲ勅任官トシ三等官乃至八等官ヲ奏任官トス

第二條　高等官及判任官ノ官等ハ別表ニ依ル

第十二條　皇后宮職女官及東宮職女官ノ官等俸給ニ關スル規程ハ別ニ之ヲ定ム

（別表）

宮內高等官官等表

勅任官	親任官	一等	二等	三等	四等	五等	六等	七等	八等
宮內大臣									
宮內次官				宮內大臣秘書官	同	同	同	同	
				宮內書記官	同	同	同	同	
				宮內省翻譯官		同	同	同	同
宮中顧問官									
侍從長	侍從職幹事			侍從	同	同	同		
式部長官	式部次官					次侍從	同	同	同

式部官	同	同	同	同	同	同	同	同	同
掌典長									
掌典次長	掌典	同	同	同	同	同	同	同	同
內藏寮主事	同	同	同	同	同	同	同	同	同
圖書寮主事	同	同	同	同	同	同	同	同	同
圖書寮編修官	同	同	同	同	同	同	同	同	同
爵位寮主事	同	同	同	同	同	同	同	同	同
內藏頭									
圖書頭									
爵位頭									
侍醫頭									
樂部長	樂部	同	同	同	同	同	同	同	同
內掌典									
樂長									

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
				侍醫寮主事	同	同	同	同	
		侍醫	同	同	同	同	同		
						侍醫補	同	同	同
				藥劑師長	同	同	同		
						藥劑師	同	同	同
		大膳頭	同						
				大膳寮主事	同	同	同	同	
						主膳長	同	同	同
		諸陵頭	同						
				諸陵寮主事	同	同	同	同	
		主殿頭	同						
				主殿寮主事	同	同	同	同	
				皇宮警視長	同	同	同		
						皇宮警視	同	同	同
		內匠頭	同						

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
				內匠寮主事	同	同	同	同	
			內匠寮技師	同	同	同	同	同	同
		內苑頭	同						
				內苑寮主事	同	同	同	同	
				內苑寮技師	同	同	同	同	同
		主馬頭	同						
				主馬寮主事	同	同	同	同	
					車馬監	同	同	同	
						調馬師	同	同	同
						馬醫師	同	同	同
			主馬寮技師						
				主馬寮技師	同	同	同	同	同
		主獵頭	同						
				主獵寮主事	同	同	同	同	
			主獵官	同	同	同	同	同	同

	調度頭	同																	
			調度係主事	同															
內大臣																			
	內大臣秘書官長	同																	
			內大臣秘書官	同															
	皇后宮大夫	同																	
			皇后宮主事	同															
	東宮大夫	同																	
	東宮侍從長	同																	
			東宮侍從	同															
	東宮侍講	同																	
			東宮主事	同															
	別當																		
	家令	同																	
	帝室會計審査局長官	同																	

			帝室會計審査局主事	同															
			帝室會計審査官	同															
	帝室林野管理局長官	同																	
			帝室林野管理局主事	同															
			帝室林野管理局技師	同															
	御歌所長	同																	
			御歌所主事	同															
	學習院長	同																	
	學習院女學部長																		
			學習院主事	同															
	學習院教授	同																	
			學習院學生監	同															
	帝室博物館總長	同																	

宮內判任官官等表

一等	二等	三等	四等	五等
		帝室博物館主事	各帝室博物館部長	
		同	同	同
		京都帝室博物館長	同	同
		同	同	同
宮內屬	同	同	同	同
舍人	同	同	同	同
宮內掌典	同	同	同	同
掌典補	同	同	同	同
樂師	同	同	同	同
醫員	同	同	同	同
藥劑員	同	同	同	同
主膳	同	同	同	同
		陵墓守長	陵墓名譽守部	同
內舍人	同	同	同	同
皇宮醫部	同	同	同	同
內匠寮技手	同	同	同	同
內兎寮技手	同	同	同	同
馬醫	同	同	同	同
主馬寮技手	同	同	同	同
		獵場監守長	同	同
		獵場名譽監守	同	同
		獵師	同	同
內大臣屬	同	同	同	同
皇后宮屬	同	同	同	同
東宮屬	同	同	同	同
東宮內舍人	同	同	同	同
家扶	同	同	同	同
家從	同	同	同	同

帝室會計審査局屬	同	同	同	同	同	同	同	同
帝室林野管理局屬	同	同	同	同	同	同	同	同
帝室林野管理局技手	同	同	同	同	同	同	同	同
御歌所錄事	同	同	同	同	同	同	同	同
學習院書記	同	同	同	同	同	同	同	同
學習院助教授	同	同	同	同	同	同	同	同
各帝室博物館部次長	同	同	同	同	同	同	同	同
各帝室博物館屬	同	同	同	同	同	同	同	同
各帝室博物館技手	同	同	同	同	同	同	同	同

○勅任待遇奏任待遇宮內職員職制

明治四十年十一月一日
宮內省令第五號

勅任待遇奏任待遇宮內職員職制勅裁ヲ經テ左ノ通定ム

勅任待遇奏任待遇宮內職員職制

第一條　侍從職ニ侍從職勤務及侍從職出仕ヲ置ク

侍從職勤務ハ三人侍從職出仕ハ五人共ニ奏任待遇トス側近ニ奉仕ス

第二條　式部職ニ舍人長ヲ置ク

舍人長ハ五人奏任待遇名譽職トス典式ニ關シ式部官ヲ助ク

第三條　諸陵寮ニ陵墓名譽守長ヲ置キ主獵寮ニ獵場名譽監守長ヲ置ク

陵墓名譽守長及獵場名譽監守長ハ各五人共ニ奏任待遇名譽職トス

第四條　御歌所ニ寄人及參候ヲ置ク

寄人ハ七人勅任待遇又ハ奏任待遇名譽職トス歌詠ニ關スル編纂選述ヲ分掌ス

參候ハ十五人奏任待遇名譽職トス歌御會ノ事ヲ分掌ス

第五條　各帝室博物館ニ評議員及學藝委員ヲ置ク

評議員ハ東京帝室博物館五人京都及奈良帝室博物館各二人共ニ勅任待遇又ハ奏任待遇名譽職トス總長又ハ館長ノ諮詢ニ應ス

學藝委員ハ東京帝室博物館七人京都及奈良帝室博物館各三人共ニ奏任待遇名譽職トス列品ノ鑑査解說及編纂著譯ヲ分掌ス

第六條　御用掛ハ本官アル者ヲ除クノ外勅任待遇又ハ奏任待遇トシ名譽職ト爲スコトヲ得

本官アル者ハ其ノ本官ノ待遇ヲ享ク

第七條　侍從職勤務侍從職出仕及御用掛ノ俸給ハ年俸トシ左ノ定限ニ依ル

侍從職勤務　千二百圓以下

侍從職出仕	六百圓以下
勅任待遇御用掛	三千圓以下
奏任待遇御用掛	二千圓以下

宮內官官等俸給令第六條第十條乃至第十四條第十七條乃至第十九條中高等官ニ關スル規定ハ前項ノ職員ニ之ヲ準用ス

附則

本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

○判任待遇等外宮內職員職制

明治四十二年五月十四日
宮內省令第三號

判任待遇等外宮內職員職制左ノ通定ム

判任待遇等外宮內職員職制

第一條　大臣官房ニ受授員ヲ置ク

受授員ハ三十人等外トス文書受授ノ雜務ニ從事ス

第二條　式部職樂部ニ樂生ヲ置ク

樂生ハ三十人等外トス樂事ヲ修習ス

第三條　大膳寮ニ膳手ヲ置ク

膳手ハ專任十五人等外トス膳羞ノ雜務ニ從事ス

第四條　諸陵寮ニ陵墓守部ヲ置ク

陵墓守部ハ百八十人判任待遇トス陵墓ノ管守ニ從事ス

第五條　主殿寮ニ仕人ヲ置ク

仕人ハ百九十五人等外トス宮殿管守ノ雜務ニ從事ス

主殿寮警察部ニ皇宮警手ヲ置ク

皇宮警手ハ三百三十八人判任待遇トス皇宮警部ヲ助ク

第六條　主馬寮ニ蹄鐵工ヲ置ク

蹄鐵工ハ五人等外トス蹄鐵ノ技術ニ從事ス

第七條　主獵寮ニ獵場監守及鷹匠ヲ置ク

獵場監守ハ專任三十五人判任待遇トス獵場ノ管守ニ從事ス

鷹匠ハ八人判任待遇トス鷹師ヲ助ク

第八條　陵墓守部獵場監守ノ俸給ハ年俸皇宮警手鷹匠ノ俸給ハ月俸トシ左ノ定限ニ依ル

陵墓守部	自四十八圓至七十圓
獵場監守	自二十圓至百八十圓
皇宮警手	自十二圓至二十圓

鷹匠　自十圓至三十圓

第九條　等外職員ノ俸給ハ月俸トシ左ノ定限ニ依ル

受授員　自十圓至十七圓

樂生　自五圓至十圓

膳手　自十圓至十七圓

仕人　自十圓至十七圓

蹄鐵工　自十二圓至四十圓

第十條　初メテ皇宮警手ニ採用スル者ノ俸給ハ十四圓以下トシ受授員膳手及仕人ニ採用スル者ノ俸給ハ十二圓以下トス

判任待遇以上ノ官職ニ在ル者又ハ在リタル者ヲ皇宮警手ニ採用スル場合及等外以上ノ官職ニ在ル者又ハ在リタル者ヲ受授員膳手若ハ仕人ニ採用スル場合ニ於テハ前項ノ規定ヲ適用セス但シ前官職ノ俸給額ヲ超ユルコトヲ得ス

第十一條　判任待遇及等外ノ職員ハ六箇月ヲ經過スルニ非サレハ增俸スルコトヲ得ス

第十二條　增俸ハ判任待遇職員ニシテ年俸ヲ賜フ者ニ在リテハ三十六圓以內月俸ヲ賜フ者及等外職員ニ在リテハ三圓以內トス

第十三條　宮內官等俸給令第六條第十條乃至第十四條第十七條乃至第十九條ノ規定ハ本令ノ職員ニ之ヲ準用ス

附則

本令ハ明治四十二年六月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治四十年宮內省令第六號ハ之ヲ廢止ス

○學習院官制

明治三十九年四月九日宮內省達甲第五號

明治三十一年八月宮內省達甲第五號學習院官制左ノ通改正ス

學習院官制

第一條　學習院ハ宮內大臣ノ管理ニ屬シ學習院學制ノ定ムル所ニ依リ男女ノ學生教育ノ事ヲ掌ル

第二條　學習院ニ左ノ職員ヲ置ク

院長

女學部長

主事

書記

第三條　院長ハ一人勅任トス院務ヲ統理シ兼テ職員ヲ監督ス

第四條　女學部長ハ一人二等トシ教授ノ內ヨリ之ニ兼任ス院長ノ命ヲ承ケ女學部ノ事

ヲ掌理ス

第五條　主事ハ二人奏任トシ教授ノ內ヨリ之ニ兼任ス上官ノ命ヲ受ケ庶務ヲ分掌ス

第六條　書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第七條　學習院ニ教授學生監助教授ヲ置ク

教授ハ六十五人勅任又ハ奏任トシ院長ノ命ヲ承ケ學生教授ノ事ヲ分掌ス

學生監ハ二人奏任トシ教授ノ內ヨリ之ニ兼任ス院長ノ命ヲ承ケ學生ノ紀律ニ關スル事ヲ分掌ス

助教授ハ判任トス教授ノ職務ヲ助ク

第八條　院長ハ所管ノ事務ニ關シ必要アルトキハ囑托員ヲ置クコトヲ得其ノ奏任以上ノ待遇ニ係ルモノニ付テハ宮內大臣ニ具申スヘシ

第九條　院長ハ前條ノ囑托員ニ報酬ヲ爲スコトヲ得

第十條　院長ハ教育上ノ規律ニ關シ必要ナル規定及處務細則ヲ定ムルコトヲ得但宮內大臣ニ報告スヘシ

〔第十一條　院長、勅任教授ノ俸給ハ宮內省官制第五十條高等官俸給表ニ奏任教授ノ俸給ハ同上技術官俸給表ニ書記ノ俸給ハ同條屬ノ俸給表ニ助教授ノ俸給ハ同條技手ノ俸給表ニ依ル〕

第十二條　教授助教授ニハ學科ノ種類職務ノ繁簡ニ依リ俸給表以外ノ俸給ヲ給スルコトヲ得但其ノ官等相當ノ最高額ヲ超ユルコトヲ得ス

附　則

第十三條　此官制ハ明治三十九年四月十一日ヨリ施行ス

第十四條　此官制ニ別段ノ規定ナキモノハ宮內省官制ニ依ル

第十五條　明治十九年二月宮內省達第二號ハ此官制施行ノ日ヨリ廢止ス

○侍從武官府官制

明治四十一年十二月二十九日勅令第三百十九號

朕侍從武官府官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

侍從武官府官制

第一條　侍從武官府ニ侍從武官長及侍從武官ヲ置ク

第二條　侍從武官長ハ陸軍大中將又ハ海軍大中將ヲ以テ之ニ親補ス

第三條　侍從武官ハ陸軍將校及海軍將校ヲ以テ之ニ補ス其ノ定員左ノ如シ

一　陸軍中少將、佐官及大尉五人

二　海軍中少將、佐官及大尉三人

第四條　侍從武官長及侍從武官ハ　天皇ニ常侍奉仕シ軍事ニ關スル奏上奉答及命令ノ傳達ニ任シ觀兵演習行幸其ノ他祭儀禮典宴會謁見等ニ陪侍扈從ス

第五條　侍從武官長及侍從武官ハ演習其ノ他軍事上視察ノ爲差遣セラルルコトアルヘシ

第六條　侍從武官長ハ侍從武官ノ勤務ヲ規定シ且之ヲ監督ス

第七條　侍從武官長及侍從武官ハ參謀トス

第八條　侍從武官長及侍從武官ハ宮內省ノ規定ヲ遵奉スヘシ

第九條　侍從武官府ニ陸軍屬及海軍屬各二人ヲ附ス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

侍從武官官制ハ之ヲ廢止ス

本令施行ノ際現ニ侍從武官又ハ之ニ附屬スル陸海軍屬ノ職ニ在ル者ハ別ニ辭令ヲ用ヰスシテ各侍從武官又ハ之ニ附屬スル陸海軍屬ニ補任セラレタルモノトス

○東宮武官官制

明治三十年十月二十一日　勅令第三百七十一號　改正　三一年第一〇〇號

朕東宮武官官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

東宮武官官制

第一條　東宮武官ヲ置ク左ノ如シ

東宮武官長　東宮武官中高級故參ノ者ヲ以テ之ニ補ス

東宮武官　陸軍將官及佐尉官　海軍將官及佐尉官

第二條　東宮武官長武官ハ皇太子ノ威儀整飾ヲ奉助シ行軍、觀兵、演習其他ノ軍務及祭儀、禮典、宴會、謁見等ニ陪侍扈從ス

第三條　東宮武官ハ常侍奉仕ス

第四條　東宮武官長武官ハ行啓、祭儀、禮典、宴會、謁見等ノ事項ニ於テハ宮內省ノ規則ヲ遵守スヘシ

第五條　東宮武官長ハ武官ノ勤務細則ヲ規定ス

第六條　第一條ニ揭グル職員ノ外東宮武官ニ陸軍屬二名海軍屬一名ヲ附ス

○皇族附陸軍武官官制

明治二十九年八月十二日　勅令第二百八十一號　改正　三三年第四一號

朕皇族附陸軍武官官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

皇族附陸軍武官官制

第一條　陸軍武官タル皇族ニハ皇族附陸軍武官ヲ附屬シ各兵科佐尉官ヲ以テ之ニ補ス

第二條　皇族附陸軍武官ハ其附屬スル皇族ノ威儀整飾ヲ奉助シ行軍、觀兵、演習其他ノ軍務及祭儀禮典宴會等ニ隨從スルヲ任トス

第三條　皇族附陸軍武官ハ祭儀禮典宴會等ノ事項ニ關シテハ宮内省ノ規定ヲ遵守スヘシ

○皇族附海軍武官官制

明治三十年十月二十日　勅令第三百六十一號　改正　三二第四四〇號

朕皇族附海軍武官官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

皇族附海軍武官官制

第一條　海軍武官タル皇族ニハ皇族附海軍武官ヲ附屬シ海軍佐尉官ヲ以テ之ニ充ツ

第二條　皇族附海軍武官ハ其ノ附屬スル皇族ノ威儀整飾ヲ奉助シ軍務祭儀禮典及宴會等ニ隨從スルヲ任トス

第三條　皇族附海軍武官ハ祭儀禮典宴會等ノ事項ニ關シテハ宮内省ノ規定ヲ遵守スヘシ

雜部

○非常竝御近火ノ節號砲發射

明治五年三月九日　太政官布告第七十五號

自今非常竝御近火ノ節ハ大砲(三發)ヲ以テ合圖ト定候事

但御近火ノ節鐘鼓打交候儀ハ廢止候事

明治五年三月十四日　太政官布告第八十三號

非常竝御近火ノ節大砲三發ヲ以テ合圖ト定メ候段相達置候處非常ハ五發御近火ハ三發ト改定候條此旨更ニ相達候事

明治五年二月四日　史官達　諸省府縣

御近火境界

本丸大手　和田倉　馬場先　櫻田　半藏　田安　清水　竹橋　平川

右御門外ト雖モ風並ニ依リ候テハ號報相發候事

○御近火並非常ノ節半鐘打方

明治六年六月八日
太政官布告第百九十三號

〔赤阪假皇居〕御近火並非常ノ節號報相聞エ次第各區火ノ見ニ於テ御近火ハ半鐘四點ツ、非常ハ五點ツ、連々打鳴シ候條此旨可相心得事

○皇城接近ノ場所ニ於テ開店商業ヲ許サス

明治九年一月二十日
太政官達

東京府

皇城接近之場所ニ於テ商店ヲ開キ候テハ不取締ニ付左ノ區域内ハ開店商業不相成儀ト可心得此旨相達候事

櫻田　馬場先　和田倉　雉子橋　一ツ橋　神田橋　常盤橋　道三橋　錢瓶橋入堀ヲ境トス

○正式勅使參向内規

明治十二年十一月十二日
内務省達番外

〔東京警視本署〕
府縣東京府ヲ除ク

勅使參向ノ節内規別紙之通候條自今宮内省ヨリ通報次第警備方可取計此旨相達候事

（別紙）

正式勅使參向内規

第一條　此内規ノ管スル期限ハ詔書祭文ヲ受ケ皇居ヲ出ルヨリ復命迄ノ時間又各地方ニ於テハ其當日旅館ヲ出ルヨリ旅館ニ歸ル迄ノ時間トス

第二條　使竝ニ隨員大禮服ヲ著用ス

第三條　詔書祭文ハ錦ノ袋ニ納テ隨員首ニ掛ク若シ隨員ナクレハ勅使自ラ之ヲ捧持スル等ハ總テ時宜ニヨル

第四條　下乘ハ皇族下乘所ニ於テス

第五條　乘用ハ馬車又ハ騎馬タルヘシ

第六條　警備トシテ警部四騎ヲ付ス二騎前ニアリ二騎後ニアリ

第七條　途上常備ノ巡査ヲシテ一層注意セシム

○刑法（摘錄）

明治四十年四月二十四日
法律第四十五號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル刑法改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

刑法別冊ノ通之ヲ定ム

此法律施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

明治十三年第三十六號布告刑法ハ此法律施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

（別冊）

刑法

第二編　罪

第一章　皇室ニ對スル罪

第七十三條　天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子又ハ皇太孫ニ對シ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタル者ハ死刑ニ處ス

第七十四條　天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子又ハ皇太孫ニ對シ不敬ノ行爲アリタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

神宮又ハ皇陵ニ對シ不敬ノ行爲アリタル者亦同シ

第七十五條　皇族ニ對シ危害ヲ加ヘタル者ハ死刑ニ處シ危害ヲ加ヘントシタル者ハ無期懲役ニ處ス

第七十六條　皇族ニ對シ不敬ノ行爲アリタル者ハ二月以上四年以下ノ懲役ニ處ス

（明治四十一年勅令第百六十三號ヲ以テ同年十月一日ヨリ施行ノ旨公布セラル）

皇室典令集　終

明治四十二年十一月十日印刷
明治四十二年十一月十六日發行

皇室典令集奥書
正價金九拾錢

編纂兼發行者　長濃貞夫　攝津國武庫郡須磨村ノ内西須磨三十八番屋敷ノ四

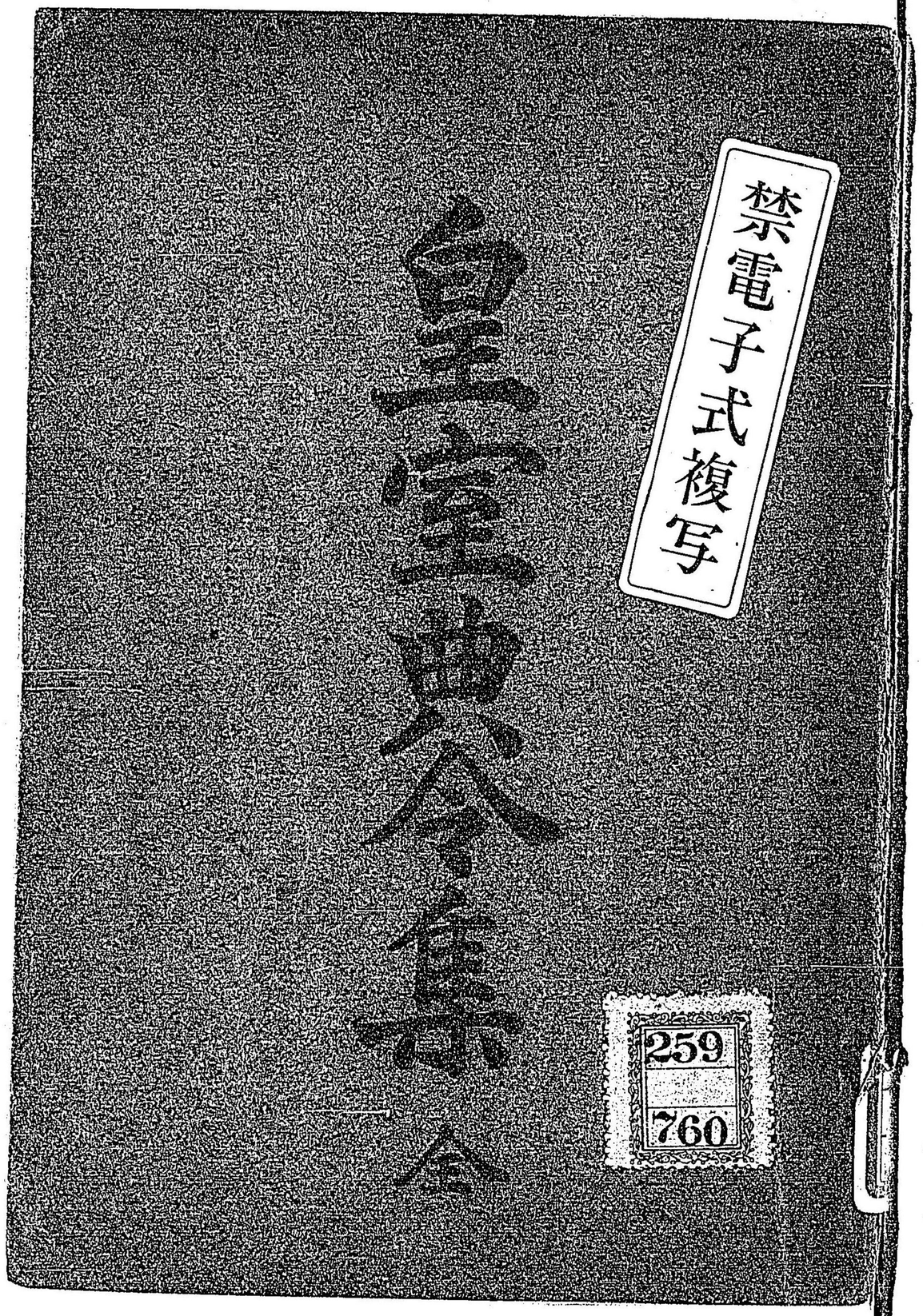
印刷者　辻雄　神戸市三ノ宮町一丁目三百二十番屋敷

印刷所　明輝社　神戸市三ノ宮町一丁目三百二十番屋敷

發行所　明輝社　神戸市三ノ宮町一丁目三百二十番屋敷

不許複製

259
760



031540-000-2

CZ-236-02

皇室典令集

明輝社

M42

BBE-0140